
ディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ

ハイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ

【Nコード】

N3781I

【作者名】

ハイド

【あらすじ】

スマブラと仮面ライダーディケイドのコラボです。

MOTHER2のネスがディケイドとなって仲間達と共に9つの世界を旅する！

果たしてネスはその瞳で何を見る！！！？

序章「ポーラを見た夢」(前書き)

前から、ディケイドの小説が書きたいと思っていました。

序章「ポーラの見た夢」

ポーラは夢を見ていた……。

彼女は廃墟に立っていた。

ここは何処なんだろう……。あたりを見回す。

彼女の周りには誰もいない。2人の友達も、愛しいあの少年も……。

うおおおおおおおおおおおっ!!!

ふと唐突に雄たけびが聞こえる。振り向くと色々な仮面をかぶり、鎧をまとった戦士達が何かと戦っている。

ぐあああああああああああっ！

だが、謎の光の弾丸によって傷つけられていく。

また一人……。また一人……。戦士たちは倒れていった。

その光景は戦い等ではない……。破壊、純粹なる破壊であった。

やがて全ての戦士達が物言わぬ骸と化し、静かになった廃墟にまばゆき光をまといし仮面の戦士が降り立った。

ポーラは戦士を見てこうつぶやいた。

「デイクイド……」

と。

そこでポーラは夢から覚めた。

第1話「崩れ行くセカイ」（前書き）

注意、

原作完全無視

キャラクター思いっきり崩壊（特にプーが）
グダグダ

それでもいい人はどうぞ。

第1話「崩れ行くセカイ」

―イーグルランド オネット ネスの家 ネスの部屋―

「・・・ふにや・・・夢？」

ポーラはベッドで目を覚ました。ディケイドと呼ばれる戦士が世界を破壊する夢・・・この夢を見るのは今日が最初ではない。最初に見たのは1ヶ月前だった。それ以来毎日、この夢を見てしまうのである。

ポーラはあの夢について考えていた。

「何なんだろうな・・・、ディケイドって」

なんで夢のときの自分はあの戦士をディケイドと呼んだのか、深く考えていると、下のほうから声がかかる。ポーラの恋人であるネスの母だ。

「ポーラちゃん、朝ごはんよー」

「はい、今行くー」

一時考えを打ち切り、ポーラは下へ降りていった。

―1F キッチン―

「おはようございます。小母さん」

とポーラはネスの母に声をかける。ポーラはかつて世界征服をたくらむ悪の宇宙人ギーグを3人の仲間と共に打ち倒した。その冒険の中で仲間の一人であるネスに恋をした。戦いを終え、二人は結ばれた。現在ポーラは、彼の家に同棲している。

「ところでネスはどうしたんですか？」

「ジェフ君とプー君達と一緒にカメラを持って公園の景色撮りに行ってるわよ」

ネスはもともと、写真等をとるのが大好きで、旅先とかではよくいい景色等があったら頻繁に写真を撮っている。

「ジェフとプーが来てるんですか・・・懐かしいなあ」

ジェフとプーは先ほど述べた仲間の2人のことであり、旅を終えて

頻繁にネスの家に遊びに来ている。

「ご馳走様、それじゃあ行つて来ます」

ポーラは朝食を食べ終え、ネスたちのいる公園へと向かった。

―オネットにある公園―

そこでは子供たちがブランコや滑り台等で遊んでいた。その光景を写真におさめている赤い野球帽がトレードマークの少年がいた。少年は写真を手に取るとやっぱりと言った表情で顔をしかめた。

「どうしたんだい、ネス？また写真が歪んでいるのか？」

とめがねをかけた少年が少年―ネス―に声をかけた。

「ああ、ジェフ・・・またなんだよな」

とジェフと呼ばれた少年にその写真を見せる。その写真は物凄くピンボケしており、一般人から見ればど素人でもとらねーYOと言いつうなほどひどいようすだった。

前々からこの写真になったわけではない、1ヶ月前いきなりこうなったのである。

「おいしい、何か良い写真とれたかぁ」

「プー・・・見てくれよこれ」

とジェフが弁髪少年―プー―に写真を見せた。

「おいしい、何ですかこれは？あいかわらずこんな調子かい？1ヶ月前はこんなことはなかっただろ？」

「おかしいよね・・・、1ヶ月前はこんなことはなかったのにいきなり下手になっちゃうなんてさどうしちゃったんだよ？」

「下手じゃねーよ、世界が俺に撮られたがれてないだけだ」

そんな会話をしていると、

「おい、ネスー、ジェフー、プー」

と声がかかる。そちらを見ると、ポーラが手を振っている。

「ネス、君の奥さんが来たみたいだよ」

「誰が奥さんだっ！まだ俺たちはそんな関係じゃねーよ！」

「照れるなネス、俺なんか10人の妻を抱えているぞ。一人の女を

「一途に愛するのはいい事だ」

「だまれ、ハーレム禿げ！」

「それほどでもない」

「ほめてねーよ」

ギヤアギヤア、口げんかを始めるネスとプー。そこにポーラが割つてはいる

「はいはい、喧嘩はやめて、さっさと行くよ」

「んーと今日何かあったっけ？」

ネスの問いにポーラははああ、と嘆息する。

「今日は水族館に行こうって言うてたじゃないっ！何で忘れてんのよ！」

「あ・・・あー、そうだったなあー。はっはっは」

「今頃思い出すなっ！んじゃさっさと行くよ」

「わーったよ。って！」

とついでいく気まんまんのジェフとプーを見て半眼になる。

「何でお前らまでついて行くんだ？」

「いいじゃないか、昔一緒に戦った仲だろ？」

「貴様だけがいい思いするのは不公平すぎる。俺達も連れて行くべき、そうすべき」

そんなこんなで4人で水族館に行く羽目になった。

―水族館―

「ふーっ、やっとついた・・・」

「むむっ！」

「?どうしたプー」

「いきなりだが尿意がマツハで襲ってきた。それでは俺はトンスラで便所に言ってくる」

と言ってトンスラの姿勢で便所にダッシュした。

「う・・・」

「ジェフまでどうしたんだよ!？」

「僕もトイレ」

そういうとジェフもダッシュで便所に駆け込む。

「……………」

ネスとポーラ沈黙……

「とりあえずせっかく来たんだし撮るか」

とネスは持参したカメラを手に取り、

「ポーラ、撮るぞー。ハイ、チーズ……」

「？」

ネスがハイ、チーズと言う前にファインダーが奇妙に歪み始めた。

ポーラはネスがいきなり黙ったので怪訝な表情をしている。ふとポ

ーラの隣に奇妙な青年の姿が浮かんでいた。

青年はネスに向かってささやくように言った。

『ディケイド……もうすぐあなたの世界が終わります……』

「！？」

とカメラをどけると、ポーラしかいなかった。

「あれ？」

「どうしたのネス？」

ポーラの問いに頭をかきながらネスは答えた。

「今、ポーラの隣に人がいたような……」

「人？」

「いや、何でもない」

とネスは話を打ち切った。

その後プーとジェフがトイレから戻り4人は水族館を存分に楽しんだ。

――その帰り道――

ネスは青年のことについて少し考えていた。

（あいつ……俺のことをディケイドって呼んでいたけど……何だったんだろうな……）

ブオオオオオオオオオオオ！

「？何だ」

その時4人と周りの通行人の前に、突如歪みの壁が現れた…

「オイ、何ですかこれは？壁か？」

プーはコンコンと歪みの壁を叩く。

「！？プー、離れる！何かいる」

そして歪みの壁から、全身がステンドグラスの様な怪物が現れる。

ステンドグラスの怪物達は、目の前に宙に浮く牙の様な物体を出現させると、それ近くの通行人の首の根元に突き刺す。

「ぐあああああつ！」

「ぎゃあああああつ！」

襲われた通行人は、苦しみながら徐々に透明になりそのまま絶命してしまった…

そして怪物は4人のほうを向くところ喋った。

「我らは闇の一族ファンガイア、貴様らのライフエナジーをいただくぞ！」

「うわ、わわわわ！」

「おいしい・・・、シヤレになんねーよ！」

「みんな、逃げるぞ！」

と3人に声をかけるが、いきなり壁に閉じ込められてしまう。

「ネス！」

ポーラの声を最後にネスの意識はゆっくりと落ちていった。

- ネス視点 -

夜の街でネスは目を覚ました。

「ここは・・・何処だ？つてか今何時だよ」

と近くに時計はないか探していると、あのときの青年が現れた。

「あつ！テメエは！」

「デイケイド・・・今日がその日です」

「・・・どういう意味だ？」

言い返そうとすると青年が消え、代わりにさかさまの町並みが上空

に現れた。その町並みには青年が立っている。

「な・・・なんだあ!!!?」

「君のバツクルとカードは何処です?」

青年はそう言った後町並みと共に消えた。

「俺のバツクルとカードって何なんだ? ってちょっと待ておい!・・・
・行っちまったよ」

ネスは暫く待つてみたが、また青年が現れそうにないのでポーラの所へ戻って行った。

・ポーラ視点・

「はあ、はあ」

「き、きつい・・・」

「ここらで休んだほうがいいのは確定的明らか」

そう言つて3人は座り込む。ここに来るまでさまざまな怪物と遭遇した。疲れるのも無理はないだろう。

「ん?」

ポーラは手に何かを見つけ、それを手に取る。

「おいしい、何ですかこれは?」

「え・・・?これは、まさか・・・」

「ポーラどうしたんだ・・・?」

ポーラはそれを見て驚愕する。それは彼女が夢で見たディケイドが身につけるバツクルだったのだ。

「おい、ポーラ。ジェフ。プー」

聞きなれた声がしたので3人はそちらを向くそこにはネスが歪み壁を叩いていた。

「ネス。無事か!?」

「アホか、これのどこが無事だつてんだ」

「怪我とかしていないのを無事だと言っているサル」

とふざけあう4人。だが、

「何だあれはポーラか?」

いつの間にか偽者のポーラが現れていた。そしていきなりにせポーラが化け物へと変わり3人に襲い掛かる。

「うわああああああっ！」

「おいしいいい！いくらなんでも反則だろ！？」

「嘘・・・なんで・・・？」

「ポーラ！皆！うわあああああああああああああああ！！！」

ネスは雄たけびを上げながら壁を殴るだが、一向に割れる気配はない。

「畜生・・・こんなもんなのかよ・・・世界が終わるってのは・・・」

と自分の力のなさを嘆くネスの目にポーラが持っているバックルとカードケースが目に入った。

ふとネスは青年がバックルとカードは何処だと言うのを思い出す。

「バックルとカード・・・！ポーラ！ひよっとしてそのことか！？」

「えっ！？」

「それを渡せ！早く！」

「で・・・でも」

ポーラは例の夢のせいか躊躇している。

「大丈夫だ！俺が守ってやる。俺を信じろ！」

「・・・わかった」

そう言つてネスにバックルとカードケースを渡した。それと同時に3人は怪物に襲われる。

ネスはすぐさまカードケース『ライドブッカー』からカードを取り出し。バックル『デイケイドライバー』を装着し、叫ぶ！

「変身！」

「カメンライドウ、デイケイド！」

バックルから電子音が流れ、ネスの体が変わる。頭部に7枚のプレートが刺さり、ピンクと黒に強調されたボディとなった。それと同時にゆがみの壁が砕け、怪物たちに当たる。

「な・・・何だ？」

「どうやら俺達はあの戦士に助けられたようだ」

「ネス・・・何で」

と口々に3人は言っていた。

ネス（ディケイド）は怪物を倒そうと近づくが、ものすごい高速移動で、離れていってしまう。

「ちょこまかと・・・逃げんじゃねえ！！！」

とライドブッカーからカードを取り出し、ディケイドライダーに差し込む。

「カメンライドウ、カブト！」

バックルから電子音が響き、ディケイドの姿がカブトムシをモチーフにしたライダー、カブトへと変身する。すぐさまカードを取り出し、差し込んだ。

「アタックライドウ、クロックアップ！」

とたんに周りがゆっくりとなった。これは今戦っている怪物、ワームに対してゼクト社が作り上げたライダーシステム、クロックアップなのだ。

そのまま、ワームをライドブッカーを剣に変えて斬り伏せた。すべて斬られたワームは爆砕した。

すると、カブトのカードが飛び出し、ディケイドの手に収まる。

「・・・何で俺このカードを選んだんだ？」

するとカードからカブトの絵柄が消えてしまう。

「・・・あれ？なんで？」

ディケイドは原因を考えたが、止めた。

――廃墟の町――

ディケイド（ネス）、ポーラはバイク『マシンディケイダー』に乗って走っていた。

「何で僕らは段ボールで引きずられているのさ!？」

「おいしい！俺達の扱いとポーラの扱い違いすぎやしませんかねえ！」

ディケイドはそういうとカードを取り出し、ディケイドライダーに差し込む。

「カメンライドウ、ファイズ！」

バックルの電子音とともにディケイドは黒と白と赤に強調されたボディのファイズへと姿を変えた。

続けてアタックライドカードを差しこみ、発動させる。

「アタックライドウ、オートバジン！」

「ポーラ、降りてろ」

「えっ！ちよっ、キャア！」

ディケイドはファイズの相棒オートバジンへと変わり、さらに口ポットモードに変形してバルカンをはなちジェフとプーをオルフェノクから引き剥がした。（さっきのキャアは変形した拍子にポーラが転んでしまったため）

ファイズとなったディケイドも2人とバジンの元へ駆け寄る。

「隠れてろ、ハゲ、ジェフ」

「おいしい、さっきからハゲハゲ言い過ぎじゃね？！」

プーの文句を無視し、ファイズはバジンからファイズエッジを受け取り、オルフェノクを全て斬り捨てた。全てを倒した瞬間ファイズのカードがディケイドから飛び出す。

そしてファイズの絵柄も消えてしまう。

「ちっ、これもかよ！」

行き着く暇もなく、今度は妖怪のような姿をした怪物『魔化魍』が現れた。

すぐさま、ディケイドはカードを取り出し装填する。

「カメンライドウ、ヒビキ！」

バックルの電子音と共に、今度は鬼のような姿、仮面ライダー響鬼となった。

さらにカードを取り出し、装填させる。

「アタックライドウ、オングキボウ・レッカ！」

すると響鬼になったディケイドの手に1対の太鼓のバチのようなぶ

き音撃棒・烈火となる。

それに火をともし、放つ。魔化魍たちを炎が包み込み、爆砕させる。同時に飛び出し、絵柄が消えるカードを見てネスは思った。

（身体が勝手に動く・・・これもカードの力か？・・・いや・・・俺は戦い方を知っている？）

考えをやめ、ネスの家に帰ることにした。

・ネスの家・

4人は自宅ちかくに戻っていた。ディケイドは変身を解き、9つのカードを見る。全て絵柄が消えていた。

「全部消えてる・・・？何でだ？」

「それは、かつて君が全てを失ったから」

突如謎の声が聞こえる。振り向くと、先ほどの青年が立っていた。

ネスは青年に詰め寄る。

「なんでこんなことになったんだ！？どういふことが説明しろ！！」

「いいでしょう」

青年がそっくり、パチンと指をならす、するとネスの家の景色が消え、宇宙空間に9つの地球が写った。

「おいしい、なんですかあれば、地球みたいなのは確定的明らか」

「みたい、ではなく実際そうですよ」

「何だつて！？」

4人は驚愕する。だがそんなことは気にせず青年は話を続ける。

「9つの世界に、9人の”仮面ライダー”が生まれ、彼らはそれぞれの世界を守っていました。しかし今、その全ての世界が融合しようとしています。君は今から、9つの世界を旅しなければなりません」

「なるほどねえ・・・」

そっくりながらネスは9つのカードを見て、考える。

どうやら今度の旅は、凄く困難なものになりそうだということを。

「全てを破壊し、全てを繋いでください、それが世界を救うたった一つの方法です。残念ですが」

青年が言い終えた後、景色は再びネスの家へと写る。

「君が世界を救うまで、この世界は僕と僕の仲間が生きながらえさせましょう」

そう言っていると青年は消えた。

- ネスの家 -

「あれー、ママー、テレビが見つからないよ？」

ネスの妹、トレーシーが見つからないテレビをみて不満をもらした。

ネスママ、トレーシーは家にいたため無事だったようだ。

「ただいまー」

とネスとポーラが帰ってくる。

「あれ？お兄ちゃん、ポーラさんお帰りー、あれ？ハゲのお兄ちゃんにジェフお兄ちゃん、いらっしやい。」

「何故、ジェフは名前で呼ばれて、俺は呼ばれないのか・・・、プ

ーは深い悲しみに包まれた・・・」

とがつくりとorz↑このような姿になるプー。

そこへネスママが出てくる。

「所でネス、何か外が騒がしかったんだけど・・・なんだったのかしら」

- - ネス説明中 - -

「へえー、また世界を救う旅にねえー」

と関心深げにうなづくネスママ。

「だけど、どうやって旅をするんだろうな？」

とジェフが聞いてきた。

「そうだな・・・、わからん！」

きっぱりというネス。

「分かんないの!？」

突っ込むポーラ。

「大体、あいつ肝心なこと言い忘れてるじゃねーかよ! ったくなめてんのか!」

と憤るネスだった。そこにネスママが切り出す。

「そう言えばこんなのが届いたんだけど」

そう言っただけで立ち上がり、何かを持ってきた。どうやらそれは写真撮影などに使う垂れ幕のようだ。

「それは？」

ネスが聞く。

「これねー凄いのよ。これをおろしたら絵が描いてあったんだから」と言っただけでおろす。

その絵はどこか中世的な城下町と城その奥に山がそびえていた。

どたどたどた!!!

といきなり外から何か喧騒が聞こえてきた。

「何だ？」

といいながら外へ出るネス。するとそこにはその絵の通りの中世的な町並みが広がっていた。

どうやらこの世界の住人の警察だろう人間達やパトカーが走っていた。すると唐突に声が響いた。

『全衛兵に告ぐ、現在、キノコ城三番倉庫にて未確認生命体と交戦中!』

何よりも驚いたのが、ネス本人の格好である。

「おいしい、ネス、何ですかその格好？」

「えっ? うわっ! 何だコリヤ!？」

ネスの服装が中世の兵士の格好に変わっていた。

- キノコ城第三倉庫 -

そこでは、大勢の城の兵士達が謎の怪人、”未確認生命体第7号”と戦っていた。

「撃てえええええええええつ！」

兵士の隊長であろつ人物の合図で兵士たちが7号に向け一斉射撃を行つ。

しかし、7号は少し仰け反った位で全くダメージを負わなかった……

ガシヤ
アア
アアンツ

7号は近くのパトカーを投げ飛ばし威嚇する。

その時数台のパトカーが到着し、この殺伐とした光景に似合わないピンクのドレスを着た女性が降りてきた。彼女は7号を確認すると、無線で誰かに呼びかけた。

「ピーチよ、マリオ聞こえる」

キノコ城第三倉庫前

そこには赤い帽子をかぶったヒゲをはやした男と緑の帽子をかぶった同じくヒゲを生やした男がバイクトライチェイサーにのって走っていた。

現在、未確認生命体7号と交戦中、すぐに応援に来て

「OK！了解だぜ、ピーチ姫！ってルイージ、お前暑苦しいから降りろ！」

「嫌だい！僕だつて出番が欲しいんだい！あつ、ちよつと待つて！振り落とさないで！ちよつ！まじでやめ．．．アッーーーーー！

!!!

ゴロゴロダガシャン！

ルイージは派手にこけた（笑）

- 第三倉庫 -

無線を切りピーチは兵士から銃を貰い、7号に近づこうとするが、

「ウガアアアアアアアアアア！」

突如、
8号が現れる。

「そんな、もう1匹!？」

「姫様！グワッ！」

8号の攻撃からピーチをかばい兵士がやられてしまう。

そして再び襲い掛かる8号！ピーチ万事休す。とそこへ、

「イヤアアアアアアア
フウウウウウウウウ！」

謎の叫び声とともに赤い影が8号を蹴り飛ばす。

「ピーチ姫！大丈夫か！ここは俺に任せな！」

とマリオは腰の前に手をかざす、するとマリオの腰にバックル部分に「霊石」アマダム」が埋め込まれた銀色のベルト」アークル」が出現し、鼓動を刻み出す。

「俺の姫様に手を出すとはいい度胸だぜ！ 覚悟しやがれグロンギのくそつたれ野郎！」

そう言いながら、左手を左腰に置き右手を左前に突き出して、更にその右手を右へと動かし叫んだ。

「变身!!!」

そして最後に右手と左手を左腰で重ねて、更に気合いを入れた。

するとマリオのの身体を、アークルを中心にアマダムに収められている強化皮膚である赤の装甲が覆い初める。その姿こそ、赤い古代の英雄『仮面ライダークウガ』なのだ。

「行くぜ！グロンギ野郎！ユウフィイイイイイイイイイイ！！」

そう叫びながら、マリオⅡクウガが8号に殴りかかる。

一方、ネスは目の前の景色を見てこうつぶやく。

「クウガの世界・・・」

ネクストライダークウガ、スーパーマリオの世界

第1話「崩れ行くセカイ」（後書き）

半月おきに更新したいと思います。どうぞよろしく。

第2話「クウガ編 その1 イッツミーマーリオ」(前書き)

デネブ風に注意します。最初に言うておく、かなーりキャラが崩壊しています。＆ルイージが酷い目に。
それでもいい方は、どうぞ。

第2話「クウガ編 その1 イッツミーマーリオ」

クウガの世界、ネスの家

ネスは自身の身分証明書を見て自分の役割を知る。

「キノコ王国、第8小隊隊長、階級は軍曹か・・・どうやらこれがこの世界での俺の役割ってやつかな」

ジェフは腕を組み、

「ふむ・・・どうやら別の世界へ行くと僕らは役割を与えられるらしいな。僕の役割は・・・」

とジェフやプーも家の外に出ると、姿が変わっていた。

「僕はキノコ王国第8小隊の隊員で階級は・・・曹長、か。当然だな」

と勝ち誇るジェフ。ネスが「何が当然だよ」と突っ込んだがあえて無視をする。

「俺は何で階級は3等兵なのか・・・プーは深い絶望に包まれた・・・」

プーは自分の役割の階級がネスたちより低いことに絶望しorz↑
こんな状態になった。

「えーとあたしは・・・キノコ王国近衛兵か・・・」

と身分証明書をみて自分の役割を確認するポーラ。するとジェフとプーが不満を漏らす。

「なんでポーラが近衛兵なのさ！」

「ポーラだけ位が高いのは不公平すぎる！今すぐ役割を変えるべき！そうすべき！」

と詰め寄るが。

「PKファイアΩ」

ポーラのPSIで即黒こげになる。

その炭になった2人を見てネスは励ますように言った。

「2人とも、あくまでそれは俺たちの役割なだけさ・・・。まずは

つと、この役割を使ってこの世界で何をすべきなのか調べてみるか」
「お兄ちゃん・・・、何が何なのかさっぱり分からないんだけど」
とトレーシーがネスに説明を求めようとするが、

『番組の途中ですが、此処で臨時ニュースです。キノコ城第3倉庫にて、未確認生命体第7号が確認されました。ただいま、キノコ王国軍がこの未確認と応戦しているという事で・・・』

「未確認生命体・・・、ということは・・・クウガの世界だな」
と様々なアニメやゲームにも詳しいオタク・・・失礼。ジェフがつぶやく。

「どうやらそうみたいだな」

といつの間持ってきていたのか新聞を取り出す。

そこには前面記事で

『未確認生命体4号、6号を倒す』
とあった。

「未確認生命体4号ってまさか」

「ああ、この世界ではクウガは未確認生命体と同じ扱いらしいな・・・。とりあえず俺たちは現場へ向かうぞ！」

と4人は家を出てテレビで流れていたキノコ城第3倉庫へと向かう。

その頃、キノコ城第3倉庫

「ヤッフウウウウウウウウ！」

第3倉庫では未確認4号よろしくクウガに変身したマリオが7号と戦っていた。

その近くでは先ほど殺されていたのだろう女性の兵士の死体が転がっている。

「女ばかり狙うたあ！いい度胸だぜ！！そんな変態野郎は俺がしばいたるけえのお！」

何故か流暢な広島弁で7号を殴っているクウガ。とそこへ8号が上空から襲ってくる。

「なんのお！」

とクウガはそこから転がっていたルイージを引っつかみを盾にする。
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！」

8号の攻撃を受け、血まみれになるルイージ。

「見たか！これが俺の弟バリアーだ！」

と言いつけにとられた8号をぶん殴るクウガ。正に外道とはこのことである。

「一気に終わらせてやるぜ！超変身！」

と変身と同じポーズで構えるクウガ。すると赤から青のカラーリングに変わり、近くにあったパイプ棒を手にする。するとパイプ棒は一瞬にドラゴン・ロッドへと変わる。

「ヒヤッハアアアアアアアアアアアアアアアア！どタマかち割ったりやああああああああ！！！」

とハイテンションで叫びながら7号へと攻撃を開始するクウガ。もはやどつちが悪役だかわかりやしない……。 (笑)

そんな状況にネスたち4人が第3倉庫に到着する。ネスは早速、持っていたカメラを構え、撮る。

「あれが……」

とポーラ。それをジェフが聞き、説明する。

「そう、彼が仮面ライダークウガ。古代より蘇ったグロンギと戦う戦士。状況に応じてフォームを変え、周囲の物を武器に変化させる力があるんだ」

とそこへピーチ姫がこっちに気づく。

「ちよつと、君達。何してるの！後退命令が出たはずよ？」

「すいやせん、ちよいとこれでそこを何とかしてくれませんかねえ」とピーチに賄賂を差し出すプー。ネスはどっから持ち出したのかバツトでプーの頭を殴り、昏倒させる。

「賄賂を出すな、賄賂を。ところで一枚どうですか？」

とネスはカメラでピーチを撮影する。4人の態度に、ピーチはため息をつく。

そんなやり取りをしている最中でもクウガと未確認生命体との戦い

は続いていた。

「どりゃあ！」

クウガがドラゴンロッドを7号に叩き込む。

『グワアアアアアアアア！』

7号は断末魔を上げ、爆砕した。

『ギギッ！』

8号も分が悪いと悟ったのか空を飛んで逃げていった。

「逃がすかよっ！姫、銃を！」

「分かったわ！マリオ！」

ピーチはクウガに銃を渡す。

クウガは先ほど変身したときのようにポーズをとり、

「超変身！」

と叫ぶ。青から緑に変わり、持っていた銃もペガサスボウガンへと変わる。

「ヒャッハー！ーーーーー！楽しいハンティングの始まりだアー
ーーーーー！！！」

そう言うときクウガはボウガンを構え、8号の後を追いつジャンプする。

それを見ていたピーチはネスたちのほうを見やり、

「言いふらさないでよ。クウガがマリオだってこと。ほらルイーザ

！気絶していないでさっさとマリオを追うわよ！」

「ちょwww姫www鼻引つ張らないでwww」

と言ってルイーザを引きずって屋上へ向かっていった。どうやらクウガ「マリオだ」ということは秘密らしい。

「とりあえず戻るか。クウガの姿を確認できたしな」

「うん、面白かったからね」

とネスはカメラをしまい、自宅へと戻っていった。

- 自宅への帰り道 -

「そう言えば、あの時女性の兵士が殺されていたみたいだが・・・」
とプーが気づいたことをシェフに聞いた。

「ああ、それは多分ゲゲルだな」

「ゲゲル？それは美味しいのか？」

これはネスだ。

「違うよ。ゲゲルって言うのはグロンギがやるゲームみたいなもので、それをクリアすると上位のグロンギに昇格できるらしい。ただ、それにはルールがあつて、特定のエリアでしか殺せないとか、対象は女とか子供とか色々あるらしいんだよ」

「詳しいな、さすがオタク、詳しい」

「うっさい、ラーメンマンもどきの君に言われたくはないよ」

「それほどでもない」

「「ほめてねーよ！（ないよ！）」」

と3人でプーに突っ込む。すると

「ヤッファー！やっぱリネスじゃないか」

と声のしたほうを振り向くと赤い帽子をかぶったヒゲをはやした男が立っていた。

「やっぱりお前か・・・マリオ」

とけだるそうな顔で答えるネス。どうやらネスと男・マリオ・は知り合いのようだ。

「いやーグロンギを倒すのに気をとられていたから気がつかなかったぜ。しかしスマッシュブラザーズの大会以来だなー」

「まあな、なんでお前クウガになっっているんだ？」

と頬をかきながらネスはマリオに問う。

「まあ、成り行きかな。とある遺跡からベルトが出たもんで初めてみたらグロンギ共と闘う羽目になっちゃったってやつ」

「えーと・・・」

とポーラが会話に割り込む。

「わたし、この人のことさっぱり分らないんだけど・・・」

「成り行きが分からないから教えるべき、そうすべき」

「ああ、そっか。3人はスマブラ大会に出ていないんだっけ？
んじゃあマリオ、自己紹介してやれよ」

「いいとも！俺の名はキノコ王国、客員騎士にして、クウガの戦士！イツミー、マリーオー！」

とかっこいいポーズを決め自己紹介するマリオ。が突然、マリオの携帯が鳴る。

チャラッチャチャラッチャーウツ！ピ。↑携帯の着メロ

「はいもしもし、ピーチ姫か？どうした？・・・分かった。マツシュ川で合流だな」

ピ。と携帯を切り、

「ちよいと用事が出来ちまった。じゃ、またな」

とどっからか持ってきたホイッスルを手に取り吹く。

「でつていう！（おまたせ！）」

するとどこからともなくヨッシーが現れ、マリオはヨッシーの背に乗る。

そのまま走り去っていった。ネスも着いていった。

20分後マツシュ川

グロンギがゲゲルを始めており、すでに女性兵士が一人殺されており、もう一人の女性兵士もトンネルまで追い詰められ殺されようとしていた。

すると、

ブオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

とディケイドに変身したネスがディケイドライバーでグロンギをぶっ飛ばした。

『！！クウガバ！？（クウガか！？）』

「はあ？クウガだあ？ちげえな」

『リントギ、ガザハデギホバ！（リントが、ここに何のようだ！）』

「グギグギ五月蠅えよ。ちよつと聞きたいことがあるんだが」

とディケイドはディケイダーから降り、バキバキと指を鳴らしながらグロンギに詰め寄り攻撃を開始する。

その頃、マリオはピーチとマツシュ川に合流し、先ほど殺された女

性兵士の下にやってきた。

「四人目か・・・」

「9号は!？」

と殺されかけたもう一人の女性兵士に聞こうとすると

「オラアアアアアアアアア!!!」

『グアアアアアアアアア!』

ドゴオン!

とトンネルからグロンギが吹っ飛ばされるように現れる。それを呆然と見るマリオとピーチ、さらにディケイドがトンネルから姿を現す。

「アイツ・・・なんだ？」

「さあ・・・未確認10号って言ったほうがいいかしら」

とピーチとマリオが啞然とする中、ディケイドはライドブッカーからカードを取り、バツクルへと入れる。

『ファイナルアタックライドウ!ディディディディケイド!!!』

電子音が響き、ディケイドの目の前に何枚ものライドカードに似たオーラが出てくる。

「どりゃあああああああああ!」

ディケイドは高く跳躍すると、グロンギに向かってライダーキックを放つ。

『グワアアアアアアアアア!!!』

グロンギは断末魔の叫びを上げ、爆砕する。

それを確認したディケイドはディケイダーへと駆け寄り去っていった。

その光景をただマリオとピーチは呆然と見ているしかなかった・・・。

続く・・・

第2話「クウガ編 その1 イッツミーマーリオ」(後書き)

ディケイドVSクウガからキックホッパー&パンチホッパー登場までを書こうと思いましたが、力尽きてしまいました。分割して書こうと思っております。

第3話「クウガ編その2、現れたパンチ&キックホッパー、助っ人はフタエノキ

WARNING

ニコニコキャラが出ます。

ものっそいグダグダ。

それでも言い方はどうぞ。

第3話「クウガ編その2、現れたパンチ&キックホッパー、助っ人はフタエノキ

「あれ？」

と謎のライダー（ディケイドのこと）に出会ったマリオとピーチはとりあえず居酒屋で話し合おうと言うわけで、キノコ料理が美味しい居酒屋にしようとした。だが、居酒屋があった場所は何故か見慣れぬ一軒家があった。

「いつもの居酒屋がない・・・？」

とピーチは啞然とした表情で言う。

「潰れたりしたんじゃない？でも残念だったな・・・いい店だったのに・・・」

とマリオは残念そうにいう。

とガチャリとドアが開く。

「よう、マリオ」

とネスが出てくる。

「うお！？ネスかよ。なんでここに!？」

「なんでって・・・ここは俺の家だが・・・まあいいや。上がれよ。今日はキノコ鍋だぜ」

「なぬ！？キノコとな！？ヤッファー！早速お言葉に甘えていただくぜ」

と勢いよくネスの家に上がるマリオ。

「えっ！ちょ・・・いきなり上がってご馳走ってやばくない？」

とピーチも上がった。

そんなこんなでマリオとピーチはネスの家で鍋料理を食べることになった。

「んー、美味しい！」

とマリオは湯だったキノコをポン酢＋柚子胡椒でつけて食べ、感想を述べる。

「でしょー、なんたつて私の料理は世界一だからね」

とネスママはえっへんと胸を張る。と

「ん？」

とネスは鍋に入ってた具を見、それを取り出す。

「松茸・・・？なあ母さん。この松茸・・・どうやって手に入れたんだ？俺んちの財産じゃ無理だろ？コレ」

と松茸を見ながら言う。

「ああ、それね。プー君の金で払ったから大丈夫よ。さっすがプー君は一国の王子様だから、たくさん手に入ってたわー」

と笑顔で物凄いことを言うネスママ。

「俺は全財産を失い、深い絶望が襲った・・・」

一方プーはというと、全財産を失ったのだらう、こんな感じ↓or
zでうなだれていた。

(哀れな・・・)

と自宅にいただれもがそう思ったと言う。

その夜。

「なあ、マリオ、ピーチ」

と夕食が終わり、帰ろうとしたマリオとピーチに声をかける。

「何だ？」

とマリオが言う。

ネスはポケットから紙切れを取り出し、それをピーチたちに渡す。

「明日、コレに書いてある場所に来て欲しい」

マリオやピーチはそれをしげしげと眺め、言う。

「ふーん・・・分かった。んじゃ、また明日な」

「ご馳走様でした」

と城へ帰っていった。

それを見て、ポーチは駆け寄ってネスに言う。

「ねえ、ネス。さっき二人に渡したの何？」

「いや、ただちよつとした話があるだけさ」

「まさか、浮気じゃないわよね？浮気なんかしたら許さないから」とブクツ、と頬を膨らますポーラ。

「そんなんじゃないよ。ちよっとしたパーティーだ。大体浮気なんかするかつての。俺はいつでもポーラー筋だ」とポーラの髪を撫でる。

「むー、ホント？ホントなら今から寝室でその証拠見せてよね」とネスの手を握り、部屋へと連れて行く。

「えっ！？（ズルズル）ポーラ！？（ボタン！）ちよ……ま……待て！俺のズボンをおろして……ってうわっ！（ドサリ！押し倒される音）」

「うふふ……今夜は寝かさないわよ」

「お、おい！ちよっと待て、アッー！」

その夜何があつたのかはご想像にお任せください。（笑）

翌日、マイタケ山近くの森
ここにマリオ、ピーチ、ルイージがやってきた。（ルイージは半ば強制的）

「よ……よお、よく来たな……」

と茂みからネスが出てきた。何故か少しやつれているような気がするが気にしてはいけない。

「一体何があつた？」

とマリオがやつれた姿のネスを見てか、聞いてきた。

「何でもない忘れてくれ」

とネスは返したのでそれ以上聞かなかった。

「所で、ネス。話って一体……」

とピーチが聞いてきた。

「あの山に究極の闇って奴が眠っているらしいんだ」

とネスはマイタケ山のとっぺんを指差す。

「究極の闇？それって誰から聞いたんですか？」

と今度はルイージが聞く。

「昨日、直接あいつら（ Grongi ）から聞いた」
ときつぱりと言い放つ。

「へ？」

と三人とも訳がわからないと言った感じでネスを見る。

「その究極の闇をよみがえらせるのが、今回のゲゲルって訳。そしてそのルールは・・・」

とピーチを見る。

「キノコ城、マイタケ山、マツシユ川付近で戦う女のリント、つまり女性兵士を5人殺す事。それが究極の闇をよみがえらせることが出来るらしい」

「究極の闇の復活・・・それが今回のゲゲルか」

「まあそう言う事だな、セレボギレ、ギレスンザゾグ！（其処にいるんだろ、早く出てこいよ！）」

とネスが突然 Grongi 語で喋りだすと、木の上から、 Grongi が現れる。

その頃、ネスの家

「うつ・・・寝不足だ・・・」

と部屋でジェフはうめいていた。

何せ昨日は自分が寝ている部屋の隣でぎしぎしやら「アッー！」やらでうるさかったので眠れなかったのだ。

とジェフの頭の中で声が響く。

「ジェフよ・・・目覚めよ・・・ジェフよ」

「な・・・何だ？」

と起き上がるジェフ。すると目の前には陰陽師風の男が立っていた。

「誰だ、アンタ？」

「私の名は矢部彦麻呂^{やべのひこまろ}、君達の世界に現れた謎の青年の仲間だ。今、この世界にも滅びが起きようとしている。滅び事態はディケイドが何とかしてくれるだろうが、邪魔者がもうすぐやってくる。だから君には仮面ライダーディアードとなってディケイドのサポートをし

てほしい」

と彦麻呂はディケイドライバーに似たベルトのバックル、『ディアードライバー』をジェフに渡す。

「は・・・はあ・・・」

「頼んだぞ・・・ジェフ、いやディアード」

そう言うつと彦麻呂は消えていった。

ジェフは試しに変身してみる。

「カメンライドウ、ディアード！」

と電子音が響き、姿はディケイドと同じだが、カラーは黄色、何故か仮面のアゴが長いという姿だった。

「・・・ふつくしい」

ジェフは感想をもらした。

話は変わり、マイタケ山。

『ゲゲルゾ、ダジレルゾ（ゲゲルを始めるぞ）』

『オンダダバグゴンバ、リント、バゴダシゲゴバソダ！（そのリントの女を殺せば終わりだ！）』

とグロンギ達はそう言いながらピーチへと近づく。

「今回は二人か・・・」

「おい、どうやってグロンギ語を覚えたんだ」

「気合で」

「マジで！？」

「嘘だ」

「嘘かよっ！」

「まあ何はともあれピーチを殺せばゲゲルは終了、究極の闇は復活するらしい」

グロンギたちはピーチにゆっくりと近づく。ネスはすばやくピーチの後ろに回ると

「そおい！」

スカートめくりをした。

「「ブー!!!」」

マリオとルイージは噴水の如く鼻血を出す。それがピーチの体にかかる。

「何すんのよー!」

とピーチはネスの胸倉をつかむ。

「まあ落ち着けよ。見てみる」

とグロンギたちを指差す。グロンギたちはマリオとルイージの鼻血でぬれているピーチを見て動きを止める。

『リント、ジグザオンダビツデйда!? (リントの血が女に着いた!?)』

『ゲギマス、ゲゲル、ハギママギイダ! (聖なるゲゲルは失敗だ!)』

「あれ? 何でグロンギが後ずさりしている」
ピーチの疑問にネスが訳を説明した。

「こいつらは血を流さずに殺していた」

「そう言えば、キノコ城倉庫の死体も血が一滴も流れていなかったね」

とルイージが気づいたことを述べる。

「そうだ、緑の。こいつらは聖なるゲゲルと言っていた。どうやら血が流れたり、他の人間の血がターゲットについたりすると失敗のようだ」

「緑のって・・・僕はルイージっていうちゃんとした名前があるんですけど・・・」

というルイージの愚痴は無視する。

「さてと・・・こいつらを始末すつか」

とディケイドライバーと腰に装着し、ディケイドのカードを取り出す。

「変身!」

「カメンライドウ、ディケイド!」

ネスはディケイドとなり、グロンギに攻撃を開始する。

「ディケイド・・・？」

マリオはネスの変身したディケイドを見て、なにやら覚えがあるように呟く。

「オラオラオラァ！」

とディケイドはグロンギの一人を捕まえ、拳でオラオララッシュをかます。

『ズギザゲザ！（隙だらけだ！）』

とグロンギの一人がディケイドの背後を襲う。

「PKフリーズΩ！」

『グアアアッ！』

グロンギが氷付けにされた。ディケイドは声をしたほうを向く。そこにはポーラが立っていた。

「ポーラ！来てたのか！？でもサンキュな」

「私も役に立つでしょ？」
とニカツと笑う。

『ゴ・・・、ゴノオンダァ！（こ・・・この女あ！）』

と氷付けにされたグロンギは氷の拘束を壊し、ポーラに向かっていく。

「メガトンパンチっ！」

『グゲッ！』

いきなり現れたラーメンマンもといプーにぶん殴られ、グロンギは吹っ飛ばされる。

「ふっ、俺も忘れてもらっては困る」

「プーも来てたのかよ」

「当たり前だ。喧嘩祭りとは面白い。俺も混ぜるべき、そうすべき」とそんな話しているとグロンギが立ち上がる。

「ほう、パンチングマシンで100キロも出す俺のパンチで起き上がるとは、たいしたものだ」

「そりゃグロンギだからな。2人とも危ないから下がってな。だりやあー！」

とグロンギに駆け寄りライドブツカーをソードモードにしてグロンギを真つ二つにする。

「終わったな・・・ん？どうしたマリオ」

とクウガに変身したマリオを見るディケイド。だがクウガの様子は明らかにおかしかった。

「ネス・・・まさかお前がディケイドとはな・・・俺と戦え、ディケイド！」

「はあ！？何言っただん！？」

「だあ！」

とクウガは拳を振り上げ、殴るが、ディケイドにかわされる。

「うお！？何しやがる！俺、お前になんか悪いことしたか！？」

「いつか現れると聞いていた、全てのライダーを滅ぼす存在のことを！」

と言いながら蹴りを放つ。

「何だそりや！？って、ちょお！いい加減にしないと温厚な俺でも怒るぞ！」

「オイイ、一体アンタ何をやってんですか！？ってオイイ！何俺の剣を取ってんだ！アンタ！」

クウガはプーの持っていた剣を奪うと、タイタンフォームへと姿を変え、ネスに切りかかる。

「テムエ・・・、どうやらここでスマブラ大会の決着つけるつもりかよ・・・面白れえ！」

とライドブツカー（ソードモード）を構え、タイタンソードを受け止める。

「オラア！」

とライドブツカーでタイタンソードを弾き飛ばしクウガを斬りつけようとするが、

「ルイージバリアー！」

「ギヤアアアアアアアアア！またかアアアアアアアアア！」
ルイージバリアーで防御されてしまう。

「今度はこっちの番だぜ！おりゃあああああ！」

とマイティフォームに戻り、マイティキックをディケイドに放つくウガだが。

「そっちがルイージバリアなら、こっちはハゲガードだ！」

「オイイ、何俺を盾にしとグホアアア！」

マイティキックを防いだブーを放り投げるディケイド。それを見たクウガは冷や汗を流して言う。

「むう！やるなっ！」

「そっちこそ！」

とディケイドと、クウガはにらみ合う。

その光景をポーラとピーチは呆然と見ていた。

「えーと・・・一体何が起きてるんだろっ」

「さあ・・・」

とその時だった。

突如歪みが現れ、一人の男と新たな2人のライダーが現れる。

「誰だ！？」

とディケイドとクウガは異口同音に叫ぶ。

「ディケイド・・・お前は这个世界にいてはならない・・・やれ！パンチ、キック！」

「お兄ちゃん、ここにもライダーがいたよ」

「ああ、行こうか、ナナ」

「お兄ちゃん？ナナ？もしかしてアイスクライマーかよ！？」

「ちい！めんどくせえ！」

とパンチホッパーとキックホッパーの攻撃をかわし、ディケイドとクウガが毒づく。

「死んじやえ！」

と攻撃を繰り返すナナの変身したパンチホッパー（PH）がクウガに攻撃を繰り返す。

「くっ！」

それをかわすクウガ。

「っ！テメエエエエ！今、ナナを笑ったなアアアアアア！」
と物凄い形相でお兄ちゃんことポポの変身したキックホッパー（以下KH）がクウガに襲い掛かる。

「なんの！」

とKHの回し蹴りをルイージバリアーで防ぐが吹っ飛ばされてしまう。

「ってて・・・大丈夫か・・・ルイージ？ってやべえ・・・盾にしすぎて虫の息だ」

とクウガはあまりのKHの蹴りの凄さに心配になってルイージを見た。だが最早、ルイージは死に掛けている。

「すまん、ハゲの人。ルイージに回復頼む」

「任せろ、ライフアップ」

とプーが手をルイージにかざすと、ルイージが息を吹き返した。

「ふう・・・死ぬかと思った・・・」

「さて・・・治った所だし、逝くぞ！弟よ！」

「嫌だアアアアアア！またやったら死ぬわ！ってか『行く』の文字が違っじゃないか！？」

「大丈夫だ、俺は死にはしない、お前が守るから」

「それを言うなら僕は死にはしない、兄さんが守るからだろオオオオオオオオ！誰か助けてエエエエエエエエエ！」

「あははははははは！」

と笑いながらクウガに（実質的にはルイージに）拳を振り上げるPH、だがその時。

ガアン、ガアン！

「キャッ！」

と謎の銃撃を受け、転ぶPH。

「誰だ！」

と銃撃をしたほうを見やるKHそこにはジェフの変身したディアー
ドが立っていた。

D キワミは吹っ飛ばされ、近くにあった木に激突する。

「あぁん」

キワミの姿から元のディアードに戻り倒れてしまう。

「・・・・・・・・・・」

しばしの沈黙。

すると、KHとPHの前に歪みが現れる。

「・・・・・・・・行こうよおにいちゃん」

「・・・・・・・・ああ、次の地獄が待っている・・・・・・・・」

と言うと消えていった。

男は2人が消えてしまい狼狽する。

「あつ・・・・・・・・えつ・・・・・・・・ちょ・・・・・・・・、ディ・・・・・・・・ディケイド、これが始まりだ」

と言う風に男は逃げるようにして歪みの中に入り消える。

「・・・・・・・・あの変なライダーと男といい、こいつ（ディアード）と言い何がやりたかったんだ？」

とディケイドは訳が分からないと言いたそうに呟いた・・・・。

ピューとディケイドたちの周りを風が舞い。カラスがアホーアホー

と空を飛んで、ディアードに糞を落としていった。

クウガ編その3へ続く・・・・。

第3話「クウガ編その2、現れたパンチ&キックホッパー、助っ人はフタエノキ

ジエフをニコニコキャラに変身できる仮面ライダーにしてみようかなと思ってやりました。反省はとくにしてはいません。あと、ネスとポーラに何があつたのかはご想像にお任せします。

第4話「クウガ編その3、超絶！」（前書き）

ブレイブルーの最新作「コンティニウムシフト」をプレイしてみました。

すげえ面白い！早く家庭版でないかなーと思っていたら、俺PS3
持っていないじゃん！と意気消沈するハイドでした。

それではスマブラ版ディケイド第4話始まり〜。

第4話「クウガ編その3、超絶！」

マイタケ山の森、ネスサイド

「あいてて、災難だったぜ」

「まっただよ」

とネスの愚痴にジェフが相槌を打つ。あのアゴの長い仮面ライダー、ディアードはジェフだったのだ。

「所でだ、何でジェフはあんなA G Oの長いライダーになっていたんだ。教えるべき、そうすべき」

「ああ、それはね」

とジェフは謎の男、矢部彦麻呂にディケイドをサポートするようにと言われ、ディアードライバーを渡したことを話した。

「なるほどねえ・・・、全然サポートになつてなかったけど。まあ結果的にゲゲルを阻止できたし、この世界も大丈夫だからまあいいか。だけど・・・なんでアイスクライマーがキック、パンチホッパーとしてこの世界に来たかだよな・・・」

と先ほどの2人組みを思い出す。

「わからないけど・・・あの人たちも世界を回っているのかな？」とポーラが聞く。

「さーな、あのイケ面野郎（第1話参照）もそんなこと話してなかったし、何よりもあいつら物凄くやばい雰囲気だったよな」

とネスは今後もあのようなライダーが出るかもしれないと気を引き締めていた。

マイタケ山のちよつと離れた所

ゴッソん！！と拳骨の音が何発も響く。

マリオ、ルイージはピーチに拳骨を食らわされる。

「痛てえな！なにすんだよ！？」

「何で僕まで・・・」

「あんだ達ね。自分が何やったか分かっているの？何でネス君に攻撃

を仕掛けたのよ」

と拳骨を食らわしてピーチは言う。ピーチの問いにマリオはしぶしぶ答える。

「何か知らないけど、ディケイドって敵が現れるって聞いたんだよ。」

「うん、そうだよ。そいつが全てを滅ぼすって言ってたんだ」

と2人は訳を説明する。

「言い訳無用！」

「「ええー！」」

とピーチは2人の説明を突っぱね、ネスのほうへと向かっていく。

「ネス君。聖なるゲゲルって本当なの？」

「ああ、本当だ。マジなんだ。オレンジジュース飲む？」

「「持ってないじゃん」」

とネスのボケに息ぴったりに突っ込むポラとピーチ。

「さてとボケはさておき、あの山に究極の闇が眠っているらしい」

とマイタケ山の頂上を指差すネス。

「なるほどね、今ならキノコ王国の兵力でも倒せるかもしれない」

そういうとピーチは車に乗って城へと戻っていった。

「「・・・」」

マリオとルイージはおいてけぼりをくらった。

「ただいまー」

と自宅に戻ったネスたち。ネスママとトレーシーが出迎えてくれた。

「おかえりなさい、皆。お腹すいたでしょ？ハンバーグが出来たわよ」

と全員に昼飯を振舞ってくれた。マリオやホッパー達との戦いもあって疲れていたので、ネスママの料理は結構美味かった。

「うん、美味しい。やっぱ、お前のママさんの料理は世界一だな」

「だろー、ん？」

と聞きなれぬジェフでもないプーでもない声に疑問符を上げ横を見

る。そこにはマリオとルイーダがいた。

「おぬ」

と今にもディケイドに変身しそうな勢いで構え怒りを押し殺した声で言うネス。

「何でてめえらここにいる」

そこにポーラが怒り心頭ネスを静止する。

「ちよつと、ストップ！マリオさんと緑のオッサンはあたしが招いたの」

「そういうこと」

「ちょｗｗｗｗオッサンって、まだ２９なんだけど」

「ポーラが招待したんならしょうがねーな」

とポーラの弁解に怒りを落着けるネス。

「そう言えば、お前らネスのことを悪魔って呼んだよな、あれはどういう意味なのだ。カカツと教えるべきそうすべき」

とプーが聞く。

「ああ、それはルイーダが「何で僕の所為！？」冗談だ。あれは俺が始めてベルトを手にした時だった・・・」

数ヶ月前、マイタケ山頂上付近

クウガのベルト、アークルを手にした俺、マリオはそれを腰に付けてみる。するとそこに胡散臭そうな雰囲気謎の男が現れた。

「誰だあんた？」

「やあ、僕の名は富竹。君に忠告をしに来たんだ」

「忠告？」

「ああ、いつか君の前に悪魔が現れる」

「悪魔？なんだそりゃ」

「全てを破壊する存在、ディケイド。それが君の本当の敵だ」

そついうと富竹といった男の後ろに謎のオーロラが現れ、その中に入って消えた。

「と言う話でしたとき。めでたしめでたし」

「めでたしめでたしってなんで御伽噺口調!？」
とジェフが突っ込む。

「なるほどな大体わかった」

とネスがうなずき、プーが続ける。

「つまり、そのトリ竹とか言う胡散臭そうな男の話を信じたと言うわけか」

「トリ竹じゃなくて富竹ね」

とプーのいい間違いを訂正するポーラ。

「すまん、迂闊だった。あんな胡散臭い何かホラー映画の序盤ですぐ死にそうな男の話を信じてお前を殴っちまって」

と頭を下げネスに謝罪するマリオ。

「まあいいけどよ」

快く許してくれるネス。

「だけど、何で富竹って人、ネスのことを悪魔って呼んだんだろう・・・」

とポーラは気になっていた。そしてある結論にたどり着く。そうあの夢だ。

（もしかしたら、その人は何かを知っているかもしれない・・・）
と考えていたその時だった。

「あれ？何か大変なことになってるよ」

「何かしら？お祭り？」

「・・・・・・へ？」

とトレーシーとネスママに言われて6人はテレビを見る。

『マイタケ山の山頂から黒い煙が発生し、現在もその煙が広がっています。これは山火事とかではなく、先程この山頂を調査する為に登ったキノコ王国調査隊も連絡は途絶えてしまい、中の様子も気になります』

「調査隊・・・まさかピーチ姫!」

とルイージをつれネスの家を飛び出すマリオ。

「来い！ヨッシー！」

と指を鳴らす。

「でっっていう！」

とヨッシーがどこからともなく現れる。マリオはヨッシーにまたがると急いでマイタケ山へと向かう。

ネスたちも外へ出て、マイタケ山を見ると、マイタケ山の頂上にネスたちがいた世界と同じゆがみが生じていた。

「ここにも、滅びの現象が・・・？」

「おいしい、どういことだ俺たちの役割はまだ終わっちゃいないってことか？」

ネスは消えたままのクウガのカードを見て舌打ちする。ネスは急いでバイク、マシンディケイダーに乗り、ジェフに呼びかける。

「ジェフ行くぞ！ポーラとプーはここに残れ！俺達はマイタケ山の頂上に行く！」

ネスはそういうとジェフと共にマイタケ山の頂上に向かう。

マイタケ山、頂上

そこには黒い煙が漂っていた。

「何だコレ！？ウゲッ！」

「ウワアアアアア！」

「ギアアアアアア！」

と調査隊の兵士達は、煙を吸って苦しみだし、息絶えてしまう。

ピーチはというと少し風邪気味なのでマスクをしていたため煙は吸わなかったため無事だった。だが、目の前の光景を見て驚きを隠せない。そしてその頃、

『グオアアアアアアアアアアッ！』

山頂にある空洞の中にある一つの石碑が崩れ、中から一体のグロングが姿を現した。その現れたグロングが咆哮すると・・・

『グギアアアアアアア！』

『ギシャアアアアアア！』

と息絶えたはずの兵士達がグロンギとなってよみがえる。

「嘘・・・死んだはずの人間が・・・？」

グロンギ達はマスクをしているピーチに気づくと、襲い掛かる。ピーチは必死に逃げるが、途中で躓いてしまう。万事休すのピーチはある単語を叫ぶ。

「HELP、ME！MARIO！！！」

「ヤツフウウウウウウウウウ！！！」

ピーチの叫び声にマリオがヨッシーから飛び降りてやってくる。だが、

ぷちっ

「へぶし！」

飛び降りた拍子に落ちてきたヨッシーに踏まれるピーチ姫。それに気づかないマリオ。

「ピーチ姫、無事か？俺が来たからにはもう安s・・・ってあれ？

ピーチ姫エエエエエエエ！」

とヨッシーに踏まれたせいでつぶされたカエルのようにになっているピーチを見て叫ぶマリオ。（ヨッシーは逃げてます）

「まさか、黒い煙を・・・、許さん・・・許さんぞ・・・グロンギ共・・・、じわりじわりと鬨り殺したるけえのお！変身！」

とクウガに変身し、その場にいたグロンギ大虐殺を始めるマリオだった。

話は変わって、マイタケ山山頂では、よみがえったグロンギ、ン・

ガミオ・ゼダが山へと降りようとしていた。が・・・

「やっぱり居やがったか！行くぜジェフ！」

「OK、ネス！」

「変身！！！」

「カメンライドウ、ディケイド」

「カメンライドウ、ディアド」

とディケイドとディアドに変身し、ガミオを迎え撃とうとしてい

た。

「でりゃあ！」

「せいや！」

とディケイドはパンチを、ディアードは蹴りをかますが、ガミオには効いていない様子だった。

そのまま2人をつかみ放り投げる。

「うおっ、あぶねえ！」

とディケイドは着地するが、

「うぎゃ！」

とディアードが着地をミスリ頭から落下してしまう。

ガミオはそんな2人に向かって言う。

『巴塞・・・ゴセザレザレタ・・・（何故・・・俺は目覚めた・・・）』

「知るかよ」

とディケイドは言う。

『俺は・・・俺は2度と目覚めぬはずだった！』

「知らねえっていつてんだろーが！だったらもう一回眠らせてやるぜ！」

ディケイドはそういうと単身ガミオへと攻撃を開始する。

だが、

『遅いな』

ガミオはディケイドの拳を受け止めるとカウンターで殴り飛ばす。

「グハア！」

「うわっ！」

吹っ飛ばされたディケイドは後ろで待機していたディアードにぶつかってしまふ。

『もう遅い、リントは全てグロンギとなりこの世を究極の闇が覆い尽くす。さらばだ！』

「デメエ！待ちやがれ！」

とガミオを追いかけるが、すでに麓へと移動していた。

その頃、ピーチ姫をキノコ王国病院へと運んだマリオは、ルイージが教えたのだろう。駆けつけてきたポーラとプーにマイタケ山での出来事を話す。

「なるほど、その煙で人間がグロンギになるのか」とプー。

「ああ、俺は見たんだ。煙を吸って息絶えた人がグロンギに変わるのを」

病院ではグロンギの被害にあった人間達で溢れ、パニックになっていた。とそこへネスとジェフがルイージをつれて駆けつける。

「ネス、それにジェフ。大丈夫？怪我してるみたいだけど？」

「心配ねえ、大丈夫だ。それより姫サマは無事か？ルイージに聞かされて来たんだ」

それが・・・とマリオは言葉を濁す。

「まだ意識が回復してないんだ・・・、俺が来たときから倒れていたし・・・きつと煙をすったんだ。もしそうだとしたらグロンギに・・・」

とマリオはつらそうに答える。（元はといえばヨッシーの所為なのだが、それにマリオは気づいていない）その言葉に一同の空気はさらに重くなってしまう。

「そう言えば、クロンボとやはら戦闘しか考えられない戦闘民族だったな？人間全てがクロンボにジョブチェンジすれば世界の終わりは確定的明らか」

そう言えば、とルイージはネスに聞く。

「ネスはゲゲルは失敗したって言ったよね？何でこんなことに・・・」

「・・・元々奴は目覚める筈のない存在だったんだ。だが、この世界も俺達の世界と同じように、滅びの現象が起き始めているみたいだな」

「俺達の世界・・・？もしかして、お前達の世界も？」

「まあな、プー、マリオたちに説明してくれ」

「わかった、カカツと、マツハで説明する」

ラーメンマソ説明中・・・

「なるほど・・・、つまり世界の破壊を防ぐために、俺たちの世界へとやってきた・・・か」

「そういう風になるな」

そんな中、病院にあるテレビから臨時ニュースが流れた。

『突如黒い煙と共に現れた未確認生命体は街にいる人々を襲い始めました。一部の情報によると、黒い煙の中にいる死者が未確認生命体となつて蘇る等...』

「くそっ、このままじゃ被害が広がっちゃう！行くぞ、ジェフ！グロンギどもをぶっ潰しに行くぞ！」

「わかった！」

と病院を出てガミオを倒しに向かうネスとジェフ。

そんな二人を見ているマリオにポーラは言う。

「マリオさん、あなたはどうするの？」

「俺は・・・戦えない」

そういうマリオにはいつもの陽気な面影は残っていなかった。

「ッ！兄さん！どうして!？」

怒鳴るルイージ、それを無視してマリオは逃げるようにピーチの病室へといった。

ピーチの病室。

ピーチは目を開ける。

（ここは・・・？あれ？確か私、グロンギに襲われて、マリオを呼んだらマリオの声が聞こえてきて・・・それから・・・なんだっけ？）

どうやらヨッシーに踏まれたことは覚えていないようだ。

「ピーチ姫・・・」

「マ・・・リオ・・・」

ピーチが目を覚ましたことに気づいたのかマリオが近づき手を握る。
「あなた・・・何やってるの・・・こんなところで・・・」
とマリオに聞く。

「俺は・・・俺はただ・・・姫に褒めてもらいたかった。姫に笑って欲しくて戦っただけだ・・・今の俺じゃ・・・戦えない」

とマリオは顔をそらしながらピーチに言う。どうやら泣いているのだろう・・・。そのしぐさでピーチはマリオが自分が黒い煙を吸って死に掛けていると勘違いしていることに気がつく。煙をすったんじゃないくて、何かに頭踏まれて気絶したんだといったかったが、この雰囲気と言えるはずもない。のであえて嘘をつく。

「私は、もうすぐ死ぬ・・・そしたらこの体もグロンギになるわ・・・そうになったら、マリオ、あなたは私を殺せる？」

「・・・ッ?!・・・出来ない・・・出来るわけがない!俺は・・・」

と口をつぐみ、そして思い切ったように言う。

「姫が!ピーチが好きだ!・・・!」
と告白した。

(えっ・・・好きって・・・私をマジで!?)

元から某亀大王から助けしてくれるマリオを好きだったため、ピーチはマリオが自分を好きだといってくれた嬉しさに顔がほころびそうになるのを押さえ、言う。

「マリオ・・・私の笑顔の為に、あんなに強いなら...世界中の人の笑顔の為に戦ったら、あなたはもっと強くなれる・・・」

そしてマリオの頬を撫で続ける。

「私に見せて・・・マリオ・・・あなたの力を・・・」

「命令かよ・・・ピーチ・・・」

と涙と鼻汁でぐしょぐしょの顔でマリオは言う。

「ええ・・・命令よ・・・」

とピーチは微笑む。マリオは腕で涙をふき取ると、吹っ切れた顔をして言う。

「行くぜ！ルイージ！異世界のフレンドを助けに行くぜ！」
とルイージに言う。

「兄さん・・・！うん！」

いつもの兄に戻り、少し涙が出たが、それをぬぐいルイージもマリオと共に同行する。

そしてマリオたちが出て行った後、ピーチは嬉しさのあまり顔をうずめふるふると泣く。

それを見たポーラとプーは苦しんでいるのかと思いかげよる。

「ピーチさん！大丈夫ですか！？」

「まさか、グロンギ化がもう始まって・・・」

「・・・違うの・・・、マリオが私のこと好きって言ってくれてうれしくて・・・、うふふふふ・・・仮病使うのもいいかも・・・」
「は？」

予想外の答えに半眼になるポーラとプーだった。

その頃、キノコ王国のある高層ビル。この屋上ではガミオが人間が襲われ、死に絶えてグロンギとなる繰り返しをただ眺めていた。

『ふふふ・・・、リントは全てグロンギと化し、戦いを求め続ける。そしてこの世を究極の闇が覆い尽くす！・・・ん？』

と違和感を感じ、感じた方向に目を向けるガミオ、そこにはディケイドライバーを装着したネスと、ディアドライバーを装着したジエフがいた。

『貴様らはクウガでも・・・リントでもない』

「知ったことか」

とガミオの言葉を一蹴するネス。

『どうやらお互いこの世界にはいてはならぬ存在らしいな』

「うるせえ黙れ、グロンギはグロンギらしくグロンギ語喋れつての」
そういうと、ネスはカードを一枚装填する。

『消えよ。リントは全て殺しあうグロンギとなる。それが宿命だっ

ただ』

「うるせえって言ってたよ！宿命とか何だが知らねえが、それに人間全部を巻き込むんじゃねーよ！このバカ！殺しあうんならテーマの仲間内でやれ！この人外野郎が！変身！」

「カメンライドウ、ディケイド！」

ディケイドに変身し、ガミオに向かっていくネス。ジェフも負けじとカードをディアードライバーに装填し変身する。

「僕だって、変身！」

「カメンライドウ、ディアード」

とディアードに変身してライドブツカーを拳銃のように変形させるジェフ。

「ハッ！どりゃあ！」

とディケイドは拳と蹴りを、ディアードは銃撃をガミオに叩き込むが一向に倒れる気配はない。

『ぬん！』

とガミオは闇の波動をディアードに向かって飛ばす。

「うわっ！わああああああああああああっ！」

まともにくらい、ビルへと落ちていくディアード。

「ジェフ！」

『人の心配をしている場合か？』

とディアードに気をとられている隙にガミオの後ろ回し蹴りの直撃を受けてしまう。

「ガハッ！うわあああああああああああああ！」

ディケイドもビルから落ちてしまう。2人とも変身しているためダメージは抑えられたが、そのダメージは半端ではない。それに運の悪いことに変身が解けてしまう。それもグロンギの群れのど真ん中である。

「こりゃ・・・やばいかな・・・」

と自分の死を覚悟するネス。

とそこへ、

「ヤッフウウウウウウウウウウウ！！！」

の声と共にグロンギ達が吹っ飛ばされる。ネスは吹っ飛ばされたほうを見やると、そこにはクウガに変身したマリオと彼と共に善戦しているルイーダだった。

「よお、ネス。大丈夫か？」

とネスに問いかける。

「マリオ、お前何で……」

「決まってるだろ、ダチを見捨てたら英雄マリオの名が廃る。それに……お前一人に戦わせたら、ピーチが笑わねえ」

『来たか、クウガ！それでも喰らうがいい！又オオオオオ！』

とガミオは再び闇の波動を放つ。

「させるかあ！ルイーダバリア！」

「へ？やっぱいいいいいいいい！！！」

ズドオオオオオオオオオオ！！！！

爆音が響き、煙が舞う。その煙が消えた所には黒焦げになっているルイーダがいた。ルイーダが倒れ、予想外にダメージが大きかったのかマリオのクウガの変身が解けてしまう。

「大丈夫か？マリオ？」

「ああ、なんとかな……弟バリアがなかったら危なかったぜ」

「正に外道極まりないね……あんた……」

『フハハハハハハハ！見たか！人間は強さを求め、戦いを求める！グロンギになるのも定めだ！』

とそんな4人を見て自身に満ちた声で笑うガミオ。だが、ネスはそんなガミオをにらみつける。

「定めだとかうるせえんだよ……、こいつが戦うのは無意味な戦いをしないようにするためだ」

『何……？』

「たとえ、弟を犠牲にしても、自分が闇に堕ちても、誰かを守りたい！そう信じてる！」

「何で僕が犠牲に……」

というルイージの突っ込みを無視して続ける。

「マリオが誰かの笑顔を守るんなら、俺がこいつを、いや、こいつらを支える！」

「ネス・・・」

「ネスさん・・・」

とネスを見るマリオとルイージ。

「君ならそう思ったよ」

と言いながらディアドライバーを装着しカードを取り出すジェフ。

「なあ、ジェフ知ってるか？こいつらの笑顔悪くないぜ」

ネスのその言葉を聞き、マリオの中に眠っていた本当の気持ちが目覚めた。そう、笑顔を守るために戦う戦士、仮面ライダークウガに。

『貴様らア・・・何者だ？』

「俺達か？俺達は通りすがりの・・・」

「仮面ライダーさ！」

「「覚えとけ！変身！」」

とお互いのバックルにカードを装填し変身する。

「「カメンライドウ・・・」」

「「ディケイド！」「ディアド！」」

「やってやるうぜ、マリオ！」

「おうよ！変身！」

とマリオもクウガへと変身する。

その時、ライドブッカードが勝手に開き、中から絵柄の消えたクウガのカードを含む三枚のカードが飛び出し、ディケイドの手に収まっていく。するとその瞬間、絵柄の無かった三枚のカードに絵柄が浮き出ていった。

「おっ！？何だ？」

とディケイドは訳が分からないようだ。

「ん？僕もだ」

とディアドもいきなりカードが飛び出しびっくりする。するとそのカードにはルイージの絵柄があった。

「なんだろうなこれ・・・」

と「ファイナルフォームライド」と書かれたカードを見て顔を見合
わせる二人。

クウガはというと、とつくに Grongi たちと戦闘を開始していた。

「オラオラオラオラ！ ってお前等！ 早く手伝えよ！」

「ああ、そうだったそうだった。忘れてたぜ」

と行こうとした時ふとディケイドにひらめくものがあつた。

そして近くにいた Grongi をぶんなくリクウガに近づく。

そしてさっきのカードを装填する。

「ファイナルフォームライドウ、ク・ク・ク・クウガ！」

「マリオ、ちよいとくすぐってーぞ」

「へ？」

そういうとディケイドはクウガの背中に手を伸ばし押す。

「おわっ！ うわわわわっ！」

それと同時にクウガは巨大なクワガタメカへと変身する。そうこれ
がクウガのファイナルフォームライド、『クウガゴウラム（以下 K
G）』なのだ。

「すごい・・・どうやってやったの？」

と驚きと尊敬を込めてディケイドはたずねる。

「簡単だ。さっきのカードをバックルに装填して、そいつの背中を
押せばいいんだよ」

とディケイドは答える。

「なるほどね・・・」

とそう言いながらディケイドはカードを装填する。

「ファイナルフォームライドウ、ル・ル・ル・ルイージ！」

「ちよつとごめんね」

「えっ？ ちよつ・・・待つてアッー！」

とディケイドはルイージの背中を押してみる。

するとルイージは巨大な盾となる。コレが、ルイージのファイナル
フォームライド、『ルイージシールド（以下 RS）』だ。 ってその

まんまやん！

「おお・・・ふつくしい・・・」

とディードは感想を述べる。

「さてと・・・乗れ、ジエフ、ルイーシ」

そついうとKGを発進させ、ディードとRSをのせるディケイド。

「よーし、全速前進DA！」

というディード。

『ヒャッハアアアアアアアア！ひき逃げだアアアアアアアア！』

ハイテンションなKGの突進により吹っ飛ばされるグロンギたち。
それを見たガミオはKGを危険な存在と認知し闇の波動をためる・

・が

ドゴガアアアアアアアアン！

『グハアアアアアアアアアアアアアア！』

KGに撥ね飛ばされ吹っ飛ば。

「止めだ！行くぜジエフ！」

「ああ」

とお互いのカードをバツクルに装填する。

「「ファイナルアタックライドウ」」

「ディ・ディ・ディ・ディケイド！」

「ディ・ディ・ディ・ディード！」

「「どりゃあああああああああああ！！！」」

とディケイドはとび蹴り『ディメンションキック』をディードは
とびアゴアタック『ディメインションクラッシャー』を放つ。

「俺も忘れんじゃねーぞ！」

とKGからクウガに戻りマイティキックを放つ。

『グワアアアアアアアアアア！』

3人ライダーの合体攻撃を喰らい、地面に叩きつけられるガミオ。
ちょうどルイーシもRSから戻り降りる。

だが、ガミオはまだ生きていた。

『糞がア！貴様等、許さんぞ・・・皆殺しだ！』

とそういうとグロンギたちがあつまり、ガミオはそれを吸収する。が
「させるかあ！」

「ファイナルアタックライドウ、ルルルリージ！」

バスコオオオオオオオオン！

『グホアアアアアアアアアアアアアアアア！』

とディードはすぐさまルイーダをRSに変えて、それを鉄球状に変形させ、ガミオをぶん殴る。

「よっしゃ、こいつで止めだ！」

そういうとディードはカードをもう一枚装填する。

「ファイナルアタックライドウ、クククウガ！」

クウガもKGとなりディードをのせ、再び体当たりを仕掛ける。

ディードもKGから降りるとライダーキックを放つ

「だりやあああああああああああ！」

「おりやあああああああああ！」

『又ワーーーーーーー！』

ディードアサルトを決め、ガミオは炎となり再び地面に叩きつけられる。

倒れたガミオに変身を解いたネスとジェフ、マリオ。そしてルイーダが歩み寄る。

「お前もかつては人間だったのかもな・・・」

『貴様・・・何処から来た？』

と死に掛けているガミオはネスに問う。

「てめえに喋る口なんかもってねえよ・・・、死ぬんならさっさと死ね」

とネスは冷淡な口調で返す。それを聞いたガミオはくっくくくと笑うと

『リント・・・闇が晴れるぞ』

とそう言って消えた。

戦いが終わり、ピーチ姫の病室。

そこには白い布が顔に敷かれたピーチ姫と、うなだれているプーとポーラがいた。

「・・・ピーチ姫は最後まで笑ってました」

そういうポーラ。マリオはもう動かないピーチに近づき、手を握り締めようとする・・・が。

ふとピーチの枕の下にある看板らしきものに気づく。そこにはこう書かれていた。

『ドッキリ大成功』と

「おい」

「・・・ピーチ姫・・・どういことですか・・・これは」

ルイージとマリオは怒りを通り越して呆れていた。するとピーチがいきなり起き上がり、申し訳なさそうに笑う。

「あはは・・・ごめんね・・・、怒ってる、二人とも？」

「お・ま・え・なあく！当たり前だろーが！あのときの俺の涙返せ！」

とピーチの頭をグリグリするマリオ。

その光景を見て、ネスはポーラとジェフ、プーに

「帰るぞ」

とうながす。

帰り道

「ヤッフー！ちよいと待ちな！」

とマリオがネスたちのあとを追いつ。ルイージも一緒だ。

「何だ？」

「ありがとな」

と感謝の言葉を言うマリオ。

「気にすんじゃねーよ」

「お礼と言っては何だが、俺も旅のメンバーに加えてくれ」

「ええっ！！！」

と驚いたのはルイーダ。

「ちよつと待つてよ！何で！」

ルイーダの問いにマリオは申し訳なさそうに言う。

「すまねえ・・・ルイーダ・・・だけどな、俺は冒険してえんだ！こいつらとなら面白い冒険が出来るかも知れねえ！頼むこの通りだ！」

と土下座するマリオ。

「まあいいぜ、俺は来るものは拒まず、去るものは追わず主義だからな」

と許可をするネス。

こうしてマリオが仲間に加わった。

「じゃ、留守番頼んだぜルイーダ」

そついうとマリオはネスたちについていった。

啞然とするルイーダ。そのルイーダの後ろを怪しげなこつもりが一匹見ていたのだった・・・。

NEXT STAGE KIVA!

第4話「クウガ編その3、超絶！」（後書き）

次はキバ編なのですが、ワタル役を誰にしようかなと検討中・・・。
多分更新が遅くなると思うのでご了承・・・。
m | | m

第5話「キバ編その1、ヒヤッハー！キバの世界だ！（b y マリオ）（前書き）」

注意、この世界のライダーが女性です。

オリジナル必殺技あり。

それでもおこな人はどうぞ。

第5話「キバ編その1、ヒヤッハー！キバの世界だ！（byマリオ）」

クウガの世界を救うことに成功した、ネスたち。そして、彼らは次の世界へと向かう。

ネスたちが次の世界に行っている頃、ルイージは変なこうもりのような奴に連れて行かれていた。

「ぎゃあああああああああ！助けて！ってか降ろして！」

と謎のこうもりにつかまれ宙ぶらりんな形になっているルイージ。

「えいっ！」

だが、そんなことは聞きもせず、突如現れた歪みの壁にルイージを放り込む謎のこうもり。

「わひゃあああああああ！あだっ！」

とルイージが放り込まれた先は西洋風の豪華な部屋であった。ルイージは何がどうなっているのか分からずうろたえる。その時、部屋の扉が開き、部屋の中にそれぞれ青い狼、緑の魚人、紫のフランケンのような姿の怪物と数人のメイドが部屋に入ってきた。

「イヤアアアアアアアアア！今度は化け物おおおおおおおおお！」

と目の前の怪物を見てムンクの叫びのような形相で叫ぶルイージだった。

その頃、新たな世界にやってきたネスたちは、この世界を調べるために外に出てみる。

「おお、なんかキノコ王国とは雰囲気が違うぜ」

と仲間になりたての仮面ライダークウガことマリオが言いながら外へと出て、あたりを見回す。

ふとマリオはネスたちの服装を見て言う。

「あれ？皆なんか姿変わってないか？」

確かにマリオの言うとおり、ネス達の服装が変わっていた。ネスと

ポーラは礼服とバイオリンケースと持っており、ジェフはタンクトップ、革ジャン、ギターといういでたち、プーは何故か、レ。ザ。ラモンHGのような服装だった。マリオはいつもの服装である。

「何で俺はこんなものっそい恥ずかしい服装なのか・・・プーは深い悲しみに包まれた・・・」

とおなじみorzのポーズをとるプー。

「何か僕の服装かつこいいかも・・・」

これはジェフだ。

「これが私達のこの世界での役割なのかな・・・」

とバイオリンケースと礼服を見て言うポーラ。

「そのようだな」

とネス。

「へー、でもさ何で俺は変わらないんだ？」

とマリオは全然変わっていない自分の服装を見て言う。

「それはお前が俺たちとは違う世界の人間だから」

「なるほどね・・・ん？」

とマリオは何かに気づきその方向へ振り向く。ネス達もマリオにつられそれを見た。

「・・・な・・・なんじゃありやあ！！！！」「・・・」

とそれを見たジェフを除く4人は驚愕の声をあげる。まあ驚くのも無理はない何故なら一際目立つ高層ビルに竜の頭が出ているのである。

「おいしい！何ですかあれは！？ここはイヴァリースですか！？何処のキングベヒンモスだありや！！？」

と興奮のあまり謎の単語を口走るプー。

「ふうん、あれはキャッスルドラン、『仮面ライダーキバ』に出てくる歩くお城みたいなものさ」

とジェフが龍の頭つき高層ビルの説明をする。

「じゃあここは、キバの世界ってやつか？」
とネス。

「うん、そういうことになるよ……おや?」

「えーとなになに・・・人間とファンガイアの親睦会。○月×日開催・・・って何iiiiiiiiiiiっ!」

「ジェフよ、ファンガイアとは何だ？今すぐ教えるべきそうすべき」とプーが説明をせまる。

「おお！成る程！あのステンドグラスのような化け物か！」

「それじゃあ、そのファンガイアと人間が一緒に生活しているってことになるんだ」

「とにかく、俺たちはこの世界のことを詳しく調べる必要があるな・
・行こうぜ皆」

町並みを探索中・・・

「平和だなあ……」

「平和だね……」

「平和だあ・・・」

[illegible]

「僕らこの世界をなんとかするためにここに来たんだろ……それ

「まあ落ち着きたまえよ、ジェフ君。あまり怒りすぎると寿命がストレスでマッハだぞ」

「どうどう、ジェフ。これ食って落ち着け」

「ヒーン！ っていういい加減にしろおおおおおおおおお！」

と銃を今にも乱射しそうな勢いで怒鳴るジエフ。

「町外れに、廃墟のような物凄いボロボロの家を見つけたんだ。そ

いかな？」

ネスはふーん・・・とうなった後、
「わかった、それじゃあ言ってみるか」
というわけでそこに向かうこととなった。

ゴーストハウス前・・・。

「ここがゴーストハウスか・・・」

とネスはそのぼろ家を見る。その家は遠くからみたら大きくて立派に見えるが、近くで見ると門は錆び付いており、家には所々にひび割れがあつたりツタが貼り付いていたりして不気味な雰囲気があつた。

ネス達はそれを見ていると突然、

ギーギギー・・・。

「な・・・何だコリヤ!？」

と耳を押さえながらマリオ。

「もしかして・・・お化けかな・・・?」

と言うポーラにネスは反論する。

「いや、お化けじゃないな・・・、この音はもしかして・・・」

とネスはバイオリンケースからバイオリンを取り出す。

「ネス・・・どうしたのバイオリンなんか取り出して・・・」

とネスの行動に頭に疑問符を浮かべるポーラ。

「ちよつと対抗するだけだ。ポーラも準備して」

「え・・・うん」

そついうとポーラもバイオリンを取り出す。

「よし、僕だつて」

とギターを取り出すが、

「お前はいいんだよ」

とネスに却下される。

「(´・ω・｀) ショボーン」

うなだれるジェフ。

「なら俺が!」

と腰をかくかくと振るプー。

ドゲシ！

「オウフ！」

とマリオとネスの無言のダブルキックが炸裂した。

「・・・つたく、はじめるぞ」

廃墟のような家の中。その中也荒れ果てており、所々床が抜けてたり蜘蛛の巣が張り巡らせ、その中を蜘蛛が走り回っている。そんな家の一室で一人のロングヘアの少女が埃被ったバイオリンを弾いていた。そのバイオリンからは音楽らしい音は出ず、出るのは不快な酷い音だけだった。少女はため息をついてもう一度バイオリンを弾こうとする。その時だった。

♪♪♪

「え・・・？」

と外から美しいメロディが聞こえ、少女は気になって外を見る。そこには演奏をしているネスとポーラがいた。

「何だろう・・・あの人たち」

そう呟くと少女はバイオリンを置いて庭に出て行く。少女が庭に出ると、ネスとポーラは演奏をやめた。

「お前か？あの某猫型ロボットが活躍する漫画に出てくる主人公の未来の嫁が引くバイオリンの音みたいなアレは？近所迷惑になるからやめとけ」

「ネス！例えばがわかんないし！それにそんな言い方は無いと思うよ！・・・あはは、ごめんね。この人も悪気があっていったわけじゃ・・・」

と少女に近づくと、

「ボクに近寄るな！」

「え・・・？」

ポーラは少女の突然の怒鳴り声に足を止めた。少女の顔は先ほどまでと打って変わって険しいものとなっている。

「人間が・・・ボクに近寄るな」

「うはwwwボクっ娘萌えwwwボディバァ!」

とジェフが近づこうとするがネスの鉄拳でぶっ飛ばされる。ネスはジェフをぶっ飛ばしたあと聞く。

「お前ファンガイアか?」

「だったら何?ボクが怖いのか?」

と少女はうつむき加減に言う。

「いや・・・俺は人間もファンガイアも変わらないと思うぞ」

そうだよ、とポーラも続ける。

「私も平気だよ。人を襲わないファンガイアなら人と一緒じゃない」
だが、少女はうつむきながら一人呟く。

「人を襲わないファンガイア・・・そんなの・・・表面上だけだ・・・」

「え・・・?」

少女の独り言が聞き取れず、もう一度聞こうとポーラが少女に近づいたとき。

「きゃああああああああああああっ!」

と女性の悲鳴が聞こえ、ネス達はその声のしたほうに振り向く。

「女の悲鳴・・・皆行くぞ!」

そう言うところはその現場へと直行する。そしてジェフ、プー、マリオが後へと続く。

「あっ!ちよつとネス!?皆、待ってよ!」

とポーラも後から付いて行った。

「・・・何かあるみたい・・・ボクも行こう」

と少女もネス達に気づかれないうちに現場へと向かった。

街中の広場。この場所で先程の悲鳴をあげた女性がライオン型のフ

アンガイア、ライオファンガイア（略称Rファンガイア）に追われていた。

『貴様は掟を破った。どうなるかはわかっているな？』

「お、お願いします！もう決してしませんので、どうか…！」

女性は必死に命乞いするが、Rファンガイアは聞く耳持たずといった感じで拳を振り上げる。

「待ちやが…れっ！」

「おおああああああああああっ！」

『ん？ぬ、ぬわあっ！ぐはあっ！』

とRファンガイアが拳を振り下ろそうとする間一髪でネスがジェフをブン投げ、ぶつけたのだ。

それと同時に女性の前に立ちはだかるネス。

Rファンガイアは頭を抑えながら立ち上がり、ネスをにらむ。

『貴様…一体何のまねだ！』

「うるせえ！テメエらこそ何の真似だ！何が人間とファンガイアの共存だよ！」

とRファンガイアに向かって反論すると、ディケイドライバーを着し、カードを装填する。

「変身…！」

『カメンライドウ、ディケイド！』

とディケイドへと変身した。

『何！貴様っ！グハア！』

といきなりRファンガイアをぶん殴るディケイド。

「あまり、面倒なことしたくねーからな、行くぜ！」

とディケイドは一枚のカードを取り出し、装填する。

『アタックライドウ、スラッシュ！』

ライドブッカーをソードモードに変形させ、Rファンガイアにじりよる。

『ま…待て！お前は思い違いをしている！あの女h「どやかましい！問答無用だ！」』

とRファンガイアは弁解するが、ディケイドは聞く耳を持たず、もう一枚のカードを装填する。

『ファイナルアタックライドウ、ディディディディケイド！天覇雷鳴斬！』

ベルトの電子音と共にディケイドはソードブッカーを天にかかげる。すると剣先から金色のオーラがほとばしり、高層ビルぐらいはあるんじゃないかと思うくらい長さになる。

『う・・・うわあああああああああああああつ！』

Rファンガイアはその光景に腰を抜かし逃げ出そうとする。だが、ディケイドはそれを見逃さなかった。

「逃がすかアアアアアアアアアアアアアアアア！」

とソードブッカーを思いっきり振り下ろした。

『ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

とRファンガイアは断末魔の悲鳴をあげ消滅した。

その一部始終を見ていた少女は絶句していた。バツクルの電子音から流れていた『ディケイド』をしっかりと聞いていたのだ、そしてそれを知っている。

「ディケイド・・・」

とそこへこうもりが（冒頭でルイージを連れ出したこうもりとは違う）少女に言う。

「おいミク！ディケイドってキバーラが警告していた・・・」

「っ！お前！」

少女・ミク・に気づく、ディケイド。一方のミクは今だディケイドをにらんでいた。

「キバット！」

「おう！キバって行くぜ！」

とミクはキバットと呼ばれるこうもりをつかみ左手に押し付ける。すると

「ガブッ！」

なんとキバットはミクの手に思いっきり噛みついたのである。そし

て噛まれたミクの顔にはステンドグラスのような模様が浮かび、腰の所に鎖が何重にも巻きつき赤いベルトへと変化していった。

「変身ッ！」

ミクは現れたベルトの止まり木部分にセットすると、ミクの体が徐々に変化し、異形の姿になっていく。そう、これこそが、この世界の仮面ライダー、キバなのである。

「はあああああっ！」

キバは雄たけびを上げるとディケイドに向かっていった。

何故、キバはディケイドを襲うのか？ディケイドの運命はいかに？

続く・・・

第5話「キバ編その1、ヒヤッハー！キバの世界だ！（byマリオ）（後書き）」

もう少しルイージが出てくるまで書きたかったのですが、次回に持ち越しになりました。すいません・・・m（| |）m。でも次回はちゃんと登場させますので楽しみに。

第6話「キバ編その2 ファンガイアの姫、ミク」(前書き)

ギャグがあまり少ないような気がする・・・。

それとグダグダだったりするかもしれない・・・。

それではキバ編の第二楽譜開演！

第6話「キバ編その2 ファンガイアの姫、ミク」

前回のあらすじ・・・Rファンガイアを倒したらいきなりミクと呼ばれる少女が現れ、仮面ライダーキバに変身し、ディケイドに襲い掛かってきた。sonだけ。

「あらずじ、簡潔すぎだろ！オイ！」

と上記のあらすじの内容に突っ込むディケイド。

「誰と話している！相手はボクだ！」

といいながらディケイドに近づくキバ。

「ああ、そうだ。お前この世界の仮面ライダーなのか？」

と聞くが、あっさりスルーされ殴りかかられる。

「どわっ！あつぶねーな！何しやがんだ！」

「お前の事は聞いているぞ！悪魔ッ！」

「悪魔だあ・・・またかよ・・・」

と以前マリオがネスに対していったようにキバに変身したミクと呼ばれる少女もまた、ディケイドのことを悪魔と呼んでいるのである。キバは拳、蹴りをディケイドに放つが、それをことごとく弾いたりかわしたりしている。

「くそっ！」

と毒づくキバ。

「おいおい、ミク落ち着けて・・・あせらず落ち着いて戦うんだよ」

「わかってる！」

ベルトの止まり木に止まっているキバットがキバを落ち着かせようとするが、キバは反論し、左腰にある三つの笛の内緑の笛をキバットに吹かせた。

「キバット頼む！」

「おう！バツシャーマグナムッ！」

キバットの掛け声と共に奇妙なメロディが流れ、それはキャッスル

ドランへと伝わっていく。

一方のキャッスルドラン内では・・・

王の側近である三体のモンスターが城内の中を走り回っていた。

『姫！一体何処に行かれたのですか？！おい！バツシャー！お前、ちゃんと探しているのか！？』

と狼のようなモンスターがバツシャーという半漁人のモンスターに言う。

『うるっさいな！黙ってるよガルル！姫！いるなら返事をしてくださーい！』

と先ほどの狼のモンスター、ガルルに反論しあたりを探すバツシャー！。

そんな二人を尻目にフランケンのようなモンスターが何故かちやぶ台にすわりお茶をすすっていた。

『『ドツガ！てめーも探すんだよ！！！！』』

『サーセンｗｗｗｗ』

とフランケンのようなモンスタードツガに突っ込むガルルとバツシャー。そしてあらかさま探すがこの城の主である姫は見つからず、ガルルは嘆息する。

『まったく、あの姫には自覚というのは無いのか…？』
とその時、

くくくくくく

先程キバットが吹いたメロディと同じものが城内に響き渡っていた。それを聞いた三体は思わず窓側の方を振り向く。

『あ、呼び出した！』

そのメロディを聴いた三体の内の一体、バツシャーはその姿を彫像に変えて外へと飛び出していった。

「ん？何だ！？」

とディケイドは何かが来る気配を感じ、それを見やる。すると彫像

に姿を変えたバツシャーがキバの元に飛んできた。

「おいしい！何ですかあれは突如妙な音楽が流れたと思ったら妙な石像が現れたんですがねえ！」

そしてその彫像をキバが捕まえると、彫像は銃のような物に変化し、キバの右腕に鎖が巻き付いてく。鎖が解き放たれると、右腕が緑色に変わり、次にボディにも鎖が巻き付いていくと其処も緑の魚のよくな装甲へと変化し、最後にキバとキバットの瞳が緑へと変わっていった。

「あれはバツシャーフォーム！」

と特撮などに詳しいと定評のあるジェフが叫ぶ。

「バツシャーフォーム？」

とポーラが聞き返す。

「そうだ、キバの持つフォームの一つ、アームズモンスター『バツシャー』の力を借りた遠距離戦型のフォームだ」

「銃なら銃だ！行くぜ！」

とディケイドはそう言うと言つとライドブッカーを銃に変形させ、バツシャーフォームキバ（Bキバ）に向かって発砲する。が、Bキバのバツシャーマグナムの水弾で相殺されてしまう。

「くそっ！『カチッ！カチッ！』あれ？おいおい！弾切れかよ！？」
そのうち弾切れに陥ってしまった。

「おかえしだ！」

とバツシャーマグナムをディケイドに向ける。

「・・・やつべ・・・」

ダンッ！ダンッ！ダンッ！

「うおおおおおっ！」

とBキバは水弾を発射する。がそれと同時にディケイドは某SFサイバーアクション3部作の第一作目の主人公の如く腕をばたつかせながら体の上部を仰け反らせ水弾をかわす。そしてそのまま、上部を起こし仁王立ちする。

「見たか！これが俺の特技、マト。ツ。ス避け！」

と得意げに自慢するディケイド。そしてそのまま反撃に転じる。

「お転婆娘にちよいとお仕置きしねえとな！」

とカードを取り出しそれをディケイドライバーに装填させる。

『カメンライドウ、クウガ！』

電子音声と共にディケイドの身体が全く違う赤い鎧の戦士へと変わっていく。その姿とは…

「マリオさんと同じクウガ！？」

とポーラは驚く。マリオは、

「マンマミーア！」

とショックを受けていた。

そうマリオがショックを受けポーラが驚いたのは無理も無い、マリオが変身するクウガと同じ姿になっていたからだ。

「姿が変わった！？」

「ヒヤッハー！お仕置きタイムだ！」

とディケイドクウガ（Dクウガ）はBキバとの間合いを詰め、某ボクサー兄弟の長男も真っ青のパンチのラッシュでバツシャーマグナムを殴り飛ばし、腹や顔に拳を叩き込む。

「うっ！がふっ！あぐっ！・・・くそっ！ドツガ、来い！」

「ドツガハンマー！」

キバはすぐに体勢を戻し、次に紫の笛、ドツガフェッスルをキバットに吹かせる。

重低音が辺りに響き渡ると、先程のバツシャーの彫像と同じように今度は紫の彫像がキバの元に飛んで来た。キバは飛んで来た彫像を掴むと、その彫像は拳のような鎚、ドツガハンマーへと変化し、再びキバの身体に鎖が巻き付いていく。鎖が解き放たれると、キバの鎧は左右対称の重厚な紫の鎧になっており、キバとキバットの瞳も紫へと変色していった。

「気をつける！ネス！ドツガフォームだ！」

「わかってらあ！ってうおっ！」

「ハアアッ！」

キバはドツガハンマーを振り回し、Dクウガを追い詰めていこうとする。が……

「そっちがフォームチェンジなら、こっちもフォームチェンジだぜ！」

Dクウガはキバの攻撃をかわしながらライドブツカーから一枚の取り出し、カードをデイクイドライバーへとセットする。

『フォームライドウ、クウガ タイタン』

電子音声が響くと、Dクウガの姿が白銀の鎧に紫のラインが入った
 タイタンフォームへと変化した。そしてプーに近づく

「悪いが借りるぜ！」

「おいしい、大丈夫か？壊すなよ。これグラットンソード並に貴重だから」

とプーの持っている剣を借り、タイタンソードに変化させる。

そしてキバと武器を打ち合い、ドツガハンマーを弾き飛ばす。

「ああっ！ドツガ！クソオツ！ガルル、お前も来い！」

「ガルルセイバー！」

キバは左腰にある最後のガルルフエツスルをキバツトに吹かせる。

キバツトが音色を奏でると今度は青い彫像が飛んで来て、それがキバの手に収まると金色の刃が輝くガルルセイバーへと変化し、更にキバも鎖が巻きつき、今度は胴体と左腕のみ青い鎧になり瞳も青く変色した。

「今度はガルフォームだ！クウガタイタンじゃ分が悪すぎるぞ！」

「確かに……ものすげえ速いし……あ」

と物凄い速いキバの斬撃でタイタンソードが折れてしまい、元のプーの剣に戻ってしまう。

「オイイイイイイイ！ネスお前弁償しやがれええええええええ！」

プーの怒りと悲しみのこもった声で叫ぶ。

「俺は悪くねえよ！悪いのはこのお転婆娘だつての！しっかしやるなあお前」

とプーをスルーしキバのほうを見やるDクウガ。

「うるさい！お前はこの世界を破壊する為に来た悪魔なんだろ？！そんな奴がボクに語りかけるな！」

キバはガルルセイバーの持ち手の部分でDクウガの手を叩く。

「あだつ！この野郎！やりやがったな！」

Dクウガはキバから離れ、ライドブッカーからカードを取り出し、
デイクイドライバーへとセットする。

『フォームライドウ、クウガ ドラゴン』

電子音声が響くと今度は青い鎧のドラゴンフォームへと変化した。

「ポーラ、俺のバットを！」

「わかった！それっ！」

とポーラはバットをDクウガに投げて渡すと、バットはドラゴンロ
ツドへと変わった。

「オラア！」

Dクウガはドラゴンロッドでキバのガルルセイバーを弾き、そのま
ま腹部に力を込めた突きを放った。

「うわああっ！！！」

キバは吹き飛ばされ、壁にぶつかって倒れると元の赤い姿へと戻っ
ていった。Dクウガもデイクイドへと戻り、倒れているキバへと近
づいていく。

「ま、まだだ！まだ戦える！」

キバは叩きつけられた身体を起こし、ふらつきながらも再び構える。

「おいおい・・・まだやる気かよ？あんまりしつこいと嫌われるぜ」
とデイクイドも拳を握る。そして同時に拳を振り上げたその時だっ
た。

「姫様！ネスさん！ストーーーーーッブ！」

「え？」

「あ？」

S M A A A A A A A A A A A A A A A A S H ! × 2

とキバとデイクイドの間を挟むように緑色の帽子をかぶった男が割

つて入るがタイミングが悪かったのか2人の拳にサンドイッチ状態になってしまっている。

その男はディケイドやポーラ達、マリオが知っている人物だった。

「……ルイージ!?」「……」

「と……とりあえず、ネスさんと姫……落ち着いて……ぼ、暴力……反……対……」

そう言うルイージは仰向けに倒れ、気絶してしまった。

「おわー!ルイージ!プ、プー!とりあえずルイージにライフアップだ!」

と慌ててプーに回復を指示するマリオ。

「わかった力カツとライフアップ!」

ピロリロロン♪

「何で!DQの呪文使用のSE!?!」

とディケイドが上のSEに対し突っ込む。

「はいもしもし」

と何故かポーラが携帯を取り出し出る。

「携帯かよ!!!!」

それを見て突っ込むジェフ。

それを見たキバは、

「何なんだろう……この人たち……」

とディケイドを倒すのを忘れ呆然としていた……。

十分後……

ルイージがミクに訳を聞いた。もうすでにネスとミクは変身を解いている。

「姫、何があったんです?」

「こいつがファンガイアを殺した。だから倒そうとしたんだ、この悪魔を……」

といいながらネスをにらみつける。

「おいおい、殺したって……俺はファンガイアが人間を襲ってた

から倒しただけだぜ」

とネスは反論する。

『いや、それは違うぞ人間』

「へ？」

とRファンガイアとは別者が先程の女性の首を抑えていた。

『この女はファンガイアだ。そしてこの女は人間のライフエナジーを吸って殺人という最大の禁忌を犯した。禁忌を犯した者に下す罰は、死刑だ』

「う、うう・・・」

ファンガイアが女性の首を掴んでいる手の力を強めると、女性の顔にステンドグラスのような模様が浮かび上がっていく。その模様こそが、ファンガイアである証拠だった。

「な・・・なによ・・・ちよつとライフエナジーを吸いすぎて人を殺したのって事故じゃない！何が禁忌よ！」

「・・・っ！」

と開き直る女性の一言にミクは一瞬傷ついた表情になる。ファンガイアは女性を放すとすぐさま持っていた剣で女性の首をはねた。

パリーイイイイイイイン！

女性は断末魔の悲鳴をあげることなくそのまま硝子となって散っていった。

「ああいう禁忌を犯したファンガイアに罰を与えるのが僕ら親衛隊の役目なんだ」

とルイージが語る。マリオはルイージの『親衛隊』と言う単語を聞き、途端に表情を変えた。

「『僕ら親衛隊』・・・？おゐ・・・お前いつから俺の許可なしにそんなもんに入ってたァー！おぬしも偉くなったもんじゃのォー！」

「ギャアアアアアアアアア！兄さん、ヘッドロックやめて！」
とマリオはルイージにヘッドロックする。

ネスはその光景を見てふと思い出したことを口に出す。

「ルイージ、お前なんでこの世界にいるんだ？」

ネスの家。

ネス達はルイージに何故この世界に来てしまった訳を聴くためにここにいた。

「なるほど・・・妙なこうもりのような奴にこの世界につれてこられたって訳か・・・」

「うん、そういうこと。初めは怪物とかがいて怖かったけどすごく親切でさ・・・」

とルイージが話を続けるがマリオが口を挟む。

「それでそのまま親衛隊に入ったのか？」

「まあ、そうだね。あのミクって子は人間とファンガイアの間に生まれたらしくて、人間とファンガイアの架け橋になるようになるように一生懸命頑張っているって聞いてさ、僕としてもなんか力になりたいなと思ったんだ」

「ふゝん成る程・・・大体分かった」

とマリオはルイージの話を聞き立ち上がる。

「お前惚れてるな？あのミクって子に」

とマリオの指摘にルイージが顔を赤くして否定する。

「えええええええ！？いやいやいやいやいやいや！無理だから！大体ミクはファンガイアのお姫様なんだよ！？僕なんかじゃ到底つりあわないって！」

「オイイ、顔が赤くなってるんですがねえ。ルイージがああのミクって子を好きになっっているのは確定的明らか」

とプーがルイージを茶化す。

「違うってば！」

とルイージも向きになる。とネスはルイージの肩を叩く。

「大丈夫だ、俺があの子をお前のキューピットになつてやるぜ」

と何故か目を輝かせながらルイージに言うネス。

「だから、違うって言うてんでしょうがああああああああああ

あああああつ！！！！！」

とルイーダの悲痛な悲鳴がネス宅に響いた……。

一方、キャッスルドランでは先程の戦いから戻ったミクが玉座に座っていた。その周りにはガルル達アームズモンスター達が何やら話し合いをしている。

『即位式はいつにしようか？』

『フム、そうだな……来月ぐらいはどうだ？』

『いいね、それ賛成』

『ズズズズ……』（お茶をすする音）

『ドツガ、お前も参加しろよ……』

アームズモンスター達はどうやらミクの即位式の日付を決めているようだ。肝心のミクは浮かない顔をしてうつむいていた。

『姫、どうなされた？』

とミクの様子に気づきガルルが聞く。

『ボクは王にはなれない……』

ミクの言葉にアームズモンスターは啞然となる。

『な、何故ですか姫？！』

『今日もキバとなって戦ったではないか！』

『姫、貴女は人間とファンガイアの架け橋となるお方です！どうか、もう一度お考え直し下さい！』

アームズモンスター達はミクを説得するが、ミクはそんなことはお構いなしに出て行ってしまう。

『姫、行っちゃったね』

『む……ファンガイアの姫とはいえ、まだ14の少女……やはり王になるには重荷だったか……』

『そうだな、はあ……せめてあの方がお戻りになられたら……』
とバッシュ、ドツガ、ガルルは主のいない玉座を見てため息をついた……。その光景を影から見ていたものがあることも知らずに……。

翌日、ミクは町を歩いてた。何処かへ向かうワケでもなく、ただ街の中を歩き続けていたのだ。そんな時、

「あれ？そんなくらい顔して何処に行くの？」

とルイージがやって来た。

「ルイージ・・・」

とミクはルイージに近づこうとするが、

「ううん、別に・・・なんでもないよ」

とすぐに後ろを振り向きまた何処かへと向かおうとする。

「ちょ、ちよつと待ってよ！昨日のことだけど・・・ネスさんのこと許してやって欲しいんだ。あの人は僕の友達でさ・・・」

「ッ！お前、あの悪魔の仲間だったのか？」

とネスが話題に出たのか、ルイージをにらむミク。

「いや、確かにネスさんはああいわずれてる所もあるけど、根は優しい人なんだ。だからネスさんのこと許してやって欲しいんだよ」
とルイージはミクに頭を下げる。ミクはどうすればいいか分からずただ呆然とするだけだった。

「あ、そういえばミク、何処に行くつもりだったの？」

「別に・・・」

ミクはそっぽを向いて立ち去ろうとするが、ルイージに頭を撫でられる。

「何するんだよ！」

「あまり一人で抱え込まないで、辛い事があつたら僕や兄さんが相談に乗るからさ」

とルイージは今自分に言える最大限の言葉をミクに伝える。

「それに、行きたい所や欲しいものがあつたら言つて。何処にだつてつれてつてあげるし、何だつてあげるから」

とルイージは言つとそのまま立ち去つた。

「ルイージ・・・」

ミクは小さくなっていくルイージを見つめながらしばらく考えた後、

顔を赤らめながらキャッスルドランへと戻っていった。

一方、ネス、ポーラは昨日、この世界で何をすべきなのかヒントを得るべくキバと戦ったボロ家を訪ねていた。が肝心のミクはいないので分からずじまいだった。

「うーん・・・手がかりなしか・・・」

「そうだね・・・もどろつか？」

と帰ろうとしたその時だった。

ガタン！

と何かが動く音が聞こえる。

「あれ？何か物音が・・・」

「俺も聞こえたぞ、行こうぜポーラ」

そう言うのと部屋の中へ入っていった。

この家の中は昨日と変わらず荒れていた。だが違うと言えば中にいたのはミクではなく青の髪に荒んだ服を着た青年だった。男は手元にあったバイオリンのホコリを手で拭き取りながら物思いに耽っていた。そんな時……

~~~~~

突然家の下からバイオリンの演奏が聞こえ、青年は一瞬驚くがそのメロディを聞いて心をその演奏に委ねた。そしてその演奏を奏でているネスは階段を登って二階へと上がり、暫くバイオリンを奏でた後演奏を止めた。

「君は？」

と青年が聞く。

「気にしないでいいぜ、通りすがりのバイオリン弾きだ。あんたは？」

と弾いていたバイオリンをケースに直し、近くの壁に立てかける。

青年はしばらく黙った後、口を開いた。

「僕はこの家で暮らしていたんだ。愛する恋人や妹と暮らしていて

ね・・・幸せな生活を続けていた。だけどその生活も長くは続かなかった」

と寂しげな表情で窓を見つめる。

「何かあったんですか？」

とポーラが聞く。青年はいや、と首を振って続ける。

「必然だったただだよ。やはり、人間と共に暮らすというのは無理だったんだ…」

「人間と？あんだ、ファンガイアなのか？」

とネスは青年に聞く。だが、青年は答えなかった。

「さあ、どうだろうね・・・じゃあ僕は行くよ。すばらしい演奏ありがとう」

と言うと青年はバイオリンを持ってポロ家を出て行く。ポーラはそれを見て

「なんだったんだろう・・・あの人」

「さあな・・・手掛かりは見つかんねーし、他当たるか」

とポロ家を後にするネスとポーラ、しかし・・・まさかこの後、とんでもない事件が起ることを2人はまだ知らなかったのである。

その事件とはまた次回ツツ！

続く・・・

## 第6話「キバ編その2 ファンガイアの姫、ミク」(後書き)

多分キバ編は俺の体力上4分割をせざるを得ないような気がする・。  
・。あとディアードのバトルシーンは次回ぐらいだと思います。次回も楽しみに。

第7話「キバ編その3 ルラギッタ、アームズモンスターズ!? デイアード、

注意、

オンドウル語あり、ヘル○ングネタあり。クウガが早めに黒くなります。

それでもいい人はどうぞ。

第7話「キバ編その3 ルラギッタ、アームズモンスターズ!? ディアード、

手掛かりを探す為に街中を回って一時間が経ち、ネスとポーラは川原で一休みをしていた。結果は、全くのゼロでポーラはため息をつきながら、ネスは写真を撮影していた。

「全然手がかりが見つからないね・・・」

「全くだぜ、この世界で何をすりゃいいんだ? もう何か疲れたし、帰るか・・・」

とネスが言い出したその時、

「フフフ・・・何をしたらいいかわからないって感じね・・・」

「・・・!?」

突然聞こえてきた声に二人は驚き辺りを見回す。そして二人の目の前にコウモリのような何かがクスクスと笑いながら現れた。

「何だ!? キバットを白くしたみたいなのこうもり・・・?」

「もしかしてルイージさんの言っていた変なこうもりってコレのことかな?」

「誰が変なこうもりよ! 私にはキバーラっていうれっきとした名前があるの!」

とポーラの変なこうもり発言に怒り、彼女の頭をペシペシと叩く変なこうもりもといキバーラ。

「ふーん、キバーラね・・・。所でおまえは俺達がこの世界で何をしなきゃいけないのか知ってるのか?」

とネスの問いにキバーラはポーラの頭をたたくのをやめ、こっちを見る。

「ああ、そうだった。ディケイド・・・あなたはこの世界を破壊しに来たのよ」

「へー」

「ってリアクション薄ッ! もうちょっと驚きなさいよ! 何そのリアクションの薄さ! サザ。さんの。平の頭並に薄いわよ!・・・あら

？」

とキバーラやネス、ポーラの周りを歪みの壁が包み込んだ。それが晴れるとスタジアムの中にいた。

「どこだここ？　つてかこれお前の仕業じゃねーのか？」

とキバーラに詰め寄るネス。

「私じゃないわよ！　ちっ！　まさかあのタンクトップ眼鏡！　また邪魔を・・・やっぱり・・・」

とネスじゃない方を見て青ざめるキバーラ。彼女の視線の先を追ってみてみると、其処にいたのは金色のラインが入った黒い鎧を纏い紫の瞳を光らす仮面ライダーがいた。

「貴様が破壊者か？　もらうぞ、そのベルト！」

そのライダーはそうつぶやくと手に持っていた剣みたいなものを振り回しネスたちに襲いかかる。

「どわっ！　あぶねえな！　何モンだお前！？」

「あれは確か・・・仮面ライダーカイザ！？　確か前にジェフから借りてきて一緒に見たDVD『仮面ライダー555（ファイズ）』に出てきたライダーだよ」

とポーラが謎のライダーもといカイザの説明をする。

「あー、そっちなやそう言う奴出てきたような気がするな・・・。つて思い出話はともかくポーラ危ないから離れてろ！　行くぜ、変身！」とカードをディケイドライバーにセットする。

『カメンライドウ、ディケイド！』

そしてネスはディケイドに変身し、さらに、

『アタックライドウ、スラッシュ！』

ライドブッカーをソードモードに変形させ、カイザに斬りかかる。

「てめえ・・・何で俺を狙いやがる！？」

「邪魔なんだよ・・・俺の目の前に立つやつは全て・・・！」

「そう・・・かよっ！」

ディケイドはそう言うとかいザに頭突きをかます。

「グアッ！　貴様ア！」

ディケイドに頭突きされた頭を抑えながら、カイザは剣みたいなものを銃に変え、ディケイドを狙い撃つ！

「おわつと！あぶねえ・・・そういやカイザ（あいつ）のあれ、銃にも変形できるんだったよな・・・ってかアレなんだっけ・・・？まあ・・・忘れちまつたし、大体そんなこと考えてる暇なんて無いしな・・・とりあえず！銃には銃だ！」

『アタックライドウ、ブラスト！』

ディケイドはライドブッカーから出したカードをディケイドライブーへとセツトし、ライドブッカーをガンモードに切り替えて反撃を開始した。

その頃町では・・・

「な・・・何だコレは・・・！？」

「おいしい・・・何か色々とやばいことになってませんかねえ！？」

「ひでえ・・・」

「誰がこんな事を・・・？」

とジェフ、プー、ルイージ、マリオの4人は町の惨劇を見て絶句していた。

4人の目の前には、ライフエナジーを吸われてしまった人間や粉々に砕かれたファンガイアの残骸などが辺り一面に散乱していたからである。

「・・・ミク？」

とルイージの脳裏にふとミクの顔が浮かぶ。

「とりあえず、皆。キャッスルドランに行こう！ミクが危ない！」

「ああ・・・分かった！でもどうやって・・・？」

というジェフの問いに、マリオが俺に任せるといい、指を口に噛ませる。

「来い！ヨッシー！」

ピイイイイイイイイイイ！

「でっっていう！」

とマリオが口笛を吹くと、ヨッシーが4人分現れた。

「これなら・・・、よし！キャッスルドランまで全速 全身 D A  
！」

そう言うことで、4人はヨッシーに乗ってキャッスルドランへと向かった。

その頃、キャッスルドラン、王の間。

此処の窓から見える風景を、ミクは寂しげな表情で眺めていた。

（ボクは・・・どうすればいいんだろう・・・？）

考えても出てこない答えに、ミクは押し潰されそうになっていた。  
その時…

「キャアアアアアアーッ！！！！」

「ウワアアアアアアアア！！！！」

廊下側から自分に仕えている者達の断末魔が聞こえ、ミクが驚き廊下側に振り向くと、扉から重厚な身体を持つカブト虫型のファンガイア、ビートルファンガイア（以下Bファンガイア）が現れた。

『漸くこの時がきた！貴様が持つキバの鎧を渡せ！』

Bファンガイアは威嚇するようにミクに近づいていく。

「クッ！キバット！」

「オッシャア！キバって、いくぜ！ガブッ！」

ミクは現れたキバットに自分の手を噛ませ、顔にステンドグラスのような模様が現れると同時に腰にキバットベルトが出現する。

「変身ッ！」

キバットをベルトの止まり木にセットすると、ミクはキバへと変身し、Bファンガイアと戦闘を開始した。それと同時にマリオ、ジェフ、プー、ルイーージも到着する。

「良かった、間に合った！ミク！」

「何だかしらねーが、助太刀するぜ！変身！」

とマリオがアークルを出現させ、クウガへと変身させる。

「マリオさん！僕も援護します！変身！」

とジェフもディアドライバーにカードをセットする。

『カメンライドウ、ディアド！』

ディアドに変身し、ライドブッカーを銃に変形させクウガとキバを援護する。だが、いくら打撃や銃撃を浴びせてもBファンガイアは倒れる気配は無かった。

そうこうしているうちに、騒ぎを聞きつけ、側近のファンガイアとガルル達が駆けつけた。

『姫！？そのカブトムシ！貴様、姫と知っての狼藉か？！』

『待て！あのお方は・・・』

ガルルはキバと戦っているBファンガイアを見てファンガイアを止める。

「くそっ！もうギャラリーが駆けつけやがったか・・・、ジェフ！ミク！デカイ奴をあのカブトムシ野郎に叩きつけるぞ！」

「ボクに命令するな！」

「何だこのガキ！」

「ま・・・まあまあ、それじゃ行くよ！」

とディアドは喧嘩をしている2人をなだめ、カードをディアドライバーにセットする。

『ファイナルアタックライドウ、ディディディアド！』

「ウエイクアアップ！」

「・・・うおりゃあああああああああ！」「」

とクウガはマイティキック、キバはダークネスムーンブレイク、ディアドはディメンションクラッシュヤーアタック（伸びたアゴを敵にぶつける技）をBファンガイアにぶつける。それをまともに喰らったBファンガイアは爆砕・・・しなかった。そのままBファンガイアはクウガの足をつかむとキバとディアドにぶつける。

「グハア！」

「ウワアアアッ！！！」

「キヤアアアッ！！！」

そのまま3人はガルルたちの近くへと転がる。

「グハアツ！はあ、はあ…が、ガルル、お前の力を貸せ！」

キバはガルルに力を貸すように命じる。だが…

『………』

「……ガルル？」

キバの命令にガルルは応えず、キバから目を背ける。

「狼野郎……あんた……ナズエミデイルンデイス……！」

「オンドウル、ルラギツタンデイスカー……！」

「何でこんなシリアスなときにオンドウル語オオオオオオオオオオオオオオオオオオ……？」

とクウガ、ディアードはガルルの突然のルラギリ（裏切り）行為に非難の声をあげ、その2人につっこむルイージ。Bファンガイアはそんな3人のやり取りは見向きもせず、キバに近づき自らの手をキバットの前にかざす。

『キバットバット三世よ！我に従え！』

「なっ？！ウ、ウオオオオオオオオオオッ……！」

Bファンガイアがエネルギーを放出すると、キバットは意識を封じられてしまい、キバットベルトから離れてしまう。キバットが離れてしまった為にキバの変身が解けてミクへと戻ってしまった。

「そ……そんな……」

キバの資格を奪われたミクは力なく崩れるように倒れてしまう。そしてBファンガイアは玉座へと座り、ガルル達もBファンガイアに近づき、忠誠の構えをとる。

『キバの鎧は受け継がれた』

『うむ、この方が、新たな王だ』

ガルル達はミクを見捨て、新たな王へと忠誠を誓う。だがその当の本人、Bファンガイアから発された言葉はこの場所にいる者全ての意表を突くものだった。

『俺は掟など廃する。人間との共存などめんどくさいから無意味。ファンガイアは人間を貪り尽くす』

『……っちょ……新しい王は本気か？掟を廃するとは？（ボソ

ボソ）』

『ホントだよね・・・、めんどくさいから人間と共存を断ち切るって、どうなるのか分かって言ってるのかな？あの新しい王・・・（ボソボソ）』

とボソボソと小声で話すドツガとバツシャー、

『何か言ったか？』

とBファンガイアがジト目でドツガとバツシャーに問う。

『何でもありません』』

と王になったBファンガイアには逆らえないため頭を下げる。

その時、

「そんなことはさせない・・・！」

とルイージがBファンガイアの前に立ちふさがる。

『し・・・新入り、バカ！何やってんだお前！王の御前だぞ！』

とバツシャーはルイージを止めに入ろうとするが、

「違う、こんな奴は王なんかじゃない！王はミクだ！」

とルイージはミクに言い聞かせるように叫ぶ。だが、キバットを失ったミクにとってはその言葉はとてつもなく重いものだった。

「馬鹿野郎！お前のかなう相手じゃねえ！逃げるルイージ！」

とクウガは叫ぶ。ルイージはクウガに大丈夫だよ・・・と笑いかけ続ける。

「僕もすぐに追いつくから、ヨッシー！4人を頼む」

「でっていう！！！！（まかせて！！！！）」

とヨッシーはクウガ、ディアード、プー、ミクを乗せキャツスルドランを脱出した。

その頃スタジアムでは、カイザとディケイドの戦いは続いていた。

「そのベルトをよこせえ！」

「うざってえな、てめえにやるベルトなんか無えって言うてんだろうが！」

ガギーン！

とつばぜり合いの形になる2人のライダー。お互いの力は互角、このままじゃ終わりそうに無い。

(なら一か八か・・・)

そう思い、いったん離れ、カードを引く。そのカードを引いたディケイドの顔は『勝った・・・』と言いたそうな顔だった。

「これで終わりだぜ！」

そっついそのカードをディケイドライバーにセットする。

『ファイナルアタックライドウ、ディディディディケイド！イリュージョンブレイク！』

バックルの電子音と共に、ディケイドが100人を超すほどに分身する。

「なんだと!？」

「さあ〜て・・・楽しいフルボッコタイムと行きますか」

とディケイド×100が指の関節を鳴らしながらカイザへと迫り・

・

バキ！ドコ！ドガ！グシャ！メメタア！ドグチャ！ボキヤ！メシヤ！グチャ！

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

カイザをフルボッコにした。

それを見たポーラは後に

「凄く興奮したわ・・・」

といったという。

さて、そんなことはさておき、カイザをフルボッコにし、変身をといたネスはカイザに尋問しようとバットを取り出すが・・・再び歪みがカイザの前に現れ、カイザはその中に逃げるように入った。

「あつ！てめえ！」

とネスが追いかけようとするが、ネス達の周りにも歪みが発生し、元の川原の場所に戻ってしまう。

「何だっただんたろうな・・・アイツ」

「さあね・・・何でキックとパンチホッパーといい別世界のライダー

「が現れたんだろう・・・ねー、キバーラ。何か知らない？」  
とポーラはキバーラに問う。

「あれは邪魔者が雇った殺し屋のライダーよ」

「邪魔者？殺し屋？」

とネスがキバーラの答えに疑問符を浮かべたその時だった。

『ディケイド！仮面ライダー達と戦う悪魔よ！』

「なっ！？」

「えっ！？」

と突然誰もいないのに声が響いてきた。

『このキバの世界は調和がとれていた。お前が来る前までは！』

「この声って何処から聞こえるんだろ・・・」

「どこにいやがる！？隠れてねえで出てきやがれ！」

とネスとポーラはあたりを見渡すが、出てくる気配は全く無い。

「てめえか！？富竹とか言う俺を散々悪魔だの言いふらすホラ吹き

野郎は！？何で俺を悪魔だのと呼びやがる！？」

『ホラじゃなくて本当のことだ！お前のせいでこのキバの世界は乱

れてしまった！』

「乱れたって・・・どういう意味？」

とポーラは声の主もとい富竹に問いかける。

『新たなキバが誕生した…破壊を求めるキバがな！』

「破壊を求めるキバ？なんだそりゃ・・・？」

とネスは問いかけるが、声はぱったりとしなかった。

「言いたいことだけ言っただけ逃げやがった」

「うん・・・でもどうする？もし富竹とかいう人の言っどおりだと

黙ってるわけには行かないよ」

「だよな・・・いったん俺の家に戻ろう。行動はそれからだ」

そう言っどネスとポーラはこれからすべきことの為にネスの家に戻っていった。

その数十分後の港区・・・

「でっていう！（ここまでくればもう大丈夫だよ）」

とヨッシー達は倉庫の一角にジェフ、プー、マリオ、ミクを降ろした。

ジェフたちはキャッスルドランに入る前に皆で何かあったらこの倉庫を集合場所に使っていた。

「大丈夫だ。ルイージはちよつとやさつとでやられる玉ではない」とミクの頭を撫でる。マリオも、そうだ！と言う。

「そうさ、すぐ帰ってくるって・・・それにしてもアイツ・・・一人でしんがりやるなんて・・・俺に任せとけば良かったんだよ！クソッ！ルイージの癖に生意気だぜ・・・」

と悔しそうに地面を拳に叩きつける。

すると、誰かの足音が聞こえる。そこにいたのはルイージだった。  
「る、ルイージさん！大丈夫ですか！？」

とジェフが駆け寄る。ルイージの服は血が滲んでボロボロになっており、顔や腕等も傷や痣等が多く目立っていた。ルイージもミクたちの元に駆け寄ろうとするが途中で力なく倒れてしまう。

「しっかりするんだ！ルイージさん！」

とジェフはルイージを抱きかかえ、彼の名を呼んだ。何回か呼ぶと、彼は意識を取り戻し、目を開け起き上がる。

「ジェフ・・・君。ミクは？」

「大丈夫だ！ミクちゃんならここにいる」

マリオがそう言うと、ルイージはミクの顔を見て、取り敢えず一先ず安心し、悲鳴をあげている身体を無理しながらも起こしていった。

「良かったあ・・・痛てて・・・ミク、ネスさん達のところに行つて事情を話そう。そしてキャッスルドランに戻ってキバットを取り戻そう」

ルイージはミクの手を掴んでネスの家に向かって行こうとする。だがミクはルイージの手を払い、背を向けてしまった。

「み、ミク・・・？」

「...今さら戻れない。ボクはもう...王の資格なんて無いんだ...」

キバットを奪われ、王の資格も奪われ、側近達からも見捨てられたミクは無気力になってしまい、ただフラフラと何処かへと行こうとしていた。

「おいガキ！てめえはそれでいいのか！？あのカブトムシ野郎は掟を廃して人間を滅ぼそうとしてんだぜ！？」

「そうだ！あいつをこのまま野放しにすれば、この世界は崩壊してしまっただぞ！」

マリオとジェフはミクを必死に説得するが、ミクは耳を塞ぎしやがみ込んでしまう。

「うるさい！もうあの場所には帰りたくない！ボクには戻る資格なんて無いんだよ！」

「ミクちゃん……」

「ガキ……」

ミクは涙ぐんだ表情のまま立ち上がり、近くに待機していたヨツシーに向かっていく。

「ボクの行きたい所に連れてってくれるんだろ？だったら何処でもいいからボクを連れてってくれ！」

「ミク……」

ルイージは傷ついた身体を起こし、ミクの元に寄っていく。

「……いいよ。君が望むなら、何処へでも連れていく。何処に行きたい？」

「……分からない」

行き先を決めてなかったミクはまたうつ向いてしまう。

「おい、分からないってどういう意味ですか！？お前は行きたい所は分かっているのは確定的明らか、いい加減自分の気持ちに素直になれ！」

とプーはミクに言い聞かせるが、

「そんなの……分からない……分からないよ！」

ミクはどうしたらいいか分からず錯乱状態になってしまい、ミクが大声で叫ぶと、その顔にファンガイア特有の模様が浮かび上がって

いく。

「み、ミク…？」

ルイージは様子がおかしくなったミクに近づこうとする。だが…  
ヒュッ！グサアッ！

「ぐああッ！？ア、アア…！」

「ルイージ！？」

「ルイージさん！？」

ルイージの首元に突然半透明の牙のような物が刺さり、ルイージの  
ライフエナジーを吸い取ろうとしていた。

「ア、ガアア…！ウワアアアアアアッ…！」

「…ハッ！る、ルイージ…！」

ルイージの叫び声を聞き、ミクは正気を取り戻しルイージの首元に  
刺さった牙を消し去った。顔の模様も引き、ミクと三人はルイージ  
へと近づいていく。

「おいしい！大丈夫か？！」

「ルイージさん！しっかりしてください！」

「ルイージ、しっかりしろ！ルイージ！」

「る…ルイージ…ボクは」

ライフエナジーを少し吸われたルイージを見てミクは今にも泣きそ  
うな顔になっていた。だがルイージは弱った身体を起こし、待機し  
ていたヨッシーへと近づいていった。

「ぼ、僕なら大丈夫…ミクは気にしないで、いいんだよ…」

「ルイージ…」

暗い表情で弱ったルイージを見つめるミク。そしてルイージはヨッ  
シーに股がった。

「…僕はキバットを取り戻しに行く…皆はミクと一緒に…ネスさん  
の元へ向かってくれ…」

そう言うルイージはキバットを取り戻すべくキャッスルドランへ  
と向かった。

「行ってしまったな…っておいしい！何、二人ともついて行こう

としてるんですか!？」

プーが早速ヨッシーにまたがりついていこうとしているジェフとマリオに向かって叫ぶ。

「ああ!？ルイージばかりいい格好させてたまっかよ」

「そうですよ、ルイージさんを見殺しにするわけにはいきませんよ！行きますよ！マリオさん！」

とマリオ、ジェフもまたルイージの後を追っていつてしまった。

それをプー、ミクは黙って見てるしかなかった・・・。

それから一時間後・・・

「成る程な・・・、富竹って奴が言っていた破壊を求めるキバってそいつのことだったのか・・・」

プー、ミクはネスの協力を求めるべく、ネスの家に行っていた。ちなみにもう昼時になっていたので、ネスとポーラはハンバーグを食べながら話を聞いていた。

「・・・やっぱり、人間とファンガイアが共存するなんて無理だったんだ...この醜いミクがその証拠だ...」

「醜い『ボク』？それって、どういう意味なの？」

「・・・」

ポーラが聞くにも、ミクは何も答えずただ黙ってうつ向いているだけだった。

「まあ、ルイージはともかくマリオとジェフならなんとかなるだろう？取り敢えず今は飯だ。どうせだからお前も食ってけ」

そう言っただけでネスはテーブルに昼食のハンバーグを人数分並べる。だが...

「...いらぬ。ボクはもう、何も食べない」

ミクは首を横に振って拒否する。

「...そうやって何も食べずにお腹が減ったら、ルイージの時みたい誰かのライフエナジーを吸うのかよ？」

「ッ！違う！ボクはもう誰とも一緒にいない！ボクはこれからずっ

と一人でいるんだ！」

ミクは張り裂けそうなくらい大きな声をあげて叫ぶ。だがすぐにまた暗い表情になり、その顔を隠すように両手で顔を覆う。

「…ボクは、自分が好きだと感じた人のライフエナジーがどうしても堪らなく欲しくなってしまう。だからボクは、もう誰も好きにはならない…なっちゃいけないんだ…」

そう言うと、ミクはもうすっかり落ち込むところまで落ち込んでしまっていた。その時

バンッ！

とプーが拳でテーブルを殴りつける。

「おいしい・・・さつきから黙って聞いていりやウジウジウジしやがって！」

とプーはいつにない怒気を含めた表情で続ける。

「お前、ルイージの事が好きなのだろう！お前が本当にルイージの事が好きなら、ルイージの想いに応えてやれる程の意地を見せてみる！」

「ルイージの…想い…」

プーに怒鳴られ、ミクは最初は驚くがその言葉に籠められた熱い気持ちにミクの眠っていた心を揺るがしていく。そしてネスも立ち上がり、ミクの頭を強めに撫でる。

「お前がもしまた誰かを襲うなんて事になったら、俺がお前を倒す勢いで止めてやる。俺は…破壊者だからな」

「ネス…さん」

ネスはミクの頭から手を離すとバイオリンケースを持って家を出て行った。

その頃、キャッスルドランがあるビルの下の駐車場。

ルイージはガール達と戦っていたが（実質的にはガールが戦っているだけで、2体は見てるだけ）、先ほどの深刻なダメージもありガールのなすがままだった。

「はあはあ・・・グアアッ！」

『馬鹿な奴だ、生身で我々に勝てると思ったか？』  
と胸倉をつかみ上げ止めを刺そうとするが、

「ヤアッフウウウウウウウ！」

『な・・・グアッ！』

と突然現れたクウガにガルルは蹴り飛ばされる。

「に、兄さん・・・どうしてここへオラア！」グバア！」

とルイーヂを殴り飛ばした。

『『オイイイイイイ！！何やってんだ、あのクワガタライダー！？仲間割れか！？』』

と見ていたバツシャーとドツガを含め、ガルルはクウガの行動に理解不能だった。

「仲間割れ？いいや、違うな・・・俺が弟を殴ったのは弟にこの姿を見せないためだ・・・」

『奥の手だと・・・？ッ！貴様、その姿は！？』

とガルルはいぶかしげに問い、驚愕の顔へと変わる。それもそのはず、赤いアーマーだったクウガの体が黒のアーマーへと変わっていた。そうこれこそクウガの黒き雷のフォーム、アメイジングマイティフォームなのだ！

『何だ・・・その姿は・・・き、貴様はっ・・・貴様は何なんだ！？』

「てめえに喋る口なんざ持つてねえよ。さて・・・処刑の時間だ」  
とガルルににじり寄るアメイジングクウガ。

『ひ、ヒイヒイヒイヒイ！』

恐怖に駆られ、ガルルは拳を繰り出そうとするが、その腕をつかまれてしまう。慌てて腕のホールドを崩そうとするが抜けない。

「悲鳴を上げる。豚のような」

とAMクウガはにたりと笑うとガルルの腕をへし折った。

『ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』

とガルルの悲鳴が駐車場に轟いた。

『やっべーよ、ドツガ。あのクワガタみたいなライダー強いじゃん・  
』

『そうだな．．．ここは．．．逃げたほうがいいな』おい、何処へ行く．．．へ？』

とドツガとバツシャーはAMクウガの強さに恐れをなし、逃げようとするが、そこにディードが現れる。

『ちょ……ちよつと待ってよ、僕らはあの緑色の新入りには何もしていないよ?』

と弁解するバツシャーだが、ディアードはそんな関係ないとはかりカードをディアードライバーにセットした。

『ニコニコライドウ、海馬!』

ベルトの電子音が鳴り響き、ディアードの姿は『遊戯王』に出てくる海馬瀬人に姿を変える。

「確かに、君達はルイージさんを傷つけてはいないだろうが……君はルイージさんの大切な人を裏切った……その代償は高くつくぞ」

D 海馬はそう言うつ、もう一枚のカードをセットする。

「ファイナルアタックライドウ、カカカ海馬！」

ベルトの電子音と共に、白銀色の龍が現れる。そうこれこそ、海馬の切り札であるブルーアイズ・ホワイトドラゴンだ！

「受けてみる！滅びのバーストストリーム！」

「ちよつと待つて！話せば分かる話せばわくアッー！」

とバツシャードツガの断末魔が響いた。

腕を折られ戦意を喪失しているガルルに向かってAMクウガは指の関節をパキパキ鳴らしながらガルルに問う。

「さあどうした？まだ腕が一本折れたただけだぞ？あの妙な剣を出せ！腕の骨を再構築させろ！夜はこれからだ！戦い（楽しみ）はこれからだ！ハリー（早く）！ハリー（早く）ハリー（早く）！！ハリー

「（早く）ハリー（早く）ハリー（早く）！！！」

まだ遊びは始まったばかり、「起き上がって闘え」、と実際アームズモンスターにとって腕の骨の再構築などは造作もないことだが、その狂気を湛えた物言いにガルルの背筋が凍った。

”コイツは自分とは違う生き物だ”と

「ばっ・・・化物めッ！」

思わず情けない金切り声で叫ぶガルル、人間を超越した身体能力という意味では自分も化物に違いないだろうが目の前の男は”在り方”自体が異質に思えた。この世ならざるモノ・・・まさに「化物」である。そんなガルルの反応に、見てとりやすく落胆するAMクウガ。目からみるみる興味の色が落ちてゆき、最後は汚物を見るように地面に転がる男に吐き捨てた

「そうか。キサマもそうなのか？出来損ないのくだらない生き物め、お前はまるで犬の糞のような男だ。糞になってしまえ」

と拳を振り上げ、ガルルに止めを刺そうとした、その時！

『まだやっていたのか？』

とBファンガイアが姿を現した。

続く・・・

第7話「キバ編その3 ルラギッタ、アームズモンスターズ!? ディアード、

はつきり言って後悔しまくってます……。何故早い時期にクウガを黒くしたし俺!?

そんなことはさておき次回キバ編堂々の完結です。お楽しみに。1月12日 いきなりアルティメットだと物語が詰まってしまうのでアメイジングマイティに変更しました。

## 第8話「キバ編その4 ミクの想い、王の証」(前書き)

最近、ものっそい寒いです・・・、あと前話で、クウガがアルティメットになったシーンがありました。後々の話で支障をきたしてしまう恐れがあるのでアメイジングマイティに変更しました。勝手に変更して本当に申し訳ありません・・・。

それではキバ編最終章・・・始まります。

## 第8話「キバ編その4 ミクの想い、王の証」

前回までのあらすじ・・・ビートルファンガイアに奪われた『キバの鎧』ことキバットを取り戻すため、ガルルらアームズモンスターと戦うルイーザだが、Bファンガイアにフルボッコされておりボロボロのため返り討ちにあう。だが、追いかけてきたマリオクウガとジェフディアードが助っ人に入り戦いは形勢逆転。このまま3匹まとめてフルボッコと思いきやBファンガイアが現れたのであった。

『何をしている?』

突如、ガルルの背後にBファンガイアが現れた。

『!お・・・王』

ガルルは思わず跪いてしまう。

『ガルルよ・・・もう掟などないのだ。さっさとそいつらを殺せ』とAMクウガと氣を失っているルイーザを指さすBファンガイア。

『ですが、王よ。本気で掟を廃するおつもりですか!?いくらめんどくさいとは言え人間とファンガイアの共存を断ち切ってしまうば世界は再び混沌に堕ちてしまうのですぞ!?』

と掟を廃しようとするBファンガイアに反論するガルル。

『うるさい!お前の知ったことではない!めんどくさいもんはめんどくさいんじゃない!』

と理不尽な言い訳を言いながらBファンガイアはガルルの頭をつかみ、エネルギーを流し込む。

『うおっ!王よ!何をs・・・ぬわー!』

するとどうだろう、ガルルは某DQ5の主人公の父親のような断末魔を上げBファンガイアに取り込まれた。そしてBファンガイアの胸部には青いステンドグラスのような模様が浮かび上がる。

「取り込みやがったと・・・?」

とAMクウガは彼の残忍な手口を見てゾッとする。と、そこへ・・・  
『わあああああああああああああああ！』

とD海馬のファイナルアタックライドを食らい、叩きつけられるバツシャーとドツガがいた。

『いつててててて・・・酷い目にあつた・・・』

と頭をさすりながら起き上るバツシャー。ドツガも遅れて頭を振りながら起きる。Bファンガイアは2体に気づく。

『バツシャーとドツガか・・・ちようどいい。お前らも俺の一部となれ！』

『へ？』

とBファンガイアの言葉に疑問符を浮かべるバツシャーとドツガ。

そして2体は妙に青くなっているBファンガイアの胸部を見て悟る。Bファンガイアは何をやらかしたのかを。そしてガルルの身に何が起こつたのかを。

『バツシャー』

とドツガはバツシャーに目配せをし、バツシャーもうなずく。

『ああ、ここは・・・』

2体は後ろを振り向き・・・

『逃げるんだよオ！』

そのまま猛ダッシュで走り出した。が・・・

『逃がすかア！』

ドウ！ドウ！

とBファンガイアはエネルギー弾を2体に向けて発射する。そしてそのまま2体に直撃する。

『ウボアー！』

『ギヤーム！』

と某最終幻想の2と4のラスボスのごとき断末魔を上げながらBファンガイアに吸収されてしまうバツシャーとドツガだった。そして、右肩にドツガのような紫色のステンドグラスの模様が、左肩にバツシャーのような緑色の模様が浮かび上がった。

「なっ・・・バツシャー達に取り込まれた・・・!？」

とD海馬の変身を解き、駆け付けたディードは突然の光景に狼狽しながらもAMクウガに駆け寄る。

BファンガイアはAMクウガとディードに目を向ける。ディードはともかくクウガはアメイジングマイティになれる時間は限界に近かった。だがそんなことはお構いなしに迎撃に備え身構る。だが・

・  
「・・・」

Bファンガイアは回れ右をするとそのまま何処かへと去って行った。突然の展開にAMクウガはディードは茫然としている。

「何で僕らと戦わなかったんだ？」

「さあな、そんな事より後を追おうぜ！」

とそんなわけでAMクウガとディードはBファンガイアの後を追った。

それから一時間後・・・キャッスルドラン内

玉座の間にいたのはBファンガイアではなくミクの家にはいた青年だった。青年はキャッスルドランの窓から地上の街を眺めていた。

「・・・ミク」

男はミクの名を呟きながら寂しげな表情になる。そんな時…

♪♪♪

「ん・・・この演奏は・・・」

青年は廊下側からいきなり聞こえてきた演奏に反応する。その演奏は次第に大きくなっていく。

「・・・あの少年が来たみたいだな」

青年は演奏に惹かれるように玉座の間から出ていった。

一方、演奏していた本人もといネスは部屋の大扉に向かう。そして演奏を止めると、側近のファンガイアが剣を構えながら立ちふさがっていた。

『人間め・・・もう容赦はせんぞ！覚悟！』

ファンガイアは敵意剥き出しにしながらネスへと近づいていく。ネスはバイオリンを置き、

ぼくしゃー！！！！

「邪魔」

ファンガイアを素手で殴った。殴られたファンガイアはまるで子供に指で弾かれたテントウムシの如く直線の通路を猛スピードで吹っ飛ばされた。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

バゴオン！！！！ずしゃー

そのまま大扉に激突。それでも勢いは止まらず部屋の中にゴロゴロと転がり込む。ようやく止まって何か言いかけたようだったが、硝子割れるように消滅した。

そのまま部屋に入りあたりを見回す。

「ここじゃないな・・・何処なんだ？玉座の間って」

どうやら道に迷ったようだ。改めて他を当たろうとすると、またファンガイアに出くわす。このファンガイアこそ現在の王、Bファンガイアであった。

「おっ？お前が新しい王か？わざわざそっちから出向いてくるなんてな。探しだしてぶっ飛ばす手間が省けたぜ」

『俺は王など興味は無い』

「？・・・まあいいや・・・興味あるうと無かるうとお前を殴ることには変わらないからな・・・」

Bファンガイアの「王なんか興味無し」発言に眉をしかめながらもネスはライドブッカーからカードを取り出し腰に装着してあるディケイドライバーに入れる。

「変身！」

『カメンライドウ、ディケイド！』

ベルトの電子音と共にネスはディケイドに変身する。そして指の関節をパキパキならす。

「さあーで、行くぜ！王様よお！」

そう言うともう一枚カードを取り出し装填する。

『アタックライドウ、スマッシュ！』

電子音と共にディケイドはバットを取り出し

「オオラアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

S M A A A A A A A A A A A A A A A A A A S H ！！！！

『グオアッ！』

とフルスイングでBファンガイアをかつ飛ばした。キャッスルドラ  
ンの天井をブチ破り、下の駐車場へと落ちる。ディケイドも後を追  
い、駐車場へと降りる。

「あそこじゃ狭いからな、さて続き始めようぜ？」

『グッ、人間が調子に乗るな』

とBファンガイアがそう言うのと腰にキバットベルトが現れ、何処か  
らか意識のないキバットを取り出した。

『変身ッ！』

ビートルファンガイアがキバットを止まり木にセットするとキバへ  
と変身した。だがミクが変身した時とは違い、右腕はバッシュャー、  
左腕はガルル、そして胸部はドツガのフォームアーマーになっ  
ていた。

「な・・・！？」

その異様な姿にディケイドは唖然とする。BFキバはドツガハンマ  
ーを取り出すと笑ったような口調で言った。

『さあ、第二ラウンドを始めようか』

そしてBFキバはディケイドに向かってドツガハンマーを振り下ろ  
す。ディケイドはライドブッカーソードモードで防ぐ。

ガギイン！ガッ！ドゴオ！

「うおっ！やべッ！強いぞこいつ！」

BFキバは攻撃速度が速い上に衝撃も重く、ディケイドは防戦を強  
いられていた。

「ハア、ハア、ハア…ネスさん！」

「なッ！？ミク？！お前なんでここに！？」

なんとミクがネスを追いかけやって来たのだった。その後ろにはプーとポーラも一緒にいた。

「ハゲ、ポーラ。お前等、どうして此処に？！」

「こいつがどうしても此処に来たいって言ってたから、トンズラで連れてきたのだ！」

「ミクちゃんはどうしても、ルイーヂさんを助けたくて来たの」

プーとポーラはミクを連れて来た理由を話す。ミクも先程までとは違い、その表情には曇りがなかった。

『何を余所見をしている！』

「ッ？！やべっ！グアア！！」

ドゴオオッ！

ディケイドが余所見をしている隙にB F キバはドツガハンマーでディケイドを殴りつけた。

「ネス！！！！」

「ネスさん！！！！」

吹っ飛ばされたディケイドを見て、三人は助ける為に近づこうとする。その時、

「ちよつと待った！！！！」

突然聞こえてきた声に三人は驚き、声が聞こえた方向を向くと其処にはボロボロになったルイーヂを背負ったクウガ（もうアメイジングマイティではない）とディアードが現れる。クウガはルイーヂをプーの元を持って行き、治療するように促す。

「マリオさん、ジェフ。どうしてここに？」

「ああ、ルイーヂの助太刀にな・・・んなことより今の状態じゃあネスはアイツに勝てねえ」

「勝てないとは何故だ？カカツと教えるべきそうすべき」

とルイーヂを治療しながらクウガに説明を問うプー。今度はクウガに変わりディアードが説明する。

「それは僕が説明しよう、あいつはミクちゃんの側近のアームズモ

ンスターを取り込んでしまった。それにあればドガバキフォームと言ってかなり強いんだ。キバットを何とかしない限り倒すのは至難の業だな」

ディアードの口から出てきた衝撃の事実にはプーとポーラは愕然とする。そしてディケイドを吹っ飛ばしたBFキバはミクの元へと近づいて来た。

『貴様に最後のチャンスをくれてやる。其処にいる奴等のライフエナジーを吸い尽くせ』

『ッ！！？』

BFキバによる命令に、その場にいた者が驚愕の表情へと変わっていく。

『さあ、早くしろ！人間との共存などめんどくさいことを捨て、貴様もファンガイアとして生きるのだ！』

「・・・」

BFキバに命じられ、ミクはいつの間にも目を覚ましていたルイージの前へと立ち上がる。

「ミク・・・」

ルイージは既に覚悟を決めて目を瞑った。だが、いつまで経っても牙は刺さって来ず、ルイージが目を開けるとミクはBFキバの目の前に立っていた。

『？・・・貴様・・・なんのつもりだ？』

「・・・この人を・・・ルイージを解放してあげて」

『ッ！？貴様！』

予想外のミクの反応に対し、BFキバはミクを殴り飛ばした。

「うああッ！」

「ミク！」

「おい！まだ治療中だぞ！動くな・・・行ってしまった」

ルイージはプーに治療されているにも係わらず、ミクの元へ駆け寄る。

「ミク！なんで・・・?!」

「・・・ボクはまだ、ルイーダに行きたい所を言っていない・・・や  
つとわかったんだ。ボクが本当に行きたい所・・・ねえルイーダ・  
・こんなボクでも、ううん・・・こんな私でも貴方はまだ友達でい  
てくれますか？」

ミクは自分の正直な気持ちをルイーダに伝える。ルイーダは一瞬唖  
然としたが、すぐに微笑みながらミクの手を握り締めた。

「当たり前だよ・・・僕もポーラさんもネスさんもプーも兄さんも  
…皆君の友達さ」

ルイーダの言葉に、ミクの心に掛かった鎖が解き放たれたかのように  
軽くなっていき、ミクの表情は明るい笑顔になっていた。

「やっと素直になれたみたいだね」

「全くだ。これであの娘も大丈夫なのは、確定的明らか」

「だな」

とポーラもプー、クウガもミクを見て安心する。ただ一人を除いて  
「うおおおおおおおおおおおお！ミクたんがボクっ娘じ  
やなくなってるうううううううううううううううううううう！」

ディアードだった。

「黙れ変態」

「サーセンwww」

ポーラの一喝でディアードはおとなしくなる。

『ありえん！？人間とファンガイアとの友情だと?!』

B F キバはミクとルイーダの友情を信じられないようなものを見た  
ように驚いていた。そして吹っ飛ばされたディケイドも漸く立ち上  
がりB F キバへと近づいていった。

「そいつは信じているんだ。人間とファンガイアが、本当の意味で  
共に歩んで行ける事を」

『なんだと？馬鹿馬鹿しい、人間とファンガイアは共存など出来は  
しない!』

「確かにお前にとってはそうかもしれねえな。だけどよ・・・あい  
つは・・・ミクは、信じる者の為に戦える。あいつが…本当の王だ

！」

ディケイドはそう言ってミクを見る。そしてミクは決意を固め、ゆつくりと立ち上がっていく。

「私は…私は、王に…になりたい！」

ミクは自分が望むものを宣言するかのように答え、そのミクの強い想いにBFキバは気迫されていた。

『グツ！貴様等・・・！』

BFキバは殺意を剥き出しにしてミク達に襲いかかるうとする。だがその前にディケイドが立ち塞がる。

「ちよつと目を閉じてな！このアホコウモリの目を覚ます！PK・・フラアツシュー！！！」

ビカアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

「オイ！ネス、お前のPKフラツシュが俺の頭に反射してさらに眩くなっているんだが！？」

ディケイドの手からまばゆい光が放たれたと同時にその光にプーのはげ頭が反射しさらにまばゆい閃光となる。

『うおおああああああああつ！！！！』

PKフラツシュ+プーのはげ頭による光の反射によって目をやられたBFキバはショックでBFアンガイアへと戻っていく。そしてそれを直視して目を覚ましたキバットはフラフラしながら地面に落ちていった。

「う、うゝん。はげ頭の光で目がチカチカするぜえ…」

「キバット！」

「…ハッ！ミク！」

ミクがキバットを呼ぶと、キバットは漸く元に戻り、ミクの元へと飛んでいく。

「ミクー！意識を閉じ込められたとはいえあんな変なカブトムシのような奴に使われてしまつてすまなかつた！許してくれ！」

「いいよ、キバットが無事なら。じゃあ、いくよキバット！」

「おう！キバつて、いくぜ！ガブツ！」

キバットはミクの手を噛みつき、ミクの腰にキバットベルトが出現する。

「変身ッ！」

止まり木にキバットをセットし、ミクはキバへと変身する。

「さてとプーは引き続きルイージの治療を頼む。んじゃあ、行くぜ！マリオ！ジェフ！ミク！」

「おうよ！」

「わかった！」

「はい！」

ディケイド、ディアード、クウガ、キバはそれぞれBファンガイアに攻撃を開始する。ディアードはライドブッカードをガンモードにしてでの遠距離攻撃、キバ、クウガは格闘による接近戦、ディケイドはライドブッカードをソードモードにしてでの斬撃を放つ。

『ああゝ目がゝ、目がゝってウゲオ！』

バルスを喰らったム。カのような状態になっていたBファンガイアはそれをまともに喰らってしまう。

「お前はミクが真の王になれるかどうかを試したんだろう？掟を『めんどくさい』との口実で廃すれば、ミクは必ず本当の気持ちに気づく筈だと！自分が果たせなかった王として必要なものを知るだろうと！」

『貴様は・・・一体何者だ！？』

「俺か？俺は通りすがりの仮面ライダーだ、憶えとけ！」

「僕も通りすがりの仮面ライダー」こいつは覚えなくていい「あ・・・あんまりだ・・・」

とディケイドに引き続き名乗り出ようとしたディアードだったが、ディケイドに「覚えなくていい」発言され落ち込む。

「イイヤツフウウウウウウウウウウウウウウウウウー！！！」と余所見中のBファンガイアにクウガは渾身のパンチをお見舞いし、Bファンガイアは吹っ飛ぶ。

『ぐおおっ！クソッ、こうなったら奥の手だ！』

Bファンガイアはそう言って高く飛び上がり、キャッスルドランの頭の上に飛び降りた。

『ドラゴンよ！我に力を貸せ！』

Bファンガイアが叫ぶとキャッスルドランが目覚め、咆哮しながらビルの中から抜け出そうとする。

「キャッスルドランを奪う気か。さて、どうすんだミク？」

「もちろん止めてみせます！私は王ですから！」

キバが強い気持ちで答えた瞬間、ライドブッカーから三枚のカードが飛び出す。そのカードは絵柄が消えたキバを含むファイナルライドのカードが絵柄を取り戻したものだった。

「そういう事なら、俺も手伝ってやるぜ。ちよつとくすぐつたいぞ」  
「え…？」

ディケイドは三枚の内一枚を選び、ディケイドライバーへとセットする。

『ファイナルフォームライドウ、キキキヴア！』

電子音声が響く（何となくキバがキヴアになっているが気にしてはいけない）と同時にディケイドはキバの背中を扉を開けるように開く。するとキバの背中にキバットの顔のようなものが現れ、キバは巨大な弓矢、キバアローへと変化していった。

「キャア！何ですかこれ！？」

「これが、俺達の力だ！いくぜ！」

ディケイドは更にもう一枚のカードをディケイドライバーにセットする。

『ファイナルアタックライドウ、キキキヴア！』

電子音声が響き、ディケイドはキャッスルドランの上にいるBファンガイアに向かってキバアローを構える。

『なんだあの姿は？！』

Bファンガイアは下の様子に気づき、ディケイドが持っているキバアローを見て驚く。そしてキバアローの矢の先端にエネルギーがどんどん溜まっていく。



デイメンションキック、デイメンションクラッシュアタック、ダークネスムーンブレイク、ライジングマイティキックをBファンガイアにブチかました！

「又グアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

4人ライダーの必殺技をまともに喰らったBファンガイアは爆発を起こし姿を消していった。

そして・・・

「『ああああああああああああああああああ！！！！』」

」

叫び声と共に3体の怪物が落ちてくる。そう、Bファンガイアの爆発と共に取り込まれていたアームズモンスター達が解放されたのだ。

「ウマコッ！」

「イモコッ！」

「ザヨコッ！」

と意味不明な悲鳴をあげ、ガルル、バツシャー、ドツガの順に落ちてきた。

「あいつらも戻ってきたし・・・一件落着だな」

それを見て、デイケイドは苦笑交じりで言う。

「ええ・・・そうですね」

とキバも苦笑交じりに返した。

それから数十分後、ミクの家には何故か先程倒したBファンガイアが瀕死状態で訪れていた。そしてBファンガイアの身体が人間体になり、その姿は以前ミクの家を訪れていた青年だった。

そして人間体になると同時にネスとポーラがミクの家を訪れていた。

「やっぱりアンタだったのか、あのファンガイアは」

「はあ・・・はあ・・・妹は・・・ミクは良い王になれるのだろうか？」

と虫の息で青年はネスに問う。

「なれるさ・・・なんたってアンタの妹だからな。あんたは自分の

犯したミスはミクにしてほしくなかった。だからあんな真似をしたんだろ？」

「・・・ああ・・・妹には今でも・・・すまないと思っている・・・ネスとそこの君は・・・ポーラと言ったね・・・一つ・・・頼みがあるんだ・・・死ぬ前に・・・もう一度君達のコンチェルトを聴きたい・・・始めて会った時、聞きほれてしまつてね・・・僕の・・・最後の頼みだ」

ネスは青年の頼みを無言でうなずくとポーラとアイコンタクトをしケースからバイオリンを取り出し演奏を開始した。

~~~~~

屋敷内に広がっていくメロディを聞き、青年はその演奏に身を委ねるように目を瞑る。

「ありがとう・・・」

男はそう言うつと硝子のように散っていく。それを見てネスとポーラは演奏を止めた。ふと・・・

カツカツカツカツ・・・

足音がし、振り向くとこの家の主であるミクが居た。

「懐かしいな・・・私この家で生まれたんですよ」

と懐かしげに言う。そしてテーブルにあるバイオリンを手に取り決意を新たに言う。

「私・・・もう一度頑張ってみようと思います。今度こそ人間とファンガイアが共存できる世界を作ってみます」

「そうか・・・大丈夫さ。お前なら良い王様になれるぜ」

とミクの頭を撫で笑顔で言う。それを聞き、ミクも笑顔になった。

そして・・・数十分後、ネスの家

ルイージ、キバーラが仲間に加わって一行は再び次の世界へと向かう。次の世界はどんな所なのか・・・待て！次回！

NEXT STAGE RYUKI・・・

第8話「キバ編その4 ミクの想い、王の証」(後書き)

いかがだったでしょうか。次回は龍騎編の前にネス達のキャラクタープロフィールを書きたいと思っています。
それでは。(owo)ノシ

閑話休題 ネスファミリイ紹介& a m p・仮面ライダー紹介（序章編からキバ編

今回はネスファミリイの紹介と、仮面ライダーの紹介をしたいと思います。

あと最後にデネブキャンディーさんのコラボ企画の予告編も出しています。

それではどうぞ。

閑話休題 ネスファミリイ紹介& a m p ; 仮面ライダー紹介（序章編からキバ編

ネス「第一回・・・」

ポーラ「ディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ座談会」

ジェフ、プー、マリオ、ルイージ「わゝ（パチパチパチ）」

ネス「さて・・・今回は俺達・・・ネスファミリイと・・・」

ポーラ「序章からキバ編に出てきたライダーの紹介をするよ」

ネスファミリイ紹介

キャラクターファイル01、ネス

ご存じこの小説の主人公であり、かつて地球征服をたくらむ悪の宇宙人『ギグ』を倒した『イーグルランド四英雄』の一人。ひよんなことから謎のイケメン青年に導かれ、世界の破壊者『仮面ライダーディケイド』として世界を回る羽目となる。性格は大雑把で粗暴だが、根は優しい。恋人であるポーラや妹のトレーシーには甘い。趣味はカメラで風景などを撮ること。

キャラクターファイル02、ポーラ

この小説のヒロイン。ネスと同じく『イーグルランド四英雄』の一人であり、現在ネスと交際中（もちろん初体験は済ませている）。ディケイドが全てのライダーと戦いすべてを破壊する『ライダー大戦』の夢を見ているただ一人の人間。ボケとツツコミを上手に使い分けることが出来る。趣味は料理。

キャラクターファイル03、ジェフ

ともだち（という名のサブキャラ）その1。オタク、僕っ娘萌え、空気ブレイカーであり、2人と同じく『イーグルランド四英雄』の一人。クウガの世界にて謎の人物『矢部彦麻呂』にもらったディアドライバーで『仮面ライダーディアード』に変身する。彼のオタ

ク知識はネスの冒険に大いに役立つ。

キャラクターファイル04、プー

ともだち（という名の空気）その2。言わずと知れた『イーグルラ
ンド四英雄』の一人であり、東の国『ランマ』の王子。『ヴァナデ
イルの謙虚なナイト、ブロント』を大いに尊敬し、ブロント語を
話す。主に一行のポケ専門、たまに突っ込みもやる。将来の夢はピ
クトリーラーメンマンになること（嘘）

キャラクターファイル05、ジェーン（ネスママ）

ネスの母親。料理の腕は天下一品であり『マジカルジェーンのお手
軽クッキング』と言う料理本を出版するほど。戦いに疲れたネスた
ちにハンバーグや鍋などで出迎えてくれる。

キャラクターファイル06、トレーシー

ネスの妹。特に特徴はない。

キャラクターファイル07、マリオ

『クウガの世界』に住む元配管工でありキノコ王国客員騎士。ネス
とはスマッシュブラザーズ大会での知り合い。仮面ライダークウガ
に変身して戦う。よく戦闘とかでルイージを盾にしたりしているが
それは弟に対する愛情の裏返し・・・かもしれない。とにかく陽気
な性格。とある事件がきっかけでネス達と同行する。

キャラクターファイル07、ルイージ

『クウガの世界』に住むマリオの弟。よくマリオの盾に使われる。
よく敵や味方にボコボコにされるファミリーの中ではツツコミポジ
ション。

ネス「とまあこんな感じかな」

トレーシー「ちょ・・・私の説明短すぎない？」

ネス「小さいことは気にするな」

トレーシー「嫌よ、緑のオッサンより短いなんて」

ルイーザ「あ・・・あんまりだ・・・」

ポーラ「さて、次は序章編からキバ編までに出てきた仮面ライダーの説明をするよ」

・序章編で初登場

仮面ライダーディケイド

ネスが変身する仮面ライダー、という訳か世界の破壊者だの悪魔だの言われる。カラーはマゼンタ。ディケイドライダーにカードを装填することで変身する。また、9つのライダーカードを使い別のライダーに変身できるが現在はクウガとキバのみ。主な必殺技はデイメンシヨンキック。

・クウガ編で初登場

仮面ライダークウガ

マリオが変身する古代の仮面ライダー。ベルト『アークル』に内蔵されてある霊石アマダムで変身する。状況に応じて4つのフォームに変身が可能。なおマリオの感情の高ぶりによりライジング、有頂点に達すればアメイジングに変化する。主な必殺技はマイティキック。

仮面ライダーパンチ&キックホッパー

クウガとディケイドの戦いの最中に乱入してきた謎の2人組みライダー。

仮面ライダーディアード

ジェフが変身する仮面ライダー。姿はディケイドを黄色にした感じで違う所は黄色なのと異様に長いあご。主にニコニコ動画のキャラクターになれる。必殺技は長いあごで相手に突っ込むデイメンシヨンクラッシャーアタック。

・キバ編

仮面ライダーキバ

キバの世界に住む少女、ミクが変身する仮面ライダー。別名キバの鎧。フェッスルを使用することでガルルフォーム、バッシュフォーム、ドッグフォームになる。必殺技はダークネスムーンブレイク。仮面ライダーカイザ

555の世界にいるはずなのに何故か、キバの世界に来てネス達と戦うはめになったライダー。

仮面ライダーBFキバ

キバットを奪ってビートルファンガイアが変身したキバ。前もってアームズモンスターを吸収しているため本家で言うドガバキフォームの姿になっている。

ネス「以上が序章編からキバ編までの仮面ライダーの紹介だぜ。次の龍騎編もよろしくな！」

ポーラ「ちよつと待って！今回、スペシャルゲストが来ているのよ」

ネス「スペシャルゲスト？」

しんのすけ「ほっほい、オラがそのスペシャルゲスト、野原しんのすけだゾ！」

ネス「おわっ！ポーラなんだコイツ！？」

ポーラ「この子はもう一人の仮面ライダーディケイド、野原しんのすけ君よ。実は作者さんが彼のディケイド小説を書いているデネブキャンディーさんとコラボ小説を書くらしいからその宣伝に来たの」

ネス「そーなのかい」

しんのすけ「もーネス君は忘れんぼさんなんだから」

ネス「サーセンwww」

しんのすけ「それとハイドのお兄さんが予告編を書いてくれたんだゾ。それでは皆さんごゆっくり」

ディケスマ×クレディケコラボ予告編

・・コホン、それではちょうどお時間となりました。さて次回の龍騎編も・・・」
ネスを除く全員「お楽しみに」

閑話休題 ネスファミリイ紹介& a m p ; 仮面ライダー紹介（序章編からキバ編

グダグダな終わり方ですいません・・・m（――）m
なおコラボ小説の方はデネブキャンディーさんがスランプから脱出
してから書こうかなと思っています。誰かデネブキャンディーさん
に励ましの言葉をかけてください。それだけが僕の望みです・・・。
次回は龍騎編・・・意外な人物が龍騎になります。
それでは（owo）ノシ

第9話「龍騎編その1、始まるライダーファイト裁判、無罪を信じてレディーゴ

ちよいとグダグダ。ガンダムネタあります。

今回はジェフ君のお友達（という名のガチホモ）が登場します。
それではどうぞ。

第9話「龍騎編その1、始まるライダーファイト裁判、無罪を信じてレディーゴ

ネス達が龍騎の世界に来る10分前・・・、プププランドのデデデ大王の城

「ほう・・・お主、謎の怪物たちに襲われてここに流れ着いたと・・・」

と玉座の間に座っているのはこの『龍騎の世界』ことプププランドの統治者。デデデ大王だった。デデデ大王は目の前の帽子を被り、ジェフと同じスーツを着た少年に言う。

「はい」

とその少年はうなずいた。

「ならばその怪物とはどんな姿をしていたのか、教えてくれぬかの？料理長、この者に茶とケーキを」

とデデデ大王は少年をテーブルへと連れて行き、お互いに座る。調理長と呼ばれた、ワドルディ（星のカービィに出てくる敵キャラ）がその少年とデデデ大王にケーキ（ちなみにチーズケーキ）とお茶を渡す。

「ありがとうございます。それでは・・・」

と少年がフォークを手に取りケーキを食べようとしたその時だった。パライイイン！ドスツ！

「ウグツ！」

突如、硝子の割れる音がし、デデデ大王のど元に何かが突き刺さった。そしてデデデ大王はそのまま倒れ息絶える。

「え・・・？えええっ！！？」

突然のことで動揺する少年。そこへデデデ大王の部下達がやって来る。

「だ・・・大王さま！どうなさいました！？・・・死んでる。まさか小僧貴様が！？」

と少年に目が行き、部下達は少年を取り押さえた。

「そ・・・そんな！僕はやってないです！」
と少年は叫び続けたという。

ネス達はキバの世界から龍騎の世界へとやってきた。

「ヤッフィー、今日から龍騎の世界。頑張るぜ！」

とノリノリでこの世界での活躍を意気込み、ドアを開ける。

ガチャリ、

そこへ、ネス達が遅れてやって来た。そして案の定、ネス、ポーラ、ジェフ、プーの姿が変わる。

ネスとジェフはスーツに金のバッジ、ポーラとプーはカメラやらメモ帳やらを持ち肩掛けのバッグ等を背負ったラフな姿になっている。

「あれ？ネスさん達服装変わってますよ？」

とルイージがネス達に言う。新参者だから聞くのは無理も無いだろう。ネスが説明する。

「これが俺達のこの世界での役割って奴さ。俺とジェフは弁護士。ポーラとプーはジャーナリストって奴だな」

とネスは名刺を見て言う。名刺には『ププブランド法律事務所、所長 ネス』と書いてあった。

ポーラはこの姿を見て不服そうだ。

「むー、何でネスじゃなくて、ハゲと服装おそろいな訳ー？」

「おいしい・・・、その言い方凄く傷ついて悲しんで俺の寿命がマッハなのだが・・・」

とげんなりした表情でプーは言う。

とそこへ、

「コケーコツコツコ！」

と突然家の奥から鶏が現れる。

「何だあ！？」

とあっけに取られるネス達。とそこへ、

「逃がすかぁー！折角手に入れた地鶏イイイイイイイイイイイ

！！！！！」

とトレーシーが包丁を手に持ち、鶏を追いかけていた。そんな光景を苦笑しながら、ネスは言う。

「とりあえず、手分けしてこの世界の調査だ。俺とジェフとポーラはププランド中央区に行くから、プー達は別の場所に当たってくれ」

そう言うとなすはジェフ、ポーラを連れ中央区に行った。

ププランド中央区

「しかし、全くと言っていい程何にもないなあ」

「そうだね、人が怪物とかに襲われているとかもないし・・・」
ププランド中央区にやって来たネス達は街中を探索を開始していたが、街にはこれといって特別な事件が起きてるワケではなく、至って平和な空気が流れていた。そりゃそうさ、とジェフが言う。

「龍騎の世界に出てくるライダーは鏡の中にある別世界、ミラーワールドで戦う。それにその中に住んでいるミラーモンスターは人間を鏡の中に引きずり込むからもし、怪物に襲われたとしても失踪事件として上げられるだけなんだ」

ジェフの説明を聞き、ネスははあ、とため息をつく。

「鏡の中か・・・。まっ、何とかなるだろ」

と開き直ったその時だった。

『臨時ニュースです。昨日未明、ププランドの統治者である。デデ大王が首元を刺され殺害されました』

ビル of 巨大スクリーンに臨時ニュースが流れ、3人はそのニュースを見てみる。

「殺人事件か・・・」

「なんか怖いね・・・」

「全くだな。誰だよ、そんな酷いことするやつは・・・?」

となす、ポーラ、ジェフの順で言う。次の瞬間、映った映像とアナウンスに3人は我が目を疑った。

『警察はこの事件の犯人と思われるトニー容疑者を緊急逮捕し、事

「とりあえず、ジェフの後を追おうぜ」

そんなこんなでネスとポーラはジェフの後を追いつトニーが連行されている警察署へと向かった。

一方その頃、裁判所では殺人犯として挙げられたトニーが被告席に立たされていた。トニーは「本当にやってないんだよ」と涙声で言うが全く聞き入れてもらえなかった。そんなトニーに裁判長は裁判の仕組みを彼に説明する。

「君の判決はライダーファイト裁判によって決まる」

「ライダーファイト裁判って・・・何なのさそれ？」

とトニーは聞いたことの無い裁判方法に啞然とする。

「ライダーファイト裁判とはこの事件に関与する者達が仮面ライダーとなり、鏡の中の世界、ミラーワールドで戦う裁判だ。弁護士、検事、事件の関係者が互いの意見を持ち、最後まで戦いに残ったライダーが判決を下せる」

「最後まで戦いに勝ったライダーが判決を下せるって・・・そんなのあり！？そんなので正しい判決が下せるはずが無いよ！」

とトニーは裁判長に向かって抗議するが、近くにいた警備員に取り押さえられる。

「何を言う。ライダーファイト裁判は互いが正しいと思った判決を下す為に戦う、公平且つ公正な裁判である。既にライダー達は互いに戦い始めている」

「そ・・・そんな、誰か弁護士呼んでくれ」

とトニーは半泣きになりながら弁護士を求めた。

その頃、別の裁判室では様々なモニターにライダー達がミラーワールドで戦っている光景が中継されていた。そこに司会者らしき男が現れマイクを手に持ち言う。

「皆さん！お待ちかねえ！互いの意見がぶつかりあうライダーファイト裁判！今回の裁判内容はデデデ大王殺害事件の判決に対してで

す！果たして、最後に勝ち残り、被告に判決を下せるライダーは一体誰なのか！？」

と演説していく中で、

「誰が勝ち残ると思う？」

「うーん、やっぱり。。。が勝ち残るのに１０００円かな？」

「俺はXXXが勝ち残るのに２０００円」

と傍聴席の中で観客が誰が勝ち残るのかをかけている。そして司会者が演説を終え、宣言する。

「それでは皆さんご一緒に！ライダーファイトオ！」

「レディイイイイ！ゴオオオオオオオオ！！！」

と司会者と傍聴席にいる観客の声でライダーファイト裁判は幕を開けた。

街角のビルの一角の鏡の中・・・、

そこでは四人のライダーがそれぞれ戦いを始めていた。

「お前はどっちだ？！有罪か、無罪か？！」

「うーん・・・どっちかって言う俺は有罪かな？なんか被告の話とか胡散臭そうだし・・・」

「確かに、話を聞く以上有罪以外あり得ない！」

ライダー達は互いの意見を述べながら戦う。そんな時...

ブオオオオオオオオンッ！

「！？」

突如ライダー達の戦いに新たなライダーがバイクに乗って現れた。現れたライダーはバイクから降り、戦闘に参加していく。

そして三十分後...

裁判所から戻ったトニーは弁護士に会う為に謁見室にいた。そして数分もしない内に弁護士として名乗り出た者が謁見室に訪れて来た。その顔を見てトニーは驚く。

「ジ・・・ジェフ！？それにネスさんも！？」

そう、その弁護士とはネスとジェフだったからである。

ついに始まったライダーファイト裁判・・・、ネスとジェフはトニ
ーの無罪を勝ち取ることが出来るのか！？そしてデデデ大王を殺害
した犯人は一体誰なのか！？待て！次号！！！
続く・・・

第9話「龍騎編その1、始まるライダーファイト裁判、無罪を信じてレディーゴ

多分龍騎編は前、中、後編になると思います。

次回はデイクイド、ディアードがミラーワールドで大暴れ！そして龍騎に変身する人物も登場！あの食いしん坊のピンク玉君です。

次回もお楽しみに！それでは（owo）ノシ

第10話「龍騎編その2 サメ野郎と黒い騎士と赤い龍の戦士」(前書き)

今回はギャグが少なめのような気がする……。あとディアードがあの人物にニコニコライドします。それでは始まりますよ。

第10話「龍騎編その2 サメ野郎と黒い騎士と赤い龍の戦士」

前回のあらすじ・・・龍騎の世界に足を踏み入れたネス達。何か事件は無いものかと町をウロチョロしていたら、映っていたテレビにデデデ大王の殺人事件^{ムッコロシ}が報道されており、そいつをムッコロした犯人はなんとジェフの親友^{ガチホモ}、トニーだった。ネス達は何故トニーがこの世界に来ているのか、何故デデ大王をムッコロした犯人になっているかを探るため、トニーがいる警察署へと向かったのだった。

現在・・・ププランド警察署の謁見室。

「ジェフ！ネスさん！？それとポーラさん！」

「よう、トニー。色々聞きたいことは山ほどあるが・・・一体何があつたんだ？」

とネスはトニーに聞く、が・・・

「うおおおおっ！トニー！無事かー！？怪我は無いかー！？」

「ジェフー！大丈夫だよ！ジェフが来てくれて僕は嬉しいよ！やっぱり僕たちは赤い糸で結ばれてるんだねー！？」

とジェフとトニーは刑事ドラマ等で無実の罪で捕まり引き離された恋人の如くびつたりと張り付いていた。それが男女ならいいのだが、男同士である。どう見ても腐女子が見たら興奮しそうな光景です。ありがとうございました（ry

「気持ち悪いいんだよ！お前ら！・・・んでトニー。一体何があつた？」

とジェフを引き剥がし、何故こうなったのか訳を聞こうとする。と、そこへ・・・

「おい！そこのトニーとやら！殺人をやらかしたのは本当か！？」とプーがマリオとルイージを引っ張って入ってきた。

「ってプーさんまで！？僕はやってませんよ！っていうかその二人誰ですか？ん？その二人の顔見たことあるような・・・」

とトニーはマリオとルイージに気づく。

「いかにも俺はキノコ王国、ピーチ姫の守護騎士ガーディアンにして仮面ライダークウガであるイツシミーマー」あのー！すいませーん！」って誰だよ！名乗ってる最中に部屋に入るやつは！？って・・・」

折角の名乗り口上を突然の来訪者に邪魔され、少々イラつとくるマリオだったがその正体を見て口をつぐむ。その姿は丸いピンク玉のような体に手足がついているという姿だった。ちなみにジ。ク。んではない。

「お・・・お前は・・・」

ネスもその来訪者を見てびっくりしている。どうやらこれ・・・いや、彼を知っているようだ。そしてネスとマリオは異口同音に彼の名を言う。

「カービィ!?」

「あれ? ひよつとしてネスとマリオじゃない? いや、久しぶりだな!。ところでネス、何、その格好?」

そう、このピンク玉の少年の名前はカービィ。彼も元スマッシュブラザーズ大会の参加者なのだ。(ちなみにネスとマリオが彼の名を知っていたのはそのため)

「あー実はな、俺今、弁護士でコイツの弁護をすることになったんだ」

とネスは訳を話す。

「ふーん、ひよつとしてライダーファイト裁判に参加するの?」

カービィのセリフにネスは疑問符を浮かべる。

「何だそりゃ?」

「ライダーファイト裁判は弁護士や検事、事件の関係者が仮面ライダーになってミラーワールドで戦う裁判なんだ。実を言うと僕も選ばれたんだよ。ホラ」

とカービィは口から手をつ込み龍のエンブレムが入ったカードケースを取り出す。

「へー、これが・・・ところでさ」

とポーラは感慨深そうに言い、カービィに聞く。

「君、デデデ大王とはどういう関係なの？話を聞く限り弁護士でも検事でもないけど・・・」

「僕はデデデとは喧嘩仲間だよ。でも、信じられないやアイツが死ぬなんて・・・」

とカービィはデデデ大王が死んだことを思い出し落ち込んだ顔をする。ところでさ、とネスは切り出した。

「お前はトニーがデデデに手をかけるのを見たのか？」

いや、とカービィは言う。

「僕がデデデの城に遊びに来た頃には死んでたんだ」

そして口には手をつ込み手帳を取り出して続ける。

「現場にはデデデとトニー君だけ。死因は首元に鋭い刺し傷。そしてトニー君の手にはフォークが握られていたんだ」

フォークを握ってたのはね・・・とトニーがカービィの後を続ける。
「出されたケーキを食べようと思ったんだ。そしたらいきなりデデデ大王が死んでいて・・・」

とトニーの話を聞き、ネスは腕を組んで考えていた。しばらく考えた後・・・

「何か腑に落ちないな・・・よし、実際にデデデ城に行って調べてくるか。カービィ案内してくれ、あと今回、ルイージとプーはトニーについてやってくれ」

そんな訳で、ルイージ、プーを留守番させネス、ポーラ、ジェフ、マリオはカービィの案内でデデデ城へと向かった。

デデデ城へ向かう途中・・・

「ん？綺麗な花だな。写真に撮ろつと」

とカービィは口からカメラを取り出し花を写真に収める。

「お前写真撮るようになったのか？」

とネスはカービィに聞く。

「うん、これもネスに即発されたからかな。今ではフリーのカメラ

マンをやつて、写真を出版社などに売り込んでいるんだ」

と恥ずかしげにネスに笑いながら言うカービー。ふと、ネスは氣になつたことをカービーに聞いた。

「ところでさ、お前ライダーなら今頃鏡の世界で戦つてるはずだよな？何で出ないんだ？」

「うーん・・・トニー君の話を聞いているうちに彼が犯人じゃない氣がしてさ・・・」

それじゃあ、とマリオが変わりにカービーに聞く。

「それじゃあ真犯人は誰か目星は着いているのか？」

「うん、一人だけ。そいつの名はメタナイト」

「「メタナイト？」」

「メタナイトはデデデが昔戯れで開いていた出版社PPPで僕と一緒に記事をやっていたんだ。でも・・・三年前に何処かへ行つてしまつた」

「ちよつと待つて、何で3年前にどつかへ行つたのに何でそいつが真犯人になるのさ？」

とジェフはカービーに聞く。

「それは、あの時デデデが殺されたあの日、なぜかあの城にいたんだ。3年間もずっと連絡もなかったあいつが・・・」

「なるほど・・・」

ネスは話を聞き、うなずいた。確かにカービーの言う通りなら三年間も連絡が無かつた人物が事件の日に訪れて来るなんて、どう考えてもかなり怪しい。だがそうなる動機はなんなのか？ネスがカービーにメタナイトについて詳しく聞くとする。がその時・・・
キイイイイイイイイイイイン！

「何の音だ？」

と突然聞こえてきた音にネス達はびっくりする。そして近くに停めてあつた車の窓を見ると、其処にはライダー達が戦い合つてゐる姿が写つていた。

「これが、戦いの舞台ミラーワールド・・・」

「うん。ここで己の主張を賭けてライダー達が戦う・・・、ちなみにこの戦いは中継もされて、一部のエンターテイメントにもなっているんだ。ようするに機動武。伝Gガ。ダムガン。ムファ。トと同じだと思うといいよ」

とネスの問いにカービィは答える。

「うつしや、俺達も参加するか。行くぜジェフ！」

そう言うとなスはディケイドドライバーを取り出しセットする。

「ああ！・・・って僕らも参加できるの？ミラーライダーでもないじゃん僕ら」

「あのな・・・俺達はトニーの弁護士だろうが、参加できるのは当たり前だつて」

「そんなもんかな・・・」

とネスとジェフは車の前に立ちお互いカードを取り出し言う。

「「変身！」」

『カメンライドウ・・・』

『ディケイド！』

『ディアード！』

そしてカードをセットし、ネスはディケイド、ジェフはディアードへと変身する。

「ハッ！」

そして、ダイブするかのように車の窓に突っ込み、そのまま呑み込まれるかのようにミラーワールドに入ってしまった。

「すごい・・・」

とポーラはこのディケイド&ディアードのあっさりミラーゲート通過に感心の声を上げた。

「よっしゃ、俺だつて変身！」

とマリオもクウガに変身してミラーワールドに入ろうとするが・・・
ゴン！

「オウフ！」

クウガではミラーゲートを通過することはできず、頭をぶつけその

まま地面にぶっ倒れた。

その頃、ミラーワールドでは先程の四人のライダーの一人、蟹型の仮面ライダーシザースが乱入してきたコウモリ型の仮面ライダーナイトに追い詰められていた。ナイトは倒れているシザースに容赦なく斬撃を放っていく。

「グアッ！わ、分かった！じゃあ無罪！無罪でいい！」

シザースは降参したかのように後退りする。が、実際はナイトが剣を収めた隙に反撃しようというセコい考えがあつた。だが……
斬！

「グエッ！？」

ナイトは降参するシザースに対して構わず斬撃を浴びせる。

「な、何故降参したのに……！？」

「俺は判決には興味などない」

「な……何だと！？じゃあ何故このライダーファイトに……！？」

「貴様には関係のないことだ」

何故このライダーファイトに参加するのか？シザースがナイトに問おうとするが、ナイトは最後まで聞かずバックルのカードケースから一枚カードを取り出し、持っている剣にそのカードをセットした。
『ファイナルベント！』

ナイトの上空から黒いコウモリのミラーモンスター、ダークウィングが現れ、ナイトは高く飛び上がり自身の剣、ダークバイザーを軸にダークウィングと一体となって回転しながらシザースへと突っ込んでいく。

「う、うわあああああああつ……！！」

ドゴオオオオオオオオオオオッ！！

ナイトの必殺技、飛翔斬がヒットし、シザースは爆破して散つていった。そしてナイトはシザースから出たカードを集めると、それを自分のカードケースへとしまつていった。その時……

「・・・ん？」

ナイトの後ろからディケイドがディケイダーに乗ってやって来た。ナイトは現れたディケイドに対しダークバイザーを構える。

「此処がミラーワールドか。思っていたより普通だな。なああんた、弁護士としてちょっと聞きたいんだけど・・・」

ディケイドがそう言っただけでディケイダーから降りた瞬間、ナイトがダークバイザーを構えたままディケイドに向かっていく。

「・・・話を聞く気はないのか」

ディケイドはライドブッカードを取り出し、ディケイドライバーへと装填しようとする。だがナイトはディケイドのカードを見た瞬間、その身体を急に止めた。

「！？貴様の持っているそのカードは？」

「・・・どうやら俺のカードは、お前達とは違うようだ」

ディケイドがそう言っただけで、ナイトはダークバイザーを収め、その場を去ろうとする。

「お、おい！ちょっと待て・・・」

ディケイドは去ろうとするナイトを止めようとする。が、その時...

「わひゃあああああああああああああ！」

ドゴオンッ！ドゴオンッ！ドゴオンッ！

「ってうおおっ！ジェフ!?」

「...ッ?!」

突如別行動をしていたディアードがディケイドの方へ向かってダッシュしていた、どうやら何者かに攻撃を受けているようだ。二人は近くにあった土管に身を隠し、ディケイドがディアードが追いかけて来ている方向を見ると、其処には両肩に巨大な大砲を抱えたバツファロー型の仮面ライダー、ゾルダがディアードを追いかけていた。「素人に判決が下せるか！ああいうナヨナヨした女々しい男は有罪だ有罪！フンッ！」

「くっそおおおおお！そんな勝手な理由でトニーを有罪にしてたまるか！でも反撃したくてもあいつの装甲が固くてできねー

「ネース、ヘルプ！ヘルプミー！」

ゾルダは有罪を主張しながらディアードを砲撃する。

「何だアイツ……」

「……おそらく、立憲した検事だ。ものすごく単純な奴で有名だな」

「おいおい……大丈夫かよ。あんな奴が検事で」

とディケイドとナイトが話していると……

「うひゃあああああ……あ？」

ディケイドの方へディアードが来てしまった。

「うおっ！ジェフお前なんでこっちに来てんだよ！？あっちいk……」

・

ドゴオンッ！

「「アッー！！！」」

バシユウッ！

最悪のタイミングでゾルダの砲撃が直撃してしまい、ディケイドとディアードはミラーワールドから弾かれてしまった。そしてそのま
ま、2人は変身が解除されてしまう。

「あいてててて……」

「ジェフ……お前なあ……何でこっちに来るんだよ。おかげで
こっちもとばっちり受けちゃった」

「ご……ごめんごめん」

とジェフはネスに謝罪する。とそこへポーラがいまだ気絶している
マリオを引きずってやってくる。

「ネス、ジェフ！大丈夫！？」

「俺たちなら心配ない。次は必ず勝つてやる」

とネスは立ち上がり言う。そうだね、とジェフも答えた。

「そうだね、何度も参加し続けられ、いつか必ずライダーファイト
に勝ってトニーを無罪にすることができる」

それに……とネスはジェフの後に続く。

「真犯人がいるなら、そいつもライダーファイトに参加している筈
だ。ならそいつを見つけて真実を聞き出してやる」

「そんなことまで考えて出場したんだ・・・すごいやネス」とポーラはネスの考えに感心する。

「ところで、何でマリオは気絶してんだ？」

と気絶しているマリオを指さし言うネス。

「実はネスたちに乗じて自分もライダーファイトに参加しようとして・・・」

「アホだな」

などともうでもいい雑談をしているネス達。ただ一人カービィは眉間にしわを寄せて自分のカードケースを見てつぶやく。

「真犯人・・・そいつを探すにはライダーファイトに・・・ネス！皆！早くデデデ城へ向かおう！」

「ん？ああ・・・そうだな。行こう」

とカービィに言われ、ネス達はデデデ城へ向かった。

デデデ城・・・

ネス達はそこで大王の秘書を務めていた鎌田と言う男の話を聞くこととなった。

「デデデ大王の秘書を務めていました鎌田と申します」

「弁護士のネスだ。こっちは助手のジェフ、そしてこっちがジャーナリストのマーイッツミー、マリオ」とポーラだ

とお互いに挨拶をした。途中でマリオがかっこよくポーズを決め自己紹介をしたが気にしてはいけない。

「んじゃあ、単刀直入に聞くけど・・・あの日デデデ大王とトニーの間に何があったのか教えてくれないか？」

とネスが事件の内容を切り出す。

「とんでもない野郎ですよ。道に迷って大王さまに保護してもらった恩を仇で、しかも殺害という形で返すなんて・・・」

とため息をつきながら鎌田は言う。

「んで、それを見た人はいるの？」

「いえ、残念ながら・・・ただ、大王様が殺害されたと同時に現場

に外来者が訪れ、その現場を目撃しその状況を見て、あの男を逮捕したわけです」

そう言つて鎌田はその資料をネスに見せる。だが、その資料の一つ一つを確認していく内に、進の表情は難しいものになっていく。

「?どうしたネス」

とマリオはネスに問う。

「明らかにおかしすぎる」

「何処がおかしいの?」

「まずトニーには動機がない。動機がないのにわざわざ目立つ応接室で殺人を犯すなんて普通はあり得ない」

ジェフもそうだよ、とネスに賛同し言う。

「凶器として上げられてるフォークだけど、よっぽど先が鋭くない限りはフォークなんかじゃ、それもあいつの力じゃ人間を刺すなんて出来ない。あいつもともと力は女性並みに弱いからね」

そしてネスが再び口を開く。

「仮にフォークで首元に刺す事が出来ても、デデデは叫ぶか抵抗するかで周りに知らせる事が出来た筈。なのにそんな物音は一切無かったようだ。つまり、トニーにデデデを殺す事は逆に無理に近いんだよ」

「成程・・・でカービィ君や鎌田さんはどこにいたの?」

とポーラはネスの名探偵ぶりの推理に感心しながら気になっていたことを口に出す。

「僕はデデデの城に遊びに行くためにリックに乗っていったんだ。

リックって言うのは僕の友達のでかいハムスターさ」

「私は、城へ出勤する前城下町のカフェでコーヒーを飲んでいました。日課なんですよコーヒー飲むの」

とカービィと鎌田はアリバイを主張する。この2人はアリバイがあり、事件発覚までデデデが殺された事など知るよしもないのだが、ネスは何故か頭の中で何かが引っ掛かっていた。

「・・・さて、そろそろ始めましょうか?」

「・・・その言葉、待ってたぜ」

鎌田はポケットから鯨のエンブレムが刻まれた水色のカードケースを取り出し、ネスもディケイドライダーを取り出し装着する。

「この裁判は、私が判決を下す」

「面白れえ・・・」

ネスと鎌田は近くにあるガラスの前に立ち、ネスはライドブッカーからディケイドのカードを出し、鎌田はカードケースを翳して腰にライダーベルトを出現させる。そして…

「変身ッ！」

『カメンライドウ、ディケイド』

「変身！」

ネスはディケイドライダーにカードをセットしてディケイドに、鎌田はバツクルにカードケースをセットして鯨型の仮面ライダー、アビスに変身した。

「ネス！僕も！」

とジェフもディアードライダーを取り出し装着、カードをセットする。

「変身！」

『カメンライドウ、ディアード』

そしてジェフもディアードに変身した。

「それでは行きましょう・・・ライダーファイト・・・」

「レディイイイイイ！ゴオオオオオオ！」

掛け声とともに3人はミラーワールドにダイブした。

ミラーワールドに突入してすぐディケイドとアビスは戦闘を開始した。ディアードは乱入ライダーが来たらそれを迎え撃つようにスタンバイしている。

「ハッ！セイ！ドリヤア！」

「ヌン！ジャッ！セヤア！」

入り乱れる拳、蹴り、剣戟！だが、形勢はややアビスが有利な状況

になっていた。ディケイドはライドブッカードをソードモードにしてなんとか耐えきる。

「私に勝てるライダーなどいませんよ」

「ヘッ！ 鮫だけに口は達者なんだな？」

ディケイドは強がるも、アビスが繰り出す攻撃に押されっぱなしであつた。

（やつべーな・・・なんかいいカードが出てくれればいいんだが・・・）

とライドブッカードからカードをドローしようとしたその時、

「ハアアアアアアアッ！！！！」

「ぬおっ！」

ディケイドの後ろから他のライダー達が乱入し、ディケイドは仕方なく乱入してきたライダー達に対応する。

「ライダーバトルに参加しているのは私だけではない。貴方の力、見せて頂きますよ……」

アビスはそう言つてディケイドから離れていく。

「ッ！ 待ちやが……って、お前等も俺を逃がす気はないらしいな……」

ディケイドは追いかけてようとするが、周りにいるライダー達のせいで追跡が出来なかった。ディアードも同じで乱入してきたライダーたちと戦闘を繰り返していた。そんな中ディアードは胸中でつぶやく……

（鎌田さんの変身したライダー―アビス―は・・・原作に出てきていなかった・・・あのライダーは一体・・・）

その頃、マリオとポーラは事件の第一発見者であるメタナイトを見かけたため、彼のオフィスを訪ね事情を聞くことにした。

「あなたがメタナイトさんですよね……」

「・・・そうだ」

とカービィとカラー違いの同じ体系でマントを羽織り、仮面をかぶ

った男、メタナイトに聞く。メタナイトは肯定の返事をしながらカタカタとパソコンを打ち続ける。デスクには写真たてがありその写真にはカービィと彼が肩を組んで笑っている姿が写っていた。

「カービィとはいいいチームだったみたいだな」

とマリオがメタナイトに聞く。

「まあな、俺は記事を・・・アイツは写真を。俺達はデデデの作った出版社で最高のチームだった。だが・・・」

メタナイトはパソコンを打つ手をやめ、続ける。

「そのチームは・・・出版社は俺が壊してしまった」

「?どういうこったそりや・・・」

とマリオがメタナイトの言葉に疑問符を浮かべている時だった。

ガチャリ!

オフィスのドアが開き、其処からカービィが険悪なムードを出しながら入ってきた。

「そいつは僕達のチームを裏切ったんだ。三年前、大手の出版社に誘われたこいつは僕達に何にも相談もしないで黙って僕達のチームを抜けたんだよ!そのお陰でデデデの会社は潰れたんだ」

「どういうこった・・・」

「チームを・・・裏切った?」

「・・・」

かつてメタナイトがカービィを裏切ったという事にマリオとポーラは驚く。そしてカービィは無言のまま黙るメタナイトの胸ぐらを掴む。

「メタナイト、あの日なんでデデデの城にいたんだ?!三年間もずっと離れていた君が!」

「俺は・・・あいつに呼ばれたただだ。特に深い意味なんてない」
そう言つてメタナイトは胸ぐらを掴むカービィの手を払いのける。

「嘘をつくな!君がデデデを殺したんだろ?!そしてその罪をあのトニーという子に押し付けた!違うか?!」

「...ッ!違う!カービィ、俺は...!」

メタナイトは否定しようとカービィに近づくが、カービィは口から自分のカードケースを取り出しメタナイトへ見せつける。

「カービィ……」

「……僕達にもう言葉はいらない。決着をつけよう……メタナイト」

カービィは鏡の前に立ち、カードケースを鏡に向かって翳す。そしてメタナイトも何処からかカードケースを出し、それをカービィと同様鏡へと翳す。すると二人の腰（というか口の下）にライダーベルトが出現し、二人はそれぞれ変身の構えをとる。

「変身ッ！」

「変身！」

二人がカードケースをバツクルへとセットすると、2人の体はまるまる型からネス達と変わらない人間の姿になり、カービィは龍型の仮面ライダー龍騎、メタナイトはナイトに変身する。二人は変身すると目の前の鏡をゲートにミラーワールドへと入っていった。

「ちよつと！二人とも……あーあ……行っちゃった」

とポーラはため息をついた。

ミラーワールドにやって来た龍騎はナイトと対立するように立っていた。しかし、本来ならナイトはダークバイザーで攻撃しているのだが、何故かナイトは何もせずうつ向きながら立っているだけだった。

「どうした？突っ立っているだけじゃ勝てるワケないだろ！」

龍騎はナイトの顔に向かって力を込めながら拳を放つ。龍騎はこれでナイトも動くだろうと思った、が……ナイトは防ぎもせずかわしもせず、黙ってその攻撃を受けていった。

「どうして避けないんだ！？」

龍騎は再びナイトに向かって何発もパンチを放つ。だがナイトはそれを全てガードせず受けていく。こんな一方的な攻撃に、流石に龍騎も手を止めてしまう。

159

「な・・・何だ！？あれもライダーなのか？」

と龍騎は訳が分からず戸惑う。そんな龍騎を尻目にDドナルドはライドブツカーからカードを取り出しセットする。

『ファイナルアタックライドウ、ドドドドナルド！』

電子音が響くと同時にハンバーガーらしきものが4つ降ってきたDドナルドはその4つを両手でキャッチすると、

「はい、犯ヴァーガー・・・4個ぶん！！！」

とものすごい勢いでタイガに向けて投げる。ハンバーガー4つは狙い変わらずタイガに直撃。

「ウギヤアアアアアアアアアアアア！！！」

そのまま断末魔の悲鳴を上げタイガは爆発し消滅した。

そしてDドナルドはディアードに戻り、ディケイドの隣に立つそして2人は後ろにいる龍騎とナイトの方を振り向く。

「お前は・・・」

「よお、また会ったな。今度はじっくり相手してもらおうか」

ディケイドはライドブツカーからまた別のカードを取り出し、龍騎達に見せるようにそのカードを前に翳す。

「さあ、キバっていくか！変身ッ！」

『カメンライドウ、キバ！』

ディケイドがディケイドライバーにカードをセットすると、ディケイドの姿が奇怪なメロディと共に異形のライダーへと変化していく。前の世界で絵柄を取り戻したカードの内一枚、キバのカードでディケイドはDキバに変身したのである。

「な、なんだ・・・？！」

「姿が、変わった・・・？」

「コウモリにはコウモリってやつだ。さて、いくぜ！」

Dキバはナイトに近づき、懐に入り打撃を放っていく。一撃一撃が重いDキバの打撃にナイトは押され、近くにあったビルの地下駐車場に吹っ飛ばされる。

「グッ・・・！」

「倒れるには早いだろ？まだまだこれからからだ」

今度はディアードがナイトに近づき取り出したカードをバツクルへとセツトする。

『ニコニコライドウ、ドナルド！』

ディアードは再びドナルドへと変身し犯ヴァーガーやフライドポテトを巧みに使いナイトを追い詰めていく。

「グッグウ・・・ッ！お、お前らは一体・・・何なんだ？今まで俺はライダーファイト裁判の記事を書いてきたがお前らは見たことないぞ・・・」

「そうかい？俺はお前達の事はよく知ってるぜ。仮面ライダーナイト、そして仮面ライダー龍騎！」

後ろからDキバがナイトに近づき、フォームカードをディケイドライバーにセツトする。

『フォームライドウ、キバ！ドツガ』

ディケイドライバーの中枢核から現れた拳のような形をした槌、ドツガハンマーを手にし、Dキバは紫色の鋼のような鎧を纏ったドツガフォームへとフォームチェンジする。

「ほらよ！」

「ッ！」

ヒョイッドゴオオオオンッ！

Dキバが振りかざしたドツガハンマーをナイトはかろうじて避けるが、その反動で近くにあった柱が木っ端微塵に砕かれてしまった。

「クッ……！」

体勢を立て直したナイトはカードケースから一枚のカードを取り出し、ダークバイザーへとセツトする。

「トリックベント！」

音声が響くと同時にナイトの幻影が三体現れ、幻影と共にナイトはDキバに向かって反撃を開始した。

「な！？うおわっ！」

「うわああっ！」

ナイト達による連携プレイにDキバとDドナルドは耐えきれずデイクイド、ディアードへと戻ってしまう。

「分身か…そういうの、こっちにもあるんだよ！」

『アタックライド、イリユージョン！』

デイクイドがカードをセツトするとナイト同様に自身の幻影を三体生み出す。そして四対四になったデイクイドとナイトは駐車場の中に入り乱れながら交戦していくが、デイクイドの方が優勢であり、ナイト達は全て吹っ飛ばされ一人に戻っていく。デイクイドもナイトが一人に戻ったと同時に自分の分身達を消していく。

「ガハッ！ハア、ハア…」

「おおー、ネスの方が優勢DA！」

とディアードは駐車場の柱の影で龍騎と一緒に観戦していた。

「無様だね、メタナイト」

ナイトが倒れている中、龍騎は倒れているナイトを見て鼻で笑っていた。

「君は、僕たちを裏切った。デデデやPPPの皆を裏切った罰なんだよ」

龍騎は独り言のように小声で呟いていると、デイクイドはライドブツカーからファイナルアタックライドのカードを取り出していた。もうすぐナイト・メタナイトがやられる。龍騎・カービィにとっては喜ばしい事である……筈なのだが…

「・・・クッ！」

龍騎は心の中で何かが引つ掛かってしまい、拳を握り締めながら小刻みに震え、次の瞬間。

「待ってくれ！」

「あつ！おいカービィ！どこへ行くんだ！」

龍騎はデイクイドの方へと走って行った。はたして裁判の行方は！
？ネス達は無罪を勝ち取ることができるのか！？そして・・・デデデを殺した犯人は一体！？

続
く
・
・
・

第10話「龍騎編その2 サメ野郎と黒い騎士と赤い龍の戦い」(後書き)

次回ぐらいに龍騎編完結すると思います。たぶん・・・。

第11話 「龍騎編その3 本当の仲間、本当の絆」(前書き)

後半がグダグダのような気がする・・・それでも言い方はどうぞ。
ディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ・・・始まるZE

第11話 「龍騎編その3 本当の仲間、本当の絆」

「待ってくれ！」

ファイナルアタックライドでナイトにとどめを刺そうとするディケイドに龍騎が声をかけ、ナイトとディケイドの間に挟むようにして立ちはだかる。

「ん？」

「こいつは僕が倒す、邪魔しないでくれ」

「その声・・・カービィか？外見が全く違うから気がつかなかった。というか眼中になかった」

「眼中になかったって・・・」

ディケイドの発言に若干こける龍騎。

「そう言えば何でお前ライダーファイトに出てるんだ？戦いたくないって言ってたじゃん」

「うん・・・だけど、こいつが僕に教えてくれた。人間なんて所詮、一人で戦うしかないって・・・」

『ソードベント！』

龍騎はそう言つてドラグバイザーにカードをセットしてドラグセイバーを取り出し、ナイトに向かって切っ先を向ける。とその時、ドオン！ドオン！ドオン！

「うわあああああああつ！！！」

と遠くから悲鳴が聞こえ、ディアードがディケイド達の所へ吹っ飛ばされた。何事か、と3人がディアードの方へと目を向けるとそこにはアビスが立っていた。

「迅速に判決を出すのが今の裁判です。残るライダーは貴方達だけです」

そう言つとアビスはカードケースからファイナルベントカードを取り出しそれをセットする。

『ファイナルベント』

「くそっ！このライダーは物凄く強い。とりあえず全員逃げて体勢を立て直すんD A 体勢を立て直すんD A 大切なことなので2回言いました」

ディアードはそう言うたダッシュで走り出した。

「あっ！あんにやる！おい！お前らも逃げろ！」

とディケイドは真っ先に逃げたディアードをにらみつつも龍騎達に声をかけた。

「だけど・・・コイツとの決着が・・・」

龍騎はドラグセイバーをナイトに突きつけながら言う。

「アホか！んなこと言ってる場合か？さっさとこの場からトンスラするぜ！」

そう言うた2人を抱えライドブツカーから足で器用にカードを取り出しディケイドライバーに装填する。

『アタックライド、インジビブル！』

カードの効果でディケイドは龍騎とナイトもろとも姿を消しそのまま逃げ去った。

「ちっ・・・逃げましたか・・・」

誰もいないミラーワールドでアビスは舌打ちをした。

「ふっ、助かった・・・」

「オイイ！何でネス達が俺の頭から出てきてんだ！？」

ディケイド達は何故かメタナイトのオフィスにやってきていたプーのはげ頭から元の世界に戻っていた。いきなり自分の頭からディケイド達が出てきたのでプーは驚いている。そのままディケイドはネスへ、ディアードはジェフ、龍騎はカービィ、ナイトはメタナイトに戻った。

「俺が知るか。お前はハゲなんだから鏡みたいに反射するんじゃないの？」

とプーの問いを一蹴するネス。そんなやり取りをしている最中、
「答える！何で君がライダーファイトに参加しているんだ！？」

カービィはメタナイトの胸倉をつかみ、何故ライダーファイトに参加するのかを問いただしていた。メタナイトは何も答えず、カービィの手を払い、そのまま何処かへと去っていった。

「メタナイト・・・」

カービィは去っていくメタナイトの背中を見ることしか出来なかった、そして騒ぎを聞きつけポーラとマリオもやってくるがやはり見ていることしか出来なかった。（言い忘れていたがルイージはトニの元にいます。）

「・・・少しここで休むか・・・」

カービィから離れたメタナイトは近くにある公園に訪れていた。デイクイドとの戦いで疲れきったその身体を休ませる為にベンチに座って一息つく、が...

キイイイイイインッ

「まさか・・・新手的ライダーか!？」

ライダーファイト開始の合図でもある特有の金属音が響き、メタナイトは近くに捨ててあった割れた鏡に目をやった。其処には大鷲型の仮面ライダー、オーディーンが姿を現していた。

「っ!・・・お前は・・・オーディーン!」

メタナイトは身体を起こし割れた鏡に向かってカードケースを翳してライダーベルトを出現させる。

「変身ッ!」

メタナイトはカードケースをバツクルにセットしてナイトへと変身し、その割れた鏡からミラーワールドへと入っていく。そしてミラーワールドに辿り着いたナイトを待っていたかのように、オーディーンは悠然と其処に立っていた。

「やっと見つけたぞ・・・貴様のカードを、俺に寄越せ!」

ナイトはダークバイザーを抜き、悠然と立っているオーディーンへと向かっていった。

その頃ネスの家・・・

ネス達はトレーシー特製の鶏鍋を食べていた。もちろん包丁持ったトレーシーに追いかけていたあの地鶏であった。(ちなみに何度もうが、ルイージはトニーの元におりここにはいない。と言うか忘れ去られてる。)

「結構、美味しいねこれ」

とカービィは美味そうに鍋を食べる。

「・・・だけどこの鍋の材料がここに来るときにトレーシーが追いかけていた地鶏だと思うと何となく食う気になんねえ・・・」

とネスはげんなりとした表情で言う。そしてカービィはある程度食べると箸を置きこう言った。

「裁判のことなんだけどさ・・・やっぱり真犯人はメタナイトだと思う」

「何でそう思うのさ？」

とジェフは箸をおきカービィに聞く。

「あいつは僕らを裏切り、デデデとの間で何かあったはずだ。それでデデデを・・・」

「確かにそれは合点がいくけどよ・・・」

とマリオがジェフに代わり腕を組みながら続けた。

「お前とメタナイトって良いチームだったんだろ？」

「確かに、何度も凄いネタを掴んで賞まで貰った。だがあいつは突然僕達のチームを裏切ったんだ！あいつは多分、今度は王国を乗っ取るにデデデを！」

カービィはメタナイトについて語るが、話の限りではあまり良い関係じゃなかったようである。

「・・・なら、その事を裁判所に行って話して来れば、トニーは無罪になるかもしれない。なら、トニーのところに行ってこれからの事を話し合おう」

「そうだ！早くあいつを解放してやらなきゃ！」

とジェフもはっとして言う。あと、とネスは残り物の鍋をタッパに

「ルイージもお腹させているだろうし……これを持って行ってやんねーとな」

その頃警察署、

とルイージは面会待合室でごろ寝していた。全くの飲まず食わずで次の面会を待っているのである。

と面会が始まるのを待っていたその時、
ブオオオオオオオオオン！！

ルイージの周りに歪みの壁が現れ、ルイージを飲み込んでしまった。気がつくとルイージは町の一角に居た。

訳が分からずうろたえているルイージ。そこへ、

何者かが姿を現した。その顔はルイージが知っている顔だった。

そう、ルイージの前に現れた男は幾度も邪魔をしてきた富竹だったのだ。

「誰がホラ吹きだ！僕はディケイドが悪魔だという事実を言っただけだ！」

「それで……僕をここに連れ出して何の用さ」

「迎え？」

「そうだ、ディケイドはやがて全ての世界を破壊しつくす。君達を

死なせるわけにはいかない。腹がすいているだろう、おにぎりもたくさん用意してある。さあ・・・」

とおにぎりを取り出しルイージに差し出そうとする。ルイージはしばらく考えた後、結論を出した。

「結構です。僕はネスさん達についていく」

「デイケイドはライダーファイトの中で悪魔に目覚めるのだぞ?」

「そんなものは貴方の勝手な推測でしかない・・・いや妄想か。とにかく僕はネスさん達に着いていきます」

と拒否するルイージ。富竹は眉間にしわを寄せたが、しばらくして普通の顔に戻り言う。

「まあいいや・・・どうせこの世界もデイケイドに破壊されるのだから」でも、おにぎりは下さいね」・・・」

富竹の言葉を中断させ、おにぎりを奪い食べた後、ルイージは彼が作り出した歪みで待合室へ戻っていった。

「あれ・・・僕の昼飯だったのに・・・」

と悲しげな表情で富竹は言ったが無視した。

それから十分後、ルイージはネス達と合流し、面会室でトニーと話していた。

「成る程ね・・・メタナイトが犯人・・・ありえそうな話ですね・・・」

「うん、だからライダーファイトを一時中断してメタナイトについて再度審判するんだ」

カービィはメタナイトについての再度審判を申請する。

「それじゃあ、真犯人が見つかったら僕は自由の身なんですね?」

「まあそう言うことになりますね」

とトニーの問いにカービィはうなずく。

「よかった、ジェフ!」

「うおおおお!トニー!」

とトニーが自由になれることを知りジェフはトニーに抱きつくことと

するが・・・

「「やめい！」」

とネスとポーラのダブルキックで失敗に終わる。

「貴方もそれでいいですか、鎌田さん」

「ええ、構いませんよ」

と鎌田も承諾する。これでトニーの件はこれにて一件落着か・・・

と思われた。だが、

「ちよつと待つて」

とポーラが釘を刺した。これにはマリオを除く他の一同も驚愕する。

「私はメタナイトさんが犯人だなんて思えない」

「おいしい・・・でもお前あの仮面被った奴のことなんか知らないだろ？」

とプーは呆れたように言う。

「俺もアイツが犯人だとは思えないぜ」

「マリオさんまで!？」

とマリオの発言にカービィは呆れたように言い続けた。

「それじゃあ証拠は？何を証拠にそう言うことを!？」

「あいつが全てを壊したって言ったとき・・・とても悲しそうな顔をしていた・・・あんな悲しそうな顔をするやつが殺人なんか犯す訳ねーだろ」

とカービィが声を荒げ問いマリオが答えた。しかし、とプーは苦りきった表情で言う。

「犯人がメタナイトでないとすると真犯人は誰なのだ？」

そうだよ、とカービィは答える。

「このままライダーファイトを続ければトニーはまた牢屋に閉じ込められる。それでもいいんですか？」

カービィの問いにマリオとポーラは言葉をなくす。それを見たカービィは、

「それじゃあ、僕はメタナイトを捕まえに行きます」

そう言いカードケースを手に取り外へと出た。

その頃、ミラーワールド

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

ナイトがオーディーンに向かって何度も攻撃を放っていた。オーディーンはナイトの攻撃を避けるだけで何もしなかった。

「くそっ！」

かわされてばかりいるナイトは苛立ちながらもカードを一枚抜きダークバイザーにセットする。

『ファイナルベント！』

「これで・・・どうだああああああああああつ！！！」

そう言いながらナイトはダークウィングを召喚し、必殺技である飛翔斬をオーディーンに向かって放った。オーディーンはなんの抵抗もせず散っていき、辺りにオーディーンのカードが散らばっていた。ナイトはその中の一枚を取り、ミラーワールドから抜け出して変身を解く、それと同時にカービィが怒りをあらわにメタナイトの元へやって来て胸倉をつかんだ。

「まだ戦っていたのか!？」

「ぐ・・・」

「カービィ落ち着け！」

とマリオがやって来てカービィの手を払い、メタナイトを抱き起す。

「おい！すっかりしろ・・・ん？これは・・・」

とマリオはメタナイトの持っているカードを拾いそれを見た。

「何だこれ・・・えーと、タイムベント？」

「な・・・!？タイムベント!？」

とカービィはそのカードを見て驚愕していた。絵柄はただの時計が書かれているだけのカードなのだが・・・、

「これ知ってるのか？」

「知ってるも何も、世界に一つしかないと言われているカードだよ！遊。王で言うところの神のカードに匹敵するレア度なんだ。しかもその

能力は過去に戻ることが出来るとか・・・もしかしてこれを手に入れるために・・・」

「そうだ・・・、とメタナイトはうなずく。」

「俺は3年ぶりにデデデに呼ばれた・・・だけど一足違いでデデデは・・・俺は知りたかっただけなんだ！あの時アイツが何を言おうとしていたのかを・・・」

「だけど・・・ライダーファイト国際条約でカードをライダーファイト以外に使ったら失格になるんだよ？」

「だけど・・・それでも俺は真実が知りたかった・・・」

「メタナイト・・・」

メタナイトの本当の思いに気づき、彼を疑っていたカービィは恥ずかしく思っていた。その時！

「フフフフ・・・死になさい！」

と鏡からアビスが飛び出しメタナイトに襲い掛かる。その時だった。

「そこまでD A ！」

ドウッ！ドウッ！

「うぐおっ！？」

突然、銃声が響き、弾丸に当たり吹っ飛ぶアビス。そこへディケイドとディアードが現れた。

「いまだ！パラライシス！」

「うぐおっ！体が動かん！？」

ディケイドはアビスにP S I『パラライシス』を放ちアビスの動きを止めた！

「何故、私がメタナイトを襲うと思った・・・」

「マリオが言っていた・・・、真犯人はメタナイトの口を封じ、罪を着せるはずだってな」

「そう・・・つまり犯人はお前ってことさ！」

とディケイド、ディアードはアビスに詰め寄る。

「違いますね・・・犯人はメタナイトです。私は彼に罪の告白をさせるために来たんですよ」

と言いつくするが、ディケイドは全く信じていない。

「お前の胡散臭い話なんか信用できるか」

「そうですね・・・信じないなら別によろしいですが、何か忘れてませんか？私は事件のあった日、城下町のカフェでコーヒーを飲んでいたんですよ？ライダーにもなっていない私がどうやって大王様を殺せるのです？」

確かにアビスの言う通り、あの時喫茶店にいた鎌田がライダーにもなっていない普通の人間ならデデ大王を殺害するのは不可能だ。だがメタナイトは持っていたタイムベントのカードをアビスに見せる。

「その答えもコイツで分かる！」

そう言いながらメタナイトはナイトへと変身しようとするがカービイはメタナイトからカードを取り上げ自分の腰にライダーベルトを出現させる。

「カービイ・・・」

「そのボロボロの体じゃ無理だろ。僕が言うてくる」

そう言うてカードケースをベルトに装着し、龍騎へと変身した。そしてそのままタイムベントのカードをセットした。

『タイムベント！』

カードを装填すると龍騎だけではなくディケイド、アビス、ディアードの姿も消えてしまった。

事件発生の数分前、トニーとデデデはテーブルで話をしていた。

「大王様、チーズケーキとお茶でございます」

「ご苦労・・・では話してくれぬかの、その怪物とや」『バシユウウウウウウン』『うわあああああつ！』ぬおつ！カービイ！？」

といきなりカービイが鏡の中から飛び出す。そして、

「どわあああああつ！」

「うひゃああああつ！」

と続いてネス、ジェフが飛び出した。

「ネスさん！？それとジェフも！」

といきなりネスとジェフが飛び出したのでトニーは驚く。

「カービー、なんでお主が……？」

「まあ……色々あってね」

とデデデ大王とカービーが話をしている最中、ネスは窓から応接室の下にある喫茶店を覗く。すると其処には右腕に水を纏わせてこつちを狙っている鎌田の姿があった。

「ふせる皆！」

「え……？どういうことじゃ？くわしk」さつさと伏せる！デブペンギン！」ぶべら！」

とネスに伏せるように言われ、何故かと問うデデデを踵落として沈め、無理やり伏せさせる。それと同時に鎌田は水で出来た刃を応接室に向かってブーメランカッターのように放った。

パリン、グサア！

「な……なんじゃあ！？」

水の刃はデデデが座っていた椅子に刺さっていた。ネスがデデデを蹴り倒していなければデデデは死んでいたであろう。

「これがデデデを殺した凶器……」

カービーは水の刃に触ろうとするが、水の刃はただの水になってしまい、辺りが濡れただけで何も残らなかった。確かにこれなら殺害しても凶器は残る筈もない。

「くっ！」

「逃がすかあ……！トニーに罪をなすりつけた罪、おもいしらせたりやあああああああああ……！」

と怒りの形相でジェフは応接室から飛び降り、逃げる鎌田を追う。そんなジェフをネスはやれやれといった感じで追うのだった。それとすれ違いにメタナイトが入って来て、中の慌てた状態をみて驚いていた。

「デデデ、この騒ぎは一体なんだ？」

「……メタナイト」

「！？カービー何でここに？」

メタナイトはカービーを見て驚く。

「おお、メタナイト丁度良い。実はのう・・・」

「メタナイトに話したい事があるんだよね！それって一体？！」

「・・・なんで知っているんだ？」

メタナイトはカービーが何故自分がデデデに呼ばれた事を知ってるのかが理解出来なかった。デデデも一瞬驚くが、すぐに笑った表情でメタナイトに向かって話す。

「そうじゃ、ワシがメタナイトを呼んだのはまた新しく出版社を立ち上げようかと思つての」

「・・・え？」

「はい？」

デデデの言つた事に啞然とするメタナイト。だが事情を知らないカービーはもつと啞然としていた。

その頃、城下町のはずれ、デデデ殺害に失敗した鎌田は逃げようとするが、ネスとジェフに追いつかれてしまう。

「貴方達は一体・・・、何故私の計画が・・・」

「何だはこつちのセリフだ！」

とジェフが怒鳴る。全くだ！とネスも言う。

「しかし、何だあれ？どう見ても人間業じゃねーぞ！」

とネスとジェフは鎌田を捕まえようと詰め寄る。その時だった。

ガシッ！

「見ましたね・・・」

「な・・・お前は！？」

ネスとジェフの後ろにもう一人の鎌田が2人の背中を強くつかんでいた。

「お前もタイムベントで後を追ってきたのか！？」

「そうですよ、私は人間のフリをして、それをデデデに気づかれそうになつて奴を殺しました・・・いや、殺したはずでした」

そう言うと鎌田は2人を吹き飛ばし、この時間の鎌田の前に立つ。

「貴方はいつたい・・・」

「貴方は私ですよ」

鎌田はこの時間の鎌田に手を翳す、すると、

「グ・・・ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

この時間の鎌田は断末魔をあげながら粒子となり、鎌田へと吸収されていった。

「なっ?!過去と現在の狭間が、一つに・・・!?!」

一人になった鎌田はライダーベルトを出現させ、ポケットからアビスのカードケースを取り出した。

「変身！」

鎌田はバツクルにケースをセットしてアビスに変身し、ケースから一枚のカードを取り出し左腕にあるアビスバイザーにセットした。

『アドベント』

電子音声と共にアビスの契約モンスターであるアビスハンマーとアビスラッシャーが二人に向かって襲い掛かってき、

「うおっ!何処へ連れて行く気だ?!」

「H A N A S E !」

二人はアビスハンマー達に抑えられ何処かへと連れて行かれた。

一方デデデ城。カービィとメタナイトは今までについてのことをデデデに聞かされていた。

「実はの・・・メタナイトに前の出版社を出るのを進めたのはワシなんじゃ」

「デデデが!?!どうして?」

と何故、当時の出版社の編集長であるデデデがメタナイトにそんなことを言ったのか、カービィは問いただが、代わりにメタナイトが言う。

「俺はあの時カービィの写真に嫉妬していた。どんなにいい記事を書いてもお前の写真に負けるような気がして、自分を見失っていた

んだ。そんな時デデデが俺に出版社を出てみればどうか、と言ってきたんだ」

メタナイトはデデデに進められ出版社を出た。それは裏切りなどではなく、自分を見つめ直す為に。メタナイトの真意を知り、カービイはかつて彼と共に取材していた時のことを思い出す。

「前の出版社を出て、やっと気づいた。俺だけの記事ではダメなんだ。カービイ・・・お前の写真があつて、初めて俺の記事が出来るんだって気づいたんだ」

「僕もさ！僕の写真だけじゃダメなんだよ。君が書いてくれる記事で僕はもつと高く飛べるんだ！」

メタナイトの素直な気持ちにカービイも素直な気持ちで答えた。そんな2人をデデデは満足そうに笑顔で見ていた。

「おお、そうじゃ。『週刊PPP』復活の記念に新しいネタを追ってるんじやが、この世界に人間じゃないものが紛れ込んである。秘書の鎌田もその一人じゃ」

「そうなんだ・・・ん？鎌田・・・？あつ！」

と鎌田の名前でネスとジェフがその鎌田と戦っているのを思い出した。

「こうしちゃいられない！ゴメン、ちょっと用事が出来たから！」

そう言うとカービイはワープスターを呼び出し、それに乗ってネス達を探しに向かった。

アビスにつれられたネスとジェフは、アビスハンマーたちの攻撃をかわしていた。

「ふふふ・・・ここはミラーワールドではない・・・ここで負ければ貴方達は死にますよ」

と、契約モンスター達に戦わせているアビスは余裕な感じでただ見物していた。

『グルオアアアアア！』

「うおわつと！なあ、ジェフ。何かアイツの弱点について知らない

か？」

「知らないよ！大体アイツ、原作に出てなかったし！原作に出てないなら知るわけないじゃないk『ぐおおおおおん！』うわあっ！」

ジェフの言う通り、アビスは原作の龍騎には登場していないライダー。なのでいくらオタク知識が豊富なことに定評のあるジェフでもアビスの弱点など分かる筈もなかった。

「チツ・・・このままじゃ負けちまう・・・ん？」

と何かの気配を感じネスは振り返ると、カービィがワープスターに乗って駆けつけてきた。

「うわああああああ！どいてどいてー！ー！ー！」

「うおっ！」

とネスとジェフはかわした、その先にはアビスモンスター達がいる。

『ガギ・・・』

『ギ・・・』

そのままアビスモンスターたちの真上に落ちていき・・・

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ！

『ギヤアアアアアアアアアアアアアア！！！』

撥ね飛ばした。そのままきりもみ回転しながら地面に叩きつけられるアビスモンスター2体だった。

「ああっ、ごめんなさい！」

と謝るカービィ。そこへネスがカービィに近寄る。

「その様子だと・・・吹っ切れたみたいだな」

「ん？・・・うん！」

とネスの声に気づきカービィは笑う。とそこへ、アビスがネス達に向かって言う。

「強いものがライダーファイトを征し判決を下す。これは貴方達が定めたことですね・・・ならば、この場で私が貴方達に死刑を申し渡ししよう！」

アビスはネス達に向かって死刑宣告をする。そんなカービィはアビ

スをにらみ言う。

「僕は一人で戦ってるわけじゃない」

「何を言うのかと思えば・・・、人間は所詮自分一人のために戦っているのですよ」

と鼻で笑うアビス。だがネスとジェフもカービィの後に続くように言う。

「まあな、お前の言うとおり、俺達は時に、自分一人の為に戦う時もある。けどな、この手で相手の手を握る事も出来るんだよ!」

「その時、僕らはどんなに愚かで弱くても・・・一人なんかじゃない!」

「そうだ、今は僕達がチームなんだ!」

そう言うと、ネスはディケイドライバーを、ジェフはディアドライバーを腰に装着し、カービィはライダーベルトを出現させる。

「変身!」

『カメンライドウ・・・』

『ディケイド!』

『ディアド!』

そしてディケイド、ディアド、龍騎に変身し、アビスに攻撃を開始する。アビスもいまだ気絶しているアビスモンスター達をたたき起こし、戦いに参加させた。

ガツ! ドゴ! バキイ!

アビスとディケイドの一騎討ちが始まりディケイドがアビスを押ししていく。

「くっ・・・強い・・・貴方は一体・・・?」

「通りすがりの仮面ライダーだ!・・・ん?」

ディケイドがいつもの決め台詞を言うと、ライドブッカーから三枚のカードが飛び出し、それをキャッチすると消えた龍騎のカードを含む三枚のカードの絵柄が戻っていった。

「おい、カービィ! こっからが本当の戦いだぜ!」

「うん!」

ディケイドと龍騎はそれぞれのアビスモンスター達に向かって攻撃していく。

「ふっ、少し優勢になったぐらいでいい気にならないで下さいね」

『ファイナルベント!』

アビスはアビスバイザーにファイナルベントのカードをセットすると、アビスモンスター達は川に飛び込み、一体の巨大な鯨型モンスターになり、ディケイド達に向かって一斉射撃を放ってきた。

「うわわっ!」

「グッ・・・!」

「チッ!」

吹っ飛ばされたディケイドは体勢を戻すと一枚のカードを取り出し、ディケイドライバーへとセットする。

「カービィ、ちよっとくすぐりたいぞ」

「え?」

『ファイナルフォームライドウ・・・リユリユリ龍騎!』

「うわっ!? 何だこれ!?!」

電子音声が響くと龍騎の両肩にドラグシールドが装着され、龍騎は突然の事に戸惑ってしまう。そしてアビスの合体モンスターによる砲撃が龍騎に向かって撃ち出され、ディケイドは龍騎の背中を押して砲撃をかわした。と同時に・・・

「な・・・!? これは・・・」

龍騎の身体が変化を始め、巨大な龍へと変わっていった。

「ひょえー・・・かつこいいー! よーし反撃開始だ!」

赤き紅蓮の龍、リユウキドラグレッダーへと変身した龍騎は合体モンスターに向かって反撃を開始した。

「ふうん・・・ネスも思ったよりやるな。僕もがんばらないと・・・ん?」

とディアードもライドブッカードからカードが飛び出す。そのカードを見ると紅いタンクトップの少年の絵柄が描かれていた。

「何だこれ?」

そう思いディアドライバーに装填する。

『ニコニコライドウ・・・K1!』

するとどうだろう、ディアドの姿は『ひぐらしのなく頃に』に出てくる主人公、まえはらけいいち前原圭一になったのだ。

「おお、ふつくしい」

と感想を漏らし、ディケイドたちの救援に向かい、走りながらカードをディアドライバーに装填する。

『アタックライドウ・・・バット!』

「おりゃあ!」

ゴン!

「グオオツ!」

D圭一の手にはバットが握られ、それでアビスを殴りつける。殴られたアビスは大きくよろめいた。

「ジェフ!? その姿はもしかして新しいカードが目覚めたのか?」
とディケイドはD圭一を見て言う。

「まあ、そんな所かな。さてアビスを倒そう!」

とD圭一はバットを握りなおし言う。

一方、上空ではドラグレッダーが合体モンスターと戦っており、ドラグレッダーは尻尾であるドラグセイバーで合体モンスターを真つ二つに切り裂いた。その時アビスモンスターは合体を解除し、アビスラッシャーがアビスハンマーをかばったため、アビスハンマーは無事な形で地上に降り立った。

「なっ! アビスラッシャーが!?!」

「契約モンスターが1体だけなら楽勝だね! ハア!」

とドラグレッダーは龍騎に戻り、ディケイド達と共にアビスを攻撃していく。追い詰められたアビスとアビスハンマーはただがむしやらに反撃しようとするが、結果は見えていた。そしてディケイドとD圭一はお互いのカードを装填する。

『ファイナルアタックライドウ・・・』

『ディディディディケイド!』

ケケケK1!

「ハアッ！」

「なっ……?!ぐはっ！」

電子音声と共に龍騎は再びドラグレッダーに変身して尻尾部分でアビスを吹っ飛ばした。そしてD圭一もバットを握りながらアビスハシマーに向かっていく。

「ウリヤアアアアアアアアアア！」

カキイイイイイイイイイイイイ
ン！！！！

グギヤアアアアアアアアアア！！！！

バットを振りかぶりD圭一はアビスハンマーを殴り飛ばした。そのままアビスハンマーは何百メートル先まで吹っ飛ばされ、大爆発を起こした。

そして、**ディケイド&龍騎組**も、

「行くよ！ネス！」

「おう！いつでもいいぜ！」

ディケイドは上空へ高くジャンプし、ドラグレッダーも付いていくように飛翔していく。そしてアビスに向かってディケイドがライダーキックの構えをすると、ドラグレッダーは後ろから火炎弾を発射し、ディケイドのキックを更に勢い付けた。

「つけえええええええええええええええつ!!!」

「ぐっ！ぐわあああああああああああつ！！」

ディケイドと龍騎の必殺技、ディケイドラグリーンをまともに喰らい
吹っ飛ばされ、爆裂四散するアビス。それを見て3人は変身を解い
た。だが・・・

「何だコイツ……そしてこの血は!？」

ネス達は驚愕した。何故なら、鎌田はあれほどの威力の技を喰らって生きていたのだ。それだけではない。鎌田から流れていた血は人間の赤いものではなく、黄緑色の薄気味悪い液体だった。そんな鎌田を見て後退りするネス達。そこへ……

「おいおい……ざまあねえな。ハートのカテゴリーKさんよお……」

・
ー

ブウウウウン！

歪みの壁が現れ、ある男が現れた。その男は浅黒い肌、黒いタンクトップと白いズボン。所々に金色のアクセサリーをつけており手には金色の杖を持っていた。そして何といてもその男の印象づけるものは顔に所々血管が浮き出ており、めっちゃキモかった。

「な・・・お前は・・・」

とジェフはその男の顔を見て驚愕の色を隠せなかった。

「ジェフ、知ってんのか？」

「ああ、こいつはマリク・イシュタール・・・、遊戯王に出てきた千年ロッドの所持者だ。多分気持ち悪い顔になっているのは闇人格が表に出ているんだと思う」

とジェフは男、マリクについて説明する。

「ほお・・・俺のことを知っているのか。ん？・・・ひょっとしてそれはデイクイドライバーとディアドライバー・・・そうか。お前がデイクイドとディアドなのか。もしそうならお前らを闇のゲームに誘いたいが・・・あいにく俺の任務はへまをしたこいつの回収なんでね・・・闇のゲームに誘うのはまた今度って奴だ」

そう言々とマリクの前に歪みの壁が現れる。

「待て！」

とネスは追いかけようとするがマリクは鎌田をつれ歪みの壁に入ってしまった。

その後・・・アビスとの戦いが終わり、出版社PPPの復活の知らせを受けたネス達は満足そうに自宅へ戻っていった。

自宅前では、マリオが意気揚々と自宅の玄関から出て行く姿が見えた。

「ヤッファー、ここが龍騎の世界か・・・がんばるぞ」もうこの世界での俺達の役割は終わった。さっさと行こうぜ」ってええー！
ー！何でお前ここにいるの！？部屋の中に入ってたはずじゃ・・・

・
」

といきなり終了宣言され、戸惑うマリオだった。

「あの・・・僕は・・・？」

トニーは龍騎の世界で取り残されてしまった・・・。

デイケイド一行を次に待ち受ける世界は一体何処なのか・・・待て
次回！

T H E N E X T S T A G E B L A D E ・ ・ ・

第11話 「龍騎編その3 本当の仲間、本当の絆」(後書き)

いかがだったでしょうか、龍騎編は。次回はブレイド編なのですが・
・、正直ブレイドに変身^{ヘン}するキャラを誰にするか考え中なので、
更新が遅くなりそうな気がします。
それでは(owo)ノシ

第12話「剣（ブレイド）編その1 オンデュルブレイドノ世界ナンデイスカー

最初に注意しておきます。かなり今回の世界はかなりカオスです。
それでもいいかたはどうぞ。

第12話「剣（ブレイド）編その1 オンデュルブレイドノ世界ナンデイスカー

龍騎の世界から次の世界にやってきたネス達はビルの窓から行われている戦いを双眼鏡を使い見ていた。

「うおおおおおっ！！！」

「はああああああっ！！！」

ガキーン！ドガツ！ザシュウ！

剣を持つ青いライダーと金髪の鎧を纏いし少女と共に連係プレーで一体の怪物を追い詰めていた。さらに他の所でも、

「いっけえ！！！」

ガンガンガンガン！！

「おりやああああ！連続サーブ！」

パコーン！！！！×100

と銃を持った赤いライダーはラケットを持った男と共に銃撃とボールでもう一体の怪物と戦っていた。

ネスは双眼鏡を下ろし、いまだシルエットだけのカードを見て言う。

「あいつがこの世界のライダー・・・ブレイドか」

「しかもブレイドと共に戦っていたあの鎧の女の子・・・確かあれは『F a t e / S t a y n i g h t 』に出てきたセイバー、もうひとりの赤いライダー、ギャレンと共に戦っていたのはニコ動でおなじみの松岡修造だったよね。おそらく、ブレイドとF a t e + αの世界がごちゃ混ぜになっているんだと思うよ」

とジェフは双眼鏡で見ながらセイバーとブレイド、そしてギャレンと修造の共闘を見ながら言う。

「ま、早いとこ目的を見つけてこの世界の危機も防がないとな」

「あのさ・・・ネスそんな服じゃ何言ったってしまりが無いと思うけど」

とポーラはネスの服装を見て突っ込む。

「まあ・・・確かにな・・・」

「服が服だからね・・・」

とマリオ、ルイージも同意する。現在のネスとポーラの服装はコック姿。それでもってジェフとプーは飲食店の従業員の服装である。そう言われるのも無理はない。

「うっさい、これがこの世界での俺らの役割なんだからしょうがないだろうが！」

とマリオに反論するネス。そこへ、

「チーフ！何やってるんですか！またサボって、副料理長もさっさと持ち場についてください！」

「ん？何だお前？俺は今いそが・・・うわ！何をする！？H A N A S E E！」

「あーれー」

とコックコート姿の少女に引つ張られネスとポーラは何処かへと連れて行かれた。その光景を残りの4人は呆然と見ていることしか出来なかった。

「なるほどな、俺とポーラはこの食堂のコックってことか？」

と先ほど自分を連れ出したコックの少女、間桐桜まきりさくらに問う。

「そうですよ。はい、これが社員証です」

と桜がネスとポーラにトランプのようなものを渡す。どうやらこれが社員証のようだ

「何だこれ？」

とネスは疑問符を浮かべる。

「うちの会社では社員のランクをトランプで表しています。最下位ランクの2から最高位ランクのAまで、それによって社内での扱いも変わってきます」

そう言いながら桜も社員証を見せた。彼女のランクはスペードの8である。

「成る程な・・・縦社会の会社ってやつか」

「でもなんでネスのランクが低いの？」

「さあ・・・さすがにそれは・・・」

と桜も首をかしげる。ポーラはネスが自分よりランクが低いことに疑問を抱いていたが、ネスはまんざら気にしている様子もなかったため気にせずロビーへと向かった。ネスはふと、中心部にある色々な者の写真が張られた三角形のコーンに気づく。

「何だこりゃ？」

「それは社員のランクを一目で分かる表です。上に上がれば上がる程、ランクが高いという事です」

「ふーん成る程な・・・ん？」

とネスはあることに気づく、スピード、クローバー、ダイヤ、此処までいいのだが、なぜかハートが存在していなかった。

「何でハートのマークがないんだ？」

「さあ・・・それも分からないんです」

と桜は再び首をかしげた。そして桜につれられるままネス達は自分達の職場である社員食堂へとたどり着いた。

「へー、ここがこの世界での俺の職場か・・・」

「それじゃあ中に入りましょう。どうぞ」

と桜に案内されネス達は社員食堂の中へと足を運んだ。ふと、ネスはあることに気づく。

「ところでさ、ランクしだいで会社での扱いも変わるって言ったよな。それって食堂の飯にも関係あるの？」

「まあそうですね、これを見てください」

とネスの問いに桜は3枚の写真を見せる。一枚目は何処かの高級料理に出そうなフルコースの料理、二枚目はファミレスなどで用意されてそうな料理、三枚目はめざし3本に少ないご飯、具の少ない薄そうな味噌汁これはひどい、と思いたくなるほど貧相な定食だった。桜はこの写真について説明する。

「この会社の食堂ではこういう風にランク毎にランチが変わるんです。これはAの社員が食べることが出来ます」

とフルコースの料理の写真を指差し、次はファミレスなどで用意さ

れてそんな普通の料理を指差す。

「副料理長のようなKやJのランクの社員にはこのノーマルランチですね」

「へー、じゃあそれ以下は？」

「聞かなくても分かるかもしれないですが・・・私達のようなランクが低い社員にはこのそれ以下ランチです」

と貧相な定食の写真を指差す。

「・・・・」

この酷すぎるランクごとの差別にポーラはあきれ果て、ネスはこんなランク制度を作った責任者をぶっ殺したい衝動に駆られていたのだった。

それから数十分後、社内ロビーでは一人の少年と先ほどの金髪の少女、セイバーとともに数十万はある札束を受け取っていた。

「よし、これで数ヶ月は生活が出来るな・・・、セイバーの食費とでもあるし・・・」

「しょうがないじゃないですか士郎、アンデットとの戦いは魔力が大幅に減るんです」

「多めに食うのはいつものことじゃないか」

セイバーの反論を少年、士郎は半眼で苦笑しながら突っ込む。そんなやり取りをジェフ、プー、マリオ、ルイージが見ていた。

「セイバーと共闘していたからまさかとは思ったが・・・やっぱりブレイドは衛宮士郎えみや しろうだったか」

とジェフがうなずく。でもよ、とマリオが口を挟む。

「あの大金があのお金髪女の食費って・・・どんだけ食うんだ？」

「ああ、セイバーはご飯を数十杯ぐらいは食べるんだ。正に騎士王ってやつだな」

とジェフは士郎のパートナーであるセイバーの説明をする。

「す・・・数十杯って・・・」

ルイージは彼女の凄すぎる食欲にあきれ果てていた。そこへ・・・

「現代に蘇ったアンデッドを封印する会社、BOARDのエース社員らしいな。つまり、士郎は仕事でライダーをやっているという事だな」

と社員食堂から戻ってきたネスとポーラがジェフたちと合流する。

「あれ？ネス何処に行ってたのさ」

「この世界での俺とポーラの職場にな、しかし納得できないな、仕事でライダーをやるといのは」

とネスはこの世界のライダーの位置づけに納得いかなかった。そうよね、とポーラもうなずく

「これじゃあブレイドじゃなくて仮面ライダーリーマンよ」

「何？仮面ライダーリーマンブラザーズ？」

「いやそのリーマンじゃなくてサラリーマンの方な」

とプーのボケにマリオが突っ込む。そこへ、

『アンデッド出現、アンデッド出現、BOARDの社員は一丸となつてアンデッドを封印してください』

「アンデッド！？行こうセイバー！」

「ええ、わかりました士郎」

社内放送が流れ、士郎とセイバーは会社の外に飛び出していった。

「アンデッドか・・・んじゃ、俺達も行きますか」

ネスも士郎の後を追いかけて会社を飛び出した。

会社近くの廃墟

そこでは、すでに赤い服にミニスカートの少女とそのサーヴァントである松岡修造に加え、銀髪の少女と巨大な大男が3体のアンデッドと戦っていた。廃墟の物陰に隠れ、3人の少女がパソコンを使いアンデッドの情報を調べている。そこへ士郎とセイバーがやってきた。

「如月！アンデッドは！？」

と士郎は近くに居た少女、如月千早に問う。

「この奥だよ。今、遠坂さんと修造さん、それにイリヤとバーサー

カーが戦っているわ」

「そうか、分かった。三浦さん！ブレイバツクルを！」

「わかりました！はい！」

と士郎はもう一人のオペレーターの少女、三浦あずさみづらから箱のようなもの―ブレイバツクル―を渡される。士郎はありがとう、とあずさに礼を言々とカードを一枚セツトし、現在アンデットと戦っている遠坂凜とあさかりんとイリヤの元に向かう。

「ちよつと士郎！セイバー！遅いじゃない！」

と凜は士郎に怒鳴る。それを士郎はゴメンゴメンと謝っていた。

「衛宮、遠坂、イリヤ！変身許可が降りたみたいだ」

と凜のサーヴァントである修造が、変身許可のシグナルをキャッチし、それを3人に報告する。

「分かりました修造さん！行くぞ、遠坂、イリヤ！」

「OK」

その掛け声と共に士郎、凜、イリヤは、バツクルを装着しポーズを構え、

「変身！！！！」

「ターンアップ！」

「オープンアップ！」

掛け声と共にバツクルのレバーを引くと電子音が響いた。それと同時に3人の前に巨大なオーラが現れ、それを3人は潜り抜ける。士郎はブレイドに、凜はギャレンに、イリヤは蜘蛛をモチーフとした仮面ライダー、レンゲルへと変身し、サーヴァント達と共にアンデッドと戦う。ブレイド達のサーヴァントも加え、6対3なので勝負は見えておりたちまちアンデッド達は追い詰められていく。

「うおおおっ！」

「はああっ！！！」

ガギイ！ズバア！

「ギギッ！」

ブレイドとセイバーのコンビネーション斬撃に大きくよろけるアン

デッド。

「士郎、止めを！」

「ああ」

セイバーの言葉にブレイドはうなずくとアンデッドが封印されているカード、『ラウズカード』を取り出し手に持っている剣『ブレイラウザー』に通す。

『キック』

『サンダー』

『ライトニングブラスト！』

「ハアア！ドリヤアアアアアアアアア！！！」

ブレイラウザーの電子音と共に、ブレイドは飛翔、そのままアンデッドに電撃を纏ったとび蹴りを喰らわせる。

『ギユアアアアアアアッ！！！』

蹴りがアンデッドに決まり、一匹が倒れた。そして、

「いつけえええええええええっ！」

「うおりゃあああああああああ！！！」

ガアンガアン！ズドオン！

『ギヤアアアアアアアアアッ！！！！』

ギャレンの銃撃で足止めを食らわされ、修造のスマッシュが別の一匹のアンデッドの腹に直撃し、二匹目が倒れた。

ガシッ！

『ギギッ！？』

「グオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

最後の一匹のアンデッドがバーサーカーに捕まり持ち上げられた。

アンデッドは「H A N A S E！」と言いたそうにもがくがバーサーカーは離す気配はない。

「ありがと、バーサーカー。行くわよ！」

レンゲルはそう言つと2枚のカードを取り出しそれを持っている杖『レンゲルラウザー』へとスラッシュする。

『バイト』

逃げ続けていた春香だが、石につまずきこけてしまった。その隙をアンデッド達は逃さず一気に襲い掛かるうとする。

（ああ・・・もうだめば）

とあきらめかけたその時だった。

「うおおっ！！！」

とブレイドがアンデッドの一匹にとび蹴りをかます。

「衛宮君！」

「天海、大丈夫か！？ここは俺に任せて早くにg・・・って多ッ！」
ブレイドは春香に逃げるように促すが、自分がおかれている状況を知り硬直する。なぜなら・・・相手は八体、ゴリラ型のアンデッドやゾウ型のアンデッドなど強そうなアンデッド揃い。こっちは孤立無援であつたからだ。

（どうする士郎！？とりあえず遠坂達が来るのを待つか・・・、それとも天海を連れて逃げるか・・・、それとも玉砕覚悟で突撃するか・・・）

などと考えていたその時だった。

「やっぱり追いかけてよかったな、おいアンタ。大丈夫か？」

とネス達がグッドタイミングで到着した。ネスはブレイドに声をかける。

「え？あんた・・・BOARDの社員なのか？」

とブレイドは訳が分からず動揺する。

「まあ、そう言うことになる。行くぜ、マリオ、ジェフ！」

ネスはデイケイドライバーを腰に装着し、マリオとジェフに言う。

「おう、いつでも良いぜ！」

「僕もいつだってかまわないよ」

とそう言うマリオはアーケルを出現させ、ジェフはディアードライバーを装着した。

「・・・変身！・・・」

『カメンライドウ・・・』

『デイケイド』

『ディアード』

「行くぜ、野郎共お！」

「OK、ネス。全速全身DA！」

「イイヤツフウウツフウウウウ！……久々にクウガに変身したぜ！たつぷりと暴れたるけえのお！」

ベルトの電子音と共にネスはディケイド、ジェフはディアードへと変身し、マリオはクウガへと変身してアンデッドと戦う。ディケイド達の乱入によりアンデッド達は次第に追い詰められていく。

「新しい調理方法だぜ！」

とディケイドはカードを取り出し、それをディケイドライバーに装填させる。

『カメンライドウ……龍騎！』

電子音と共にディケイドは龍騎へと姿を変える。

「僕だつて！」

そう言うところでもカードを取り出してそれをディアードライバーに装填した。

『ニコニコライドウ……K1！』

電子音と共にディアードも圭一へと姿を変えたのだった。

「ちょ……土郎……これ何がどうなっているのよ！説明しなさい！」

あつけに取られていたブレイドが後ろから声をかけられ振り向くとギャレン達が居た。

「いや……俺にも何が何だかさっぱり……ってか遠坂達いつからいたの？」

「さっき来たばかりだ。しかし何だ、あのライダー……新しいライダーシステムか何かかな」

と修造がブレイドの問いに代わりに答え、ディケイド達の戦いを見て感心している。

「イヤツフウ！」

とクウガは徒手空拳でアンデッドを殴ったり蹴ったりしている。そ

こへ後ろからゴリラのアンデッドが拳を振り上げ向かってきた。

「むっ！ルイージバリアー！」

「ぎゃああああああああああ！久々にキター！」

とつさにルイージを盾にしゴリラアンデッドの攻撃を防いだ。

「ちょ！？民間人を盾に！？あなた何やってるんですか！？」

とセイバーがクウガの行動に抗議する。

「ん？民間人ってコイツ？心配ねーよ。コイツ俺の弟だし」

「あ、成る程弟でしたか。それなら心配要りませんね」

「「いやおかしいだろ！？弟を盾に使うの！つかセイバー納得するなよ！」」

と納得をするセイバーにブレイドとギャレンが突っ込む。

「うむ！兄を守るため弟が身代わりに・・・何と言う兄弟愛！」

「いやアレ思い切り弟盾にしてたよ！？」

とうなずく修造にレンゲルが突っ込んだ。

そんなこんなしているうちに決着はついた。

「よっしゃ、焼き加減はウエルダンDA」

そう言うのとD龍騎はカードを取り出し装填した。

『アタックライドウ・・・ストライクベント！』

電子音声と共にD龍騎の右腕にドラグレッダーの頭部が装着され、

D龍騎はアンデッドに向かってドラグレッダーの口を向けた。

「くたばれ！」

ゴオオオオオオオッ！

『わっっちゃああああああああああああああああ！！！！』

D龍騎がそう叫んだ瞬間、ドラグレッダーの口から炎が吐かれ、多くのアンデッドを呑み込んだ。そのアンデッドは熱さにのた打ち回りやがて墨と化した。

一方D圭一は・・・

「ウッディ！ウッディ！ウッディ！ウッディ！うdd（ry）」

とアンデッドの一体に馬乗りになって奇声を上げながらバットで殴り続けていた。そしてアンデッドから飛び降りると、

「ウツデイ！」

と思い切りアンデッドを殴り飛ばす。アンデッドは空高く宙を舞う
としばらくして爆発を起こす。

そして最後はクウガが戦っているゴリラアンデッドだけとなった。

「ルイージアレ行くぜ！」

とルイージの服の襟をつかみ言う。

「アレ？」

とルイージは聞き返すがクウガは返事代わりにルイージをゴリラア
ンデッドに向かって投げた。

「うわあああああああああああああ！！！」

「ぴよっ！」

シユタ！

そして同時に走り出し、どこぞの桃。白の如くルイージの背に飛び
乗り、ルイージに足の封印エネルギーを注入する。そして、

コキーーーーー！

『アッー！』

ルイージの頭はゴリラアンデッドの股間のナウい息子に当たった。

そしてそこから封印エネルギーが流れ込み爆発する。

「おゝい、皆お疲れ」

その爆発を背にかっこよく着地したクウガと自らの頭を股間にうず
めてしまったシヨックでorz↑このような状態になっているルイ
ージの元へ戦いを終えたディケイドとディアードがやってきた。

そこへ、

「アンデッドを封印しないで倒すなんて・・・」

「あんた達一体・・・」

とブレイドとギャレンが変身を解き、士郎と凜が同じく変身を解い
たネスに近づく。

「ただのコックだ。会社の食堂のな」

「ひょっとして君達、派遣されたライダーか？ランクは」

と修造がネス達にランクを聞く。

「ん？まあスペードの2だな」

「俺はダイヤの2だ」

「僕はクローバーの2」

とネス、マリオ、ジェフは社員証を修造達に見せる。

「そうですか・・・、士郎を助けていただきありがとうございます。お礼にと言っではなんですが、この件をヴェルタース社長に報告して昇格してもらうように・・・」

「あーそいつは結構だ。あいつを助けたのは別に理由なんか無いし、大体俺はサラリーマンに興味はないからな」

セイバーのセリフを遮りとネスは断ると、行くぞ、とジェフ達を促し去っていった。

ネス達の背中を見て、ふと士郎は気づいたことをセイバーに問う。

「そう言えば、俺が天海を助けるときほったらかしにしていたアンデッドは？」

「あのアンデッドでしたら凜達が封印しました」

「そっか・・・、もう日が暮れるし、帰ろうか皆」

そう言くと士郎達も帰っていった。この時、誰も知らなかったB O A R D 社に渦巻くどす黒い陰謀にネス達はもちろん士郎達も巻き込まれることになることを・・・

続く・・・。

第12話「剣(ブレイド)編その1 オンデュルブレイドノ世界ナンデイスカー

多分剣編は3話ぐらいだと思います。
ブレイド

次回はドナルドと肩を並べるあのお爺さん(と言つ名の魔王)が登場します・・・BOARDの社長役で。それでは(owo)ノシ

第13話「剣(ブレイド)編 士朗達が降格！？ウソダンドコードン……！」

初めに言っておきます。戦闘シーンがないです。戦闘シーンは次回
ということ。

それではディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ始まります。

翌日、BOARD社長室。そこではルイージとポーラが社長のヴェルタースと対談をしていた。ヴェルタースはミルクキャンディー『ヴェルタースオリジナル』の袋をいじりながら言う。

「つまり、この世界に危機が訪れているから我々BOARDに力を貸してほしいと？」

「はい、この世界を救う為にも、ライダーの力がどうしても必要なのです」

「ですからお願いします、力を貸して下さい！」

ルイージとポーラはヴェルタースに頭を下げ懇願する。それに対しヴェルタースは、ふむ……と考え込み、結論を下す。

「あなた方の話はわかりました。協力をしましょう」

ヴェルタースが承諾してくれたことによりポーラとルイージは「よっしゃ！」とガッツポーズをする。だが、ヴェルタースの話はまだ終了してはいなかった。

「ただし……今度からあなた方は三谷サイダーキャンディーだのそう言う邪道な他のキャンディーではなく、このヴェルタース・オリジナルを舐めるようにしなさい」

「何故に……!?」

ヴェルタースが突然出した謎の条件に目を丸くしながら言うルイージとポーラ。

「何故って……BOARDの社員の皆さんはこのヴェルタース・オリジナルを舐めているのですよ？協力するくらいならそれ位当然でしょう。何故なら彼らも貴方達も特別な存在なのですから」

とヴェルタースの謎の論理に呆然とするポーラとジェフ。とそこへネス、ジェフ、マリオ、土郎、凜、イリヤ、千早、あずさ、春香がドアを開け出てくる。（ちなみにセイバー達サーヴァントはお留守番です）

「兄さん!？」

「ネス、どうしてここに？」

「どうしたもこうしたも社長に呼ばれたんだよ」

とネスはやれやれといった感じで頭をかく。

「ええ、私が呼びました。何故なら彼らに話があるからです。不景気の影響で国からの予算が引かれ衛宮君と遠坂君、そしてイリヤ君は大変身勝手な行為をし会社に損害を与えました。それに相成ってヴェルタース・オリジナルが最近売上が伸びないのでその八つ当たり・・・じゃなかった責任を伴ってあなた方をAからFへと降格となります」

「ちよつと待つて下さい！俺が全部悪いのに・・・何で遠坂やイリヤまで!??っていうか今、八つ当たりって言おうかしたたる!？」

「それに、士郎は天海さんを助けるためにしただけなのに降格だなんてあんまりだわ!」

「そうです！普通足を引つ張った天海さんが降格されるべきです!」と士郎、凜、イリヤはヴェルタースが下した降格処分に反論する。

何気にイリヤが酷いことを言ったような気がしたが気にしてはいけない。ヴェルタースはキャンディーを口に含みながら言う。

「会議で決定したことです。野良犬に噛まれたと思って受け入れなさい。あと、春香君、あずさ君、千早君はAへと昇格、ブレイド、ギャレン、レンゲルの予備^{スベア}として働いてもらおう」

「え・・・!? ホントですか！ありがとうございます！（やった〜）」

「・・・ありがとうございます。（春香のせいで降格になった衛宮君たちのことを考えると素直には喜べないわね・・・）」

と春香は素直に喜び、あずさと千早は士郎達に対して後ろめたさを感じていた。一方・・・士郎達は春香を助けたせいで降格となり悔しがっていた。

「そして新入社員にも関わらずいい働きを見せてくれたネス君、ジエフ君、マリオ君は2からKに昇格です」

ヴェルタースの昇格宣言に対し、ネス達は全く喜んでいなかった。まあ彼らは会社の制度そのものが気に食わなかったからである。まあ・・・仕方ないね。

「話は以上です。あと、衛宮君達の新たな職場ですが・・・」

ヴェルタースはそう言って士郎達に新しい職場を提供する、その職場とは・・・

30分後・・・社内食堂の厨房

「今日からここで働かせていただく衛宮士郎です。よろしくお願いします」

「同じく遠坂凜です」

「同じくイリヤです」

「セイバーです」

「松岡修造です」

「ガウ・・・」

士郎達の新しい職場とはネスがチーフを務める社内食堂の厨房だった。先ほどまで私服だった士郎達はコックコートに着替えさせられていた。もちろん、セイバー達も例外ではない。バーサーカーは服のサイズがまったくないので白い前掛けをつけているだけである。

士郎とイリヤは納得しているが、凜は納得できずふてくされていた。

「ああ、よろしくな。早速だが仕事だ。士郎とイリヤ、セイバーと修造は皿洗い。凜とバーサーカーは野菜の皮むきだ」

「ちよっと！何でギャレンとして戦ってきた私がそんなこと・・・

「しょうがないだろ？俺はK。お前は7。俺達の言う事を聞くのは当たり前だぜ」・・・」

反論しようとする凜だがネスに社員証を突きつけられ黙りこくってしまう。

「まあ、君の気持ちもわからなくはないけど・・・とりあえずここでの責任者はネスだから、ネスの指示に従って・・・ね。とりあえず頑張ってまたAにのし上がればいいじゃない」

とポーラに説得され、凜はうなだれた感じで「わかった・・・」と
うなずく。

「よっしゃ、それじゃあ仕事をはじめつか。各員持ち場に着け！ラ
ンチの準備をするぜ！」

「・・・はい、チーフ！」「・・・」

厨房にいた桜をはじめとするコック達はネスの言われたとおり持ち
場に着いた。

一方、社員食堂の客席では、

「・・・お待ちせしましたああああああああ！ノーマル
ランチでえええっす！！！！」「・・・」

マリオ、ルイージ、プー、ジェフが接客をしていた。しかも板前ス
タイルで。4人は某アニメ店長のような迫力で社員にランチを渡す。

「あ、ありがとうございます・・・（こ・・・怖ええ・・・）」

彼らの剣幕に多少ビビりながらランチを受け取る社員たちであった。

ところは戻り厨房内、この場所は今戦場と化していた。ランチの為
に次々と調理をしていくコック達。そんな中、桜はソースの入った
鍋をネスの方へ持っていく。

「チーフ、ソースの味を見てください」

「よし、任せろ！」

ネスはそういうと胸ポケットからスプーンを取り出しソースを舐め、
感想を述べる。

「・・・味付けがいまいちな。もう少しケチャップと胡椒をワン
シヨット、隠し味に辛味噌を小さじ1杯DA！」

「はい！」

ネスは桜にアドバイスした後、すぐ別の場所へと向かっていく。反
対方向では、ポーラがそれ以下ランチの味噌汁を味見させようと桜
の方へ寄って行く。

「桜ちゃん、ちょっとこれ味見してみて？」

「はい、わかりました」

そう言つて桜は味見皿に入つた味噌汁を口に含む。

「あれ・・・これおいしい！これ、どうやって作つたんですか!？」

「ふっふっふ・・・実はね、松茸を出しに使つたのよ!」

「松茸!？そんなものどうやって・・・」

「ああ、大丈夫。会社の予算使つてないから、友達の財産をちよつとね」

とポーラはウインクした。もちろん友達の財産とはプーの財産のことであるが・・・（笑）

その隅っこでは、士朗、イリヤ、修造、セイバーが皿洗いをし、凜、バーサーカーが野菜の皮をむいていた。そこへネスがAランチを持つてやつてくる。

「すまない、士朗かイリヤか凜か・・・三人のどつちかでもいいからこれをAのランチを運んでいってくれないか？他の奴等も手が放せなくて行けねえんだが。頼むな」

「ああ、それなら俺が」士朗ばかりに任せられないわ！私が行きます!」・・・あつ・・・おい、遠坂・・・行っちゃったよ」

士朗が請け負い行こうとしたが凜にひつたくられ、立ち尽くすのであつた。

凜はAランチを春香、あずさ、千早のもとへ届ける。

「お待たせしました、Aランチです」

「あ、凜ちゃん。ありがとう」

「ありがとう、悪いわね。凜」

とあずさと千早はいつもと変わらない感じで接する。だが、春香は違つていた。

「あら、遅かつたじゃない」

春香は明らかに上から目線での物言いであつた。その発言に対し千早は「春香ッ!」と彼女をいさめるが春香は悪びれた様子も見せない。凜も春香の態度に少しいらだちながらも春香にAランチを渡そ

うとする。その時、

「うおおおおおおおっ！かしこまりました！今、ヴェルター社長のAランチを持ってきまあああああす！！！」

ともう突進でプーが走っていく、その軌道には凜がいた。

ドン！

「きゃあ！」

「おい！」

そのまま、プーと凜がぶつかってしまいAランチが宙に舞う。そしてそのまま春香の上に直撃した。その光景を見て凜は真っ青となる。一方の春香は怒りのあまり顔を真っ赤にしていた。

「凜・・・あんた！何してくれんのよ！！せつかくのお気に入り
の服が台無しじゃない！」

「ご・・・ごめん、春香・・・今のはわざとじゃ・・・」

「うるさいっ！このことは社長に報告するから、そのつもりでい
なさい！」

必死に凜は謝るが、春香は全く許そうとはしなかった。

「ちよっと、春香！凜ちゃんだってこんなに謝ってるじゃない！社
長に報告だなんてあんまりだわ！」

と千早が春香に反論するも春香は無視し足早に去っていく。

「おい・・・どうしたんだ？」

と訳が分からずプーが問いかける。

「あんたのせいで・・・あんたのせいでええええええええええええ
ええっ！」

「へ・・・ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

凜は鬼のような形相でプーにつかみかかりコブラツイストを極める。
もちろん、しばらくして騒ぎを聞きつけたネスと士朗に羽交い絞め
にされたことは言うまでもない。

一時間後・・・凜はヴェルターズに社長室に呼ばれていた。もちろ
ん、それは先程の件（春香にAランチをぶちまけたことと、プーに

暴力行為を行ったこと）である。

「えー、君を7から最下位の2へと落とします。さてギャレンバックルを出しなさい」

「ちよつと待ってください！なんで！？」

「早くしなさい！」

凜は反論するが、ヴェルタースに怒鳴られしぶしぶギャレンバックルを出す。

「今日限り君をギャレンの資格をはく奪します。異論はありませんね？」

そう言つて、デスクに置かれたギャレンバックルに手を伸ばす。その時だった。

「待ってください！」

と社長室から士朗が出てくる。

「何ですか？士朗君」

「遠坂のギャレンはく奪を待ってくれませんか！？納得できないんです。遠坂とは今まで数多くのアンデッドを封印してきました・・・でも、あんな事で剥奪だなんて！あの暴力事件も、天海の件も、あのハゲの人が悪いんですし・・・もう一度、もう一度だけ遠坂にチャンスを下さい！」

そう言つて士朗は頭を下げる。

「・・・もし、それで会社の調和が乱れたらどうするつもりだね？」

「その時は・・・、俺もブレイドの資格をはく奪されてもかまいません！では！」

士朗はそういうとギャレンバックルを取り、凜に渡した後、社長室を後にした。

「ちよ、ちよつと待ってよ！士朗！」

そういうと凜も士朗の後を追ひ、社長室を出ていく。その背中をヴェルタースは忌々しげに見つめていた・・・。

一方、BOARDの裏側では・・・

龍騎の世界に現れた、マリクと鎌田がいた。

「ディケイドは社員食堂で足止めを食らっているみたいだな」

「ええ・・・そのようですね。・・・む？」

♪♪♪♪♪（↑ガンダム00の主題歌）

と着信音が鳴り鎌田は携帯を手に取り、鎌田は何者かと話し始める。

「・・・分かりました。ブレイドとギャレンを迎え討ちましょう」

「ん？どうしたよ」

とマリクは鎌田に問う。

「ええ、正義の味方気取りの馬鹿と女に焼を入れてこいと、カリスから連絡が」

と鎌田は携帯をポケットに入れマリクに答えた。

「・・・ふーん、でも大丈夫か？もしかしたらディケイドも来るかもしれないねえ、一回ディケイドに負けたお前にやれるのか？」

「ふ・・・私も舐められたものですね。2度も負けはしませんよ」

あざ笑うように笑うマリクに鎌田も鼻で笑いながら言い返す。

「来るなら来なさい・・・ディケイド。この世界での実験は邪魔はさせませんよ。ライダーとアンデッドが手を組み、世界の統率者となるための実験はねえ・・・ククク・・・」

と虚空を見上げ、含み笑いをする鎌田。カリスとは何なのか？そして士朗と凜の運命はいかに！？

続く・・・

第13話「剣（ブレイド）編 士朗達が降格！？ウソダンドコードンー！ー！」

なんかこの小説・・・カオス度が増しているような気がする。
でもそんなの関係ねえ！（小島よ。お風に）

それとキバーラの出番がまったく言っていないほどないような気がするよ・・・。まあ一応キバーラも話に加わらせよう・・・と思っています。

次回もお楽しみにそれでは（owo）ノシ

第14話「剣（ブレイド）編その3 運命を切り開く刃 前編」（前書き）

すいませんでした黒飛蝗の次の展開を考えるので忙しかったため更新が遅くなりました。

それではディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ。始まります。

第14話「剣（ブレイド）編その3 運命を切り開く刃 前編」

廃れた広場、そこに士朗と凜はいた。この広場ではアンデッドが出やすいという噂があるのでそこに出るアンデッドを封印して、凜のギャレンバックルはく奪を阻止するためである。

士朗たちがアンデッドを待っていると、カツカツカツ……

足音がして士朗が振り向くとそこにはネス、ジェフ、マリオがいた。「チーフ……ジェフさんにマリオさん、どうしてここへ？」

士朗の問いにネスは半分あきれた表情で答える。

「なんでって……お前を追いかけて来たにきまつてるだろ。食堂の仕事をしないで何やってんだ？お前等」

「アンデッドを封印して遠坂のギャレンはく奪を阻止するためですよ」

士朗の答えに凜はそうよ！と賛同する。

「私達の邪魔をしないで！っていうかあんたたちには関係ないですよ！」

「関係ないことはないぜ。お前等はもう……あ！おい待て！」
ネスは士朗と凜に何かを伝えようとするが、凜が最後まで聞こうとせず、士朗の腕を引っ張りどこかへ行こうとしていた。その時だった。

「やはりここにいましたか……、その小娘が持っているギャレンバックルをこちらによこしなさい。ブレイドの資格者よ」

突如、士朗達の目の前に鎌田が現れ、士朗に凜の持っているギャレンバックルをよこすように催促する。ふと鎌田はネスに気がつき声をかけた。

「おや、誰かと思えばディケイドと雑魚2匹もここにいましたか。ここで龍騎の世界での復讐リベンジをしたいのは山々ですが、あいにく今回の目的はあなた方ではありません。この小娘のギャレンバックルを

達は何が起こった！？と言いたげな感じで砲撃が放たれた方を見ると、そこには刃のついた弓を持った、ハートを模した赤い瞳の黒きライダーが居た。そのライダーを見た士朗は呟く。

「あれは伝説のライダー、カリス・・・何故ココに？」

そのライダー、カリスはなにも言わず凜に向かってに駆け出すと、引ったくりがバッグを盗むような要領で彼女が持っていたギャレンバツクルを奪った。

「キャッ！」

その弾みで凜は転んでしまう。

「遠坂！？くっそお！変身！」

『ターンアップ！』

凜がギャレンバツクルを奪われたのを見るや士朗は激昂しブレイドに変身しカリスに向かって走り出しブレイラウザーを振るう。だが、ブンブンブン！ガッ！

ズドドドドドッ！

「グハアアアアアアアッ！！！」

攻撃はことごとくかわされ、何発ものパンチを叩き込まれ、吹っ飛ばされてしまい、その拍子にブレイドの変身が解けてしまった。

「全く・・・この小娘をかばわずじつとしていれば良いものを」

カリスはそう呟きながら士朗に近づいていく。どうやらブレイバツクルも奪うつもりらしい。とそこへネスが立ちふさがった。

「あんた、BOARDのライダーか？」

「・・・貴様がネスと言う破壊者か？」

「おい、質問を質問で返せって国語の授業で習ったか？まあいいや、とにかくお前の事、全部話してもらうぜ。ハートのライダーさん」
ネスはそう言うと言いかけてドライバーを腰に装着し、カードを装填させる。

『カメンライドウ・・・デイクイド！』

電子音と共にネスはデイクイドに変身し、ライドブッカーを構え、カリスは醒弓カリスアローを構え互いに衝突しあっていく。

それを見たジェフとマリオはディケイドに加勢すべく、ジェフはディアードへ、マリオはクウガに変身する。だが、

「待ちなさい、貴方達の相手は私です」

鎌田はそう言つて本来の姿、パラドキサアンデッド（以下Pアンデッド）となりディアードとクウガの前に立ちふさがる。それと同時に取り逃がしたアンデッドも敵の増援として現れた。

「ん・・・？パラドキサアンデッド・・・お前まさか、龍騎の世界で倒し損ねたあのサメライダーか！？」

「やつと思ひ出しましたか・・・」

ディアードとPアンデッドは取っ組み合いながらそんな会話をしていた。

一方その頃、騒ぎを聞きつけ、イリヤとブレイド組みのサーヴァント達が広場にやって来た。そして凜、士朗が気絶していることに気がつく。

「士朗お兄ちゃん！凜！今助けるよ」

とレンゲルバツクルを装着し駆け寄ろうとしたが、カリスがそれにいち早く気がつく。

「させん！」

カリスは腰にあるホルダーから一枚のラウズカードを取り出しカリスアローにスライドさせた。

『バイオ』

音声になるとカリスの弓、カリスアローからツタのような物が伸び、イリヤに巻きついた。

「きゃっ！何この恥ずかしい縛り方！？」

その縛り方はどう見ても亀甲縛りです。ありがとうございます（ry
「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

イリヤがやられたことにバーサーカーが怒り、カリスを持っていた得物で叩き斬ろうと迫るがカリスが早かった。

『ドリル』

『トルネード』

ンデッドもいつの間にか姿を消してしまっていた。

「ちっ、逃げられたか・・・」

とディケイドは舌打ちをしながら毒づく。そうだね、とディアドはうなずき、先ほどの2人組み（轟鬼とカズヤです）のことを考える。

「しかし、何であの二人がいきなり現れたんだろう。ひょっとして・・・パンチホッパーやキックホッパー達と同じなのかな・・・」

「んなことより、さっさと士朗達を起こそうぜ」

とクウガはディケイド達に士朗を起こすように言う。ディケイド達は変身を解き、士朗達の元へと向かった。その時、彼らは気づいていなかった。草むらからディケイド達を見ていた集団がいたことを。

社長室

そこではネス、ジェフ、マリオ、士朗、凜、イリヤとサーヴァント組に加え、春香、あずさ、千早が呼ばれていた。理由は、言うまでもない。

「イリヤ君、あなたはランク7から2に降格及びレンゲルの刺客剥奪、レンゲルの資格は正式に千早君に譲りましょう。それと・・・春香君はブレイドの資格を、あずさ君にはギャレンバックルが戻り次第、ギャレンの資格を正式に譲ります。それと春香君はAチームの隊長として働いてもらいますよ」

「えっ！本当ですか！？ありがとうございます！」

とAチームの隊長に任命された春香は大喜びだったが、あずさと千早は素直に喜べないようである。まあ元はいえは春香の所為なんだけどね。一方、イリヤはレンゲルの資格を剥奪されたことでシヨツクで放心状態になっていた。

「あの・・・社長。私と士朗は・・・」

「もちろんクビです。もちろん、貴方達のサーヴァントもですよ。理由はわかってますね」

ヴェルターズは士朗と凜をにらみクビと告げる。士朗は深くため息

をつくと「失礼しました」ときびすを返して社長室を出て行った。それに続けて凜も士朗の後を追った。

社員食堂の着替え室、ここでは士朗は途方に暮れ、凜は自分の荷物をまとめていた。そこへ、ネスとポーラ、プーがやってくる。

「よう、どうした？」

「いえ、チーフ・・・別に・・・これからどうしようかな。と思いますして」

とため息をつきながら士朗はネスの問いに答える。

「んで、どうするんだ？この短気女と一緒にココを出て行くのか？」

ネスの言葉に凜が「誰が、短気女よ！」と詰め寄ったがあえてスル―した。

「まあ、クビになったんですから仕方ないですよ。どこか再就職先でも探しな」そうか、所詮お前もその程度の男なんだな。正義の味方が聞いて呆れる「あんたに俺の何がわかるんですか？」

士朗の言葉に凜はそうよ！と言う。

「アンタなんか私達の気持ちが解るわけないわ！」

「ああ、解りたくもねーよ。たかがランクだろうが。そんなにラン―クが欲しいなら俺がつけてやろうか？ほら」

そう言っでネスは士朗と凜の社員証にマジックで何かを書いてそれを渡す。その社員証には・・・0と描かれていた。

「・・・何よこれ！アンタふざけてんの！士朗も何か言いなさいよ！」

と凜は怒りを爆発してネスに突っかかる。だが、士朗は何か気づいたようである。

「この0って・・・意味はもしかして」

士朗の思惑を読んだのだろう。ネスはそうだ。と答える。

「この単細胞女にはわからないかもしれないが、俺はお前らを馬鹿にしたわけでもふざけている訳でもない。お前は全てを失ったんだ。ブレイドとギャレンの資格も、社内での地位も！だからこそ0から

やり直すんだ。また新しいお前達のそれぞれの道を」

「0から・・・」

「やり直す・・・」

と士朗と凜は社員証を見ながら呟く。0の意味。それは今までの自分が終わり、新しい自分へのスタートラインだということを、

「うん！0からやり直す。いい響きだ！」

「そうですね、修造」

「うわっ！セイバーに修造！どうしてここに！？」

と後ろから声がしたので振り返ってみるとそこにはセイバーと修造がいた。

「もちろん、私はシロウのサーヴァントですから。シロウ、クビにめめげず頑張れば良いじゃないですか。ちなみに私はバイトとしてネスさんの社員食堂を手伝うことにしましたよ」

「そうだ、遠坂！お前もここでバイトをやってもっと暑くなれよおおおおおおおおおおおっ！」

「修造さん、字が違いますよ」

とポーラが突っ込み、場は和やかな雰囲気包まれていた。それをネスは微笑を浮かべながら言う。

「さてと、それじゃあ仕事始めるか。士朗、凜。お前らも用意しろ」

「「ゑ？」」

と士朗と凜は顔を見合わせた。ネスは半分呆れ、半分苦笑しながら言う。

「お前等セイバーたちの話を聞いてなかったのか？お前等をセイバーと同じバイトとして雇うからさ。用意しろって言ってるだよ。ヴェルターズの社長には話はつけてある」

そう言うとなスは着替え室から出て行った。そこへプーが士朗達に言う。

「ネスのやつは口が悪いが、どんなときがあっても仲間を見捨てない優しい奴なのだ。だから俺達はどんな時だってあいつと一緒に戦えるし、俺たちのパーティメンバーのポーラだってアイツに惹かれ

パーティメンバー

たのは確定的明らかなのだ」

「仲間を見捨てない・・・か」

プーの言葉を聞いて、士郎にはネスの姿が眩しく見えた。ネスの姿はかつて自分があこがれていた『正義の味方』そのものだった。自分もそれに憧れ、BOARDのライダーであるブレイドになるために入社した時期があつた。だが、生存競争、ランクが上がるにつれて増える給料に目を奪われ、自分を見失っていた。もし自分が0から始められるのなら、もう一度、頑張りたい。本当の『正義の味方』になるために。

そう思いながら士郎は着替え室を出た。

1時間後、社員食堂

「よし、皆集まつたな」

厨房では士郎、凜を含むスタッフ達がネスの前に集合していた。そしてネスはこれからの方針を発表する。

「本日より階級分けランチを廃止する。安くて美味しいランチに統一する。いいな!？」

「「「「「サー、イエッサー! (はい、チーフ!)」」」」」

一致団結したスタッフ達の掛け声は何気に軍隊っぽいような気がするが気にしてはいけない。

「あの・・・ネス」

「ん？」

セイバーがネスに声をかけたので振り向く。

「何故、私はメイド服なのでしょううか」

「それになんで俺達までやらなければいけないのか・・・ホスト服だから俺のやる気は有頂天なのだが」

「僕も俄然やる気が出るよ。この格好」

セイバーとプーの言うとおり、セイバー、凜はメイド服。ジェフ、プー、ルイージ、マリオ、修造はホストの格好だった。

「当たり前だろ、客寄せには女は燃え、男はホストっていうのは自

然の摂理だぜ」

「いや、どういう摂理！？っていうか、『燃え』じゃなくて『萌え』でしょ！？」

「こまけーこたあいんだよ。とりあえずお前らは客寄せだ。赤字の社員食堂を黒字にする為にも、バシバシ働くぞ、いいな！」

ルイージの突っ込みをスルーし、ネスはスタッフに号令をかけた。
「『サー、イエッサー！（はい、チーフ！）』」

こうしてスタッフ達はそれぞれの持ち場へと着いていき、セイバー達は流されるがままにビラを配りに行った。

そしてお昼休みの時間・・・

ワイワイガヤガヤ・・・

客寄せが効いたのか社員食堂は満席になっていた。厨房もスタッフ達が休む間もなく調理を続けていた。そんな中・・・

「よいしょ・・・よいしょ・・・」

と桜が仕入れてきた野菜を運んでいた。ただダンボールにぎっしりが入っている野菜はとても重く、桜もおぼつかない足取りだった。そして・・・

「おっ・・・とととととと、うわっ！」

バランスを崩して倒れそうになる。その時、

「よっと、大丈夫か？間桐？」

後ろで皿洗いをしていた土朗が桜の体を支え、元の位置に戻してあげたのだ。

「え・・・衛宮先輩！？あ・・・ありがとうございます！」

と桜は顔を真っ赤にしながら頭を下げる。

「良いつて、仲間だしな」

仲間だしな。仲間だしな。仲間だs（以下略）と桜の頭の中でエコ

ーしながら、しまいには

プシュー・・・

「ほにゃー・・・」

頭から煙を出しながら桜は倉庫へと戻っていった。それを苦笑しながら士朗は作業へと戻る。すると、

「あら？まだこんな所にいたのかしら」

と声がした厨房の出入り口を見るとそこには春香と千早、あずさと不機嫌そうなイリヤがいた。

「天海・・・何のようだ？」

「あら？先輩に向かって呼び捨てはないでしょう？バイト君」

と春香は見下したような態度で士朗に言う。そこを千早とあずさが

「春香ッ！」と怒鳴るが春香は反省した様子を見せなかった。

「何の用でしょうか？天海先輩」

と士朗も苛立ちを抑え、春香に問う。

「私達はこれからカリスに奪われたギャレンバツクルを取り返しに行くんだけど、あなたのチーフさんに出番はないからって伝えておいてね」

そう言つて春香は去ろうとするが、食材を取りに来たネスが現れる。
「言われなくなつてこっちは仕事が忙しいからねえよ。それにそんなくだらない話をしてきたんならさつさここから出て行け。目障りだ」

ネスは自分には関係ないといった態度をとり、食材を取りに行く。

「ッ！あんた、好き放題言つて覚えておきなさい！行くわよ、皆！」

春香はネスをにらみながら言つと、あずさ達をつれ、厨房から出て行つた。

「あいつは対した実力はないな。弱い犬ほど良く吠えるって奴だな」とネスはため息をつきながら士朗に行った。

1時間後、海岸・・・

「うーん・・・見つからない」

海岸沿いにやってきたイリヤはアンデッドサーチャーを使ってカリスを探す但サーチャーには何一つ反応は現れなかった。

「イリヤ、まだなの！？」

と春香が苛立たしげに言う。

「すみません。でも、アンデッドサーチャーでカリスを探すのはやっぱ無理だも」うるさいわね、自分が無能なのをサーチャーの所為にするんじゃないわよ」・・・すみません」

イリヤはもつともな意見を言うが春香に怒鳴られ、シュンとなる。そんななか、千早とあずさは、

「ねえあずさ。最近春香って調子に乗ってない？（ボソボソ）」

「そうね、クビになった衛宮君や遠坂さんが可愛そうだわ。全く（ボソボソ）」

と小声で春香の態度について話していた。その時、

「私ならココにいるぞ！」

と春香の背後から声が聞こえ、その方向を振り向くと、其処にはカリスアローを構えながらゆっくり歩いてくるカリスの姿があった。

「見つけたわよ、カリス！行くわよ、千早！変身！」

「変身！」

「ターンアップ！」

「オープンアップ！」

春香と千早はベルトから発せられたオーラをくぐりブレイドとレンゲルに変身した。（一応解りやすくするためHブレイド、Tレンゲルと名づけておこう）

「うりゃああっ！」

まず最初にHブレイドがカリスに向かって突っ込んでいくが、カリスはそれを避けカリスアローで反撃をする。

「キャアアッ！」

カリスアローは狙い違わずHブレイドのブレイバツクルに当たりそれが外れてしまう。そのままHブレイドは春香へと戻ってしまう。

「は・・・春香！？」

いきなり春香がやられてしまったことに驚きを隠せないTレンゲルにカリスは目にも留まらぬ速さで接近し、Tレンゲルのレンゲルバツクルを奪おうとそれを掴むが、

「くっ！」

とつさにTレンゲルがカリスの腕を掴みレンゲルラウザーをカリスバックルに突き立てる。

「なっ！？ぐあああっ！」

狙い違わず、レンゲルラウザーはカリスバックルに直撃し、バックルは吹っ飛んだそれと同時にレンゲルバックルも取られ、Tレンゲルは千早に戻ってしまう。変身の解けたカリスの正体を見て4人は驚いてしまう。

「なっ！しゃ・・・社長！？」

そう、カリスの正体は自分たちが働いていたBOARDの社長、ヴェルタースだったのだ。4人は何故、ヴェルタースがカリスになり自分達を妨害するのかが分からず戸惑ってしまう。ヴェルタースはすぐバックルを拾うと自分の腰に装着する。

「社長、何故こんなことを！？」

「君達には我が社とヴェルタースキャンディーの為に働いてもらいましょう」

そう言うのとバックルにハートのエースのカードをスラッシュする。

『チェンジ！』

バックルの電子音と共にヴェルタースはカリスへと変身し、無防備な4人にエネルギー弾を放った。

それから1時間後・・・

「ふー、疲れたー」

ネス達は昼休みが終わり客席で休憩していた。

「でも、売り上げは10倍に伸びたからいいじゃん。このまま持ち逃げしちゃう？」

「いや、持ち逃げはダメだろ」

とポーラのボケにネスは突っ込み客席は笑いに包まれていた。その時、

『報告します。天海春香、如月千早、三浦あずさ、イリヤさんが本

日付で依頼退職いたしました』

「「な・・・！？」」

「どういうことなんでしょうか・・・」

「あいつらが会社を辞めただろ！？」

と士朗と凜、セイバー達は啞然としていた。それもそのはず、彼女達と最も付き合いの長い4人が自分から会社を辞めるなど信じられなかった。

「自業自得じゃないんですか、春香の奴は衛宮先輩や遠坂をクビに追い込んだ張本人だし。春香さまあwww」

「だけどさ、それでも今まで一緒に働いてきた仲間なんだろう？士朗や凜はどうなのさ？」

桜の意見にルイージは反発し、士朗と凜に意見を求める。

「俺はあいつらのおかげで、頑張つてこれた。だから見捨てるなんて出来ないよ。社長に事情を聴いてくる」

「待ちなさい、士朗。私も行くわよ」

と凜も士朗の意見に賛成する。

「ありがとう、遠坂」

「ベ・・・別に、アンタが心配で着いていくんじゃないんだからね！私も社長から事情を説明しに行くだけなんだから！」

と士朗に感謝の言葉を述べられ、顔を真っ赤にして反論する凜。

そんな訳で、士朗と、凜はサーヴァントを連れて、社員食堂を飛び出す。

「私たちも行かないと」

「そうだな、行くか」

とネス達も社員食堂を出て行くこうとするが、ガチャン！

「うん、うまい。だがここには俺の探している宝いいおとしはいなかったな」
ネス達の目の前に作業服を着た何処からどう見ても自動車修理工の仕事をやっているような男が座っていた。「うまい」と言っておきながら、ネス達を作っていたランチを雑に扱っていたが、気にしては

いけない。ジェフが男を見て「ウホッ！いい男！」と叫びたい衝動に駆られたがそれも気にしてはいけない。

「何だお前？」

とネスは半眼で言う。ネスの言葉に気がついたのか男が振り向く。
「ん？もしかしてお前がデイケイドか？単刀直入に言うが・・・」
そう言うとも男は作業服のファスナーに手をかけ、

「やらないか？」

とネスに言うが、

「だが断る。つーか、俺にそんな趣味はない」

断った。そして気づいたことを言う。

「お前、俺がデイケイドだって何でしってるんだ？」

ネスの問いには答えず、男はそのまま社員食堂から出て行った。

「なんだったんだ？アイツ」

「少なくとも食い逃げなのは確定的明らか」

「っていうかそんなことよりはやく、士朗君達を追いかけようよ」
そんな訳で謎の男の話を打ち切り、士朗の後を追うため社員食堂を後にした。

食堂の外では、あの男が歩いていた。そしてとある人物を見かけ、声をかける。

「お、いたいたハルヒ」

と男はハルヒと呼ばれた少女に歩み寄る。ハルヒは、

「何処行つてたのよ、安部さん！探してたんだから」

と声を荒げながら男に突っかかる。

「はっはっは。悪い悪い。ちょっとデイケイドって奴がどんな奴なのかを見に行っただけだ」

阿部は笑顔を崩さず、ハルヒに謝る。デイケイド、と聞き、ハルヒは声を潜めながら安部に聞く。

「それで・・・、どうだったの？そのデイケイドは」

「ああ、アイツはいい男だ。あのノンケな態度がそそるぜ」

安部の言葉にハルヒはため息をつく。

「あんたのアッチ系の話はどうでもいいの・・・、まあディケイドがどんな奴なのかって解れば、この世界には用はないわ。さてと、キヨンに連絡、連絡」

ハルヒはそう言うのと携帯を取り出した。恐らく、キヨンという人物に連絡をするためであろう。

「もしもーし、キヨン？こっちの世界でディケイドの確認が取れたからギンライナーをよろしくねー、え？もうそっちに向かつてる。さっすがあんたにしては気が効くじゃない。じゃーねー」

ハルヒはそう言うのと携帯の通話を切った。それと同時に仮面ライダー電王に出てくるデンライナーをシルバーカラーにしたようなものがハルヒたちを横切り止った。どうやらこれがギンライナーのようだ。

「さて迎えが来たし、次の世界に行くか。宝を見つけに」

阿部はそう言うのとハルヒと共にギンライナーに乗り込む。それと同時にギンライナーは何処へと走り去っていった。

安部とハルヒ・・・この2人は一体何なのか。ギンライナーとは何なのか。それはまだ解らない・・・。

続く・・・

第14話「剣（ブレイド）編その3 運命を切り開く刃 前編」（後書き）

今回、まとめてするつもりだったのですが、思いのほか長かったため前後編にしました。次回は必ず剣編を完結にするつもりです。

次回もお楽しみに。ちなみに今回登場のディエンド組ですがそつち側にもたくさんオリジナルライダーを登場させる予定です。ちなみに阿部さんとハルヒ、どっちがディエンドなのかは言えません。

それは555編で明らかにしたいと思いますので。

それでは（owo）ノシ

第15話「剣（ブレイド）編その4、運命を切り開く刃 後編」（前書き）

お待たせしました。ついに剣編完結です。

結構グダグダかもしれせん。

それでは、デイケイド・オブ・スマッシュブラザーズ・・・始まり
ます。

第15話「剣（ブレイド）編その4、運命を切り開く刃 後編」

BOARD理事長の研究室、薄気味悪いこの部屋の片隅では、先ほどヴェルタースにやられた4人が拘束されており、その近くで、ヴェルタースと、鎌田が話していた。

「理事長殿・・・これがレンゲルバックル、ブレイバックルです」
「御苦労・・・これですべてのカテゴリのバックルが揃った訳ですよですね」

そう、理事長というのはパラドキサアンデッドこと鎌田の事だったのだ。ヴェルタースからバックルを受け取ると、それを4人が拘束されている装置に置く。

「Aのカードに封印されたアンデッドと、人間の細胞とを組み合わせた究極の生物実験・・・それがそれが、バトルファイト最強のアンデッド・・・ジョーカーを生み出すのです！」

鎌田はそう言つて妖しく笑うと、装置のスイッチを入れる。

「・・・きゃああああああああああああつ！！！！」

「」

すると、どうだろう、ライダーバックルと4人からエネルギーが放出されていく。4人は苦しそうに叫ぶがそんなの関係ねえ！とばかりに作業を続ける。そしてカリスのバックルにエネルギーが溜まり、やがて一枚のカードとなつていった。

「完成です」

「ふふふ・・・やりましたな。理事長殿、これで我がBOARDとヴェルタースキャンディーの売上は安泰だ！ハッハッハッハッハッハッハ」

とヴェルタースはその結果に満足そうに笑う。と、そこへ

「社長・・・ナニヤッテイルンデイス！？」

「な・・・何よこれ！？」

と士朗、凜、セイバーと修造が入って来て、目の前の光景に驚いて

いた。何気に士朗の口調がオンドウルになっていたが気にしてはいけない。

「困りますね、邪魔をしてもらっては」

そう言つて鎌田はパラドキサアンデットに変わり、セイバーと修造に襲いかかる。

「ぐわぁ！」

「うぁぁっ！」

突然の奇襲に対応しきれず、セイバーと修造は吹っ飛ばされてしまう。士朗と凜もヴェルターズに吹っ飛ばされ、研究室の外に出されてしまう。

「社長・・・何でこんなことを!？」

「お前らにはわからんだろうな・・・経営者の苦しみ。ヴェルターズオリジナルを作っている者の悲しみが」

「経営者の・・・苦しみ？」

「それと今回の件と会社の経営状況って何の關係が・・・」
ヴェルターズの言葉に士朗と凜は訳が分からずお互いの顔を見合わせる。

「我々BOARDはアンデッド封印の為の会社。だがアンデッドの驚異が無くなれば我が社の存在意義がなくなってしまう。勿論、国からの金も来ない。ヴェルターズオリジナルを広めることも出来ぬ。ヴェルターズオリジナルの素晴らしさを伝える為には、更なるアンデッドの驚異が必要なのだ！」

と胸を張つてヴェルターズは言う。

「そんな・・・その為だけのためにイリヤや天海を・・・」

「狂つてる・・・」

士朗と凜は、金とヴェルターズオリジナルの為にイリヤ達を犠牲にしたヴェルターズを睨みつける。

「何とでもいえ」

とヴェルターズはカリスバックルを装着し、ハートのAのラウズカードと先程出来たラウズカードを取り出す。

「イヤツフウウウウウウウツ！」

「全速全身D A」

ドゴォン！

「グハアアアアアアアアアアツ！！！」

ヨッシーにまたがったクウガとディアードが2体を再び撥ね飛ばした。その隙を見て、士朗達はバツクルをつけようとするが、

「させるかあ！」

なんとか、地面に着地したジョーカーが触手を伸ばし、士朗達の手からバツクルを叩き落とそうとする。だが、

「エクスカリバー！」

「どっせい！」

ドゴォン！ズバァ！

「な、何iiiiiiiiiiiiiiii！」

突如現れた青い影と炎に包まれたボールに触手はちぎられる。

「シロウには……」

「遠坂には……」

「指一本触れさせませんよ！（ないぞ！）」

「セイバー！」

「修造！」

そう、影の正体はセイバー、ボールを打ったのは修造だった。

「き……貴様等！何故だ！？……何故邪魔をする……何故わからんのだ！私の苦しみが！」

ジョーカーは理解が出来ないとばかりに叫ぶ。だが、

「るせえんだよ、この成金野郎が」

と怒声を上げながらディケイドが言う。

「何だと……じゃあ貴様等は何だ！？ライダーは所詮B O A R Dの社員、己の為にランクを上げ、金を貰っているに過ぎない！」

「違うね。少なくとも、士朗達が戦うのは金の為でもランクを上げる為でも、ましてや社員同士の生存競争で仲間を蹴落とす為でもない」

ジョーカーの問いにディケイドの代わりにディアードが答える。

「では、何のためだ？何の為に戦うのだ！」

ジョーカーは納得できずに問う。その問いにディケイドは答えた。

「それは進化だ。どんなに失敗して躓いてしまっても、一緒に働く仲間達と共に励まし合い、それぞれの夢を語り合い、共に成長し、共に進化していく・・・その為に働くんだよ」

「そうだ！俺達には夢がある！お前らのような金と名誉に目がくらんだ奴らに負けてたまるか！」

ディケイドの言葉に賛同するように修造が言う。

「俺の夢は・・・そうだ・・・俺は正義の味方になりたくて、オヤジのような正義の味方にあこがれてライダーになったんだ！その夢の為に、俺はライダーとして戦う！」

そう言うて士朗はブレイバツクルを装着する。その光景を見て、ジョーカーは面白くないといった感じで叫ぶ。

「くっ、貴様等あ・・・貴様等は一体何なのだ！？」

ジョーカーの問いにディケイドは仮面の奥底でにやりと笑い答える。

「へっ、決まってんだだろうが。俺達は通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

「行くぞ、遠坂！変身！」

「変身！」

『『ターンアップ！』』

士朗と凜はバツクルを展開し、オリハルコンエレメントを出現させ、それをくぐりブレイド、ギャレンとなる。その時、ディケイドとディアードのライドブツカーから、カードが飛び出す。ディケイドのカードにはブレイドの絵柄が現れ、ディアードには修造の絵柄が現れた。

「早速試すか」

そう言うてディケイドはブレイドの後ろへ回る。

『ファイナルフォームライドウ・・・ブブブブレイド！』

「士朗、ちよっとくすぐりたいぞ」

バー。彼らの前にはクウガが春香を掴んで仁王立ちしていた。そう、クウガがとつさに前に出て研究所から失敬した春香を盾にしてジョーカーのヴェルタガを防いだのだ。

「コラアアアアアアアアアアッ！何、人を盾にしている！貴様それでも人間か！？」

ジョーカーは春香を盾にしたクウガを避難する。

「人間捨ててアンデッドになったお前が言えることか？」

「そんな事はともかく婦女子を盾にするな！」

さらりと返したクウガにジョーカーは突っ込んだ。

「いちいちうるせーなあ・・・ただ盾になったのが、ルイージじゃなくて女に変わっただけじゃねーか」

「いや！そんな事より仮面ライダーが人を盾にしちゃ駄目でしょ！？」

クウガとジョーカーのやり取りを見てディケイドがぼそりと呟き、それをパラドキサアンデッドがつっこむ。それを聞いたディケイドはボロ雑巾のように捨てられた春香に近寄り、

「うっ・・・春香、安らかに眠れ。お前の仇は俺たちが必ず取るからな」

と涙を流しながら言う。実際、春香は生きているし、こんな風にしたのはディケイド達の所為でもあるのだが・・・。そして、パラドキサアンデッドに向かって言う。

「これでいいんだろ」

「・・・ま、まあいいでしょう」

『いいの！？』

パラドキサアンデッドのセリフにブレイドブレードとなったブレイドが突っ込んだが無視しておく。一方傍らでは、

「あ・・・ん・・・た・・・ら・・・はああああああ・・・」

春香が足をピクピク引きつらせながら、声を振り絞りクウガとディケイドに恨みのシャウトをしていた。そこへ、

「はあはあ・・・もう始まつてる」

「『ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！』

それが直撃し、大爆発が起きる。爆煙が晴れ、2体のアンデッドは跡形もなく消滅し、プーとルイージが『犬。家の一族』のように頭から体を地面に突っ込ませていた。

「ふつ、人質を取るならもつとマシなのを取るんだっ たな」

「いや、仮面ライダーが人質ごと必殺技放っちゃ駄目でしょ!？」

ディケイドのセリフにブレイドブレードから戻ったブレイドが突っ込んだ。そしてディードと修造はというと、

「「もつともつと熱くなれよおおおおおおおおおつ！！！！」

勝利のシャウトをしていた。

ジョーカーを倒したネス達は会社の前に戻り、自宅に帰ろうとしていた。ふと、

「あれ？帽子がねーや。わり、皆は先に帰ってくれ」

とネスは帽子がないことに気づき、リュックの中を探す。そこへ、

「はい、忘れ物」

「お、士郎か……。サンキュ」

土朗がネスの帽子を持って現れ、帽子を渡す。ネスは帽子を被り、例を言う。

「そう言えば、ネス……君は何か不思議な感じがするけど、何者なんだ？」

「……俺はやがて世界を破壊する」

「え？それってどいつの……」

士朗はネスの言葉に戸惑ってしまう。

「って富竹とかいう野郎に言われたが、まあ実際そうなのかは俺にもわからん」

「はは．．何だよそれ。でも、君は世界を救った。破壊するはずないじゃないか」

「ま、そうあつて欲しいけどな」

そう言つてネスと士朗は笑いあふ。そこへ、ポーラが「ネスー、早くー」とポーラが駆け寄ってくる。

「おっと、早くしねーと俺のお姫様がうるせーからな」

そう言つてポーラの元へと行くネスに、士朗が声をかける。

「なあ・・・また、会えるよな」

「当たり前だよ士朗君」

「旅を続けてる限り俺たちはまた何処かで会えるさ。だからさよならじゃない。そうだろ？」

とポーラとネスは笑顔で言う。

「・・・ああ、そうだよ・・・そうだな。またいつか・・・」

そう言つてネスとポーラはマシンディケイダーを走らせ自宅へと帰りついた。その後ろ姿を士朗はいつまでも見ていたのだった。

ネスが自宅へ帰ると、早速ロールが降りて次の世界に行く準備が出来ていた。

「フフツ、ネス御一行様ご案内」

とキバーラがそう言いながら飛び回る。え？キバーラいたのって？そりゃあいましたよ。らき　すたのみさお並に存在感がうすかっただけです。

そんなことはさておき、現れた背景ロールに描かれていたのは赤いラインとロボットのような物だった。果たして、この絵が意味するものとは・・・。

そして、薄暗い空間の中・・・

何もない空間に富竹がひざまずいている。

「そうか・・・鎌田が負けたか・・・」

何もない空間から威厳に満ちた声が響く。

「はい、それとディエンド『安部隆和』とディギンズ『涼宮ハルヒ』とその一味が動き出した模様です」

富竹はうなずきながら報告する。

「そうか・・・、一刻も早く完成させねばな・・・『混沌のベルト』を・・・」

「ええ、アナゴ様・・・その為に私めが必ずや次の世界でディケイドを亡き者に・・・」

この声の主『アナゴ』とは一体何者なのか？ディエンド、ディギンズとは！？そして混沌のベルトとは一体・・・。謎はますます深まるばかりである。

THE NEXT STAGE FAIZ・・・

第15話「剣（ブレイド）編その4、運命を切り開く刃 後編」（後書き）

いかがでしたか？久々のディケスマ更新でしたので、何処まで進んだかど忘れしてしまい、一から読み返して遅くなりました。・・・

ほったらかしにした結果がこれだよwww

さて、次回は555編です。お楽しみに、それでは（owo）ノ
シ

今回は短めになります。デイケイドの変身&バトル等を期待していた方はすみませんでした。あと、下ネタ(男の裸エプロン)あります。(笑)

それではおなじみのグダグダになりますが、温かい目で見守ってください。

キバーラ「デイケイド・オブ・スマッシュブラザーズ、始まるわよ」

第16話「555編 サイバーカモメスクールのガチホモ!? 前編」

クウガ、キバ、龍騎、ブレイドの力を取り戻したネス達は順調に旅を続け、遂に五番目の世界『ファイズの世界』へとやって来た。その日の夜・・・

「特に異常はないな・・・」

と警備員が、何処かのSFに出てきそうな建物の中を巡回していた。その時・・・

「ん？」

と窓をのぞいてみると、校庭に誰かがいる。それは小さな女の子であつた。

「何だろう、あの子」

そう思い、建物から出て、校庭へと向かい近づくと、女の子の姿はかなり貧しそうな服装だつた。

「えーと・・・君はここ、サイバーカモメスクールの生徒か関係者なのかな？」

と警備員はおずおずと女の子に聞く。

「私・・・このスクールに入れなかったの・・・」

「え？どうして？」

少女の答えに、警備員は若干、いやな予感を感じながらも少女に聞いた。次の少女の言葉により、そのいやな予感は現実のものとなる。

「だって私・・・オルフェノクだから」

少女は笑いながら言うと言に奇妙な模様が浮かび、その身体は灰色の怪人へと変化したのだつた。

「ひ、うわああああああああああああああつ！」

警備員は腰を抜き、逃げようとするが、体が言うことを効かない。そんな警備員をあざ笑うかのようにオルフェノクは一步一步、警備員にじり寄ってくる。

（ひ、ひいい！俺の人生オワタ・・・）

と警備員があきらめかけたその時、

ブオオオオオオオオオオオオオオオ！

「ハアッ！」

斬！

「ギヤアッ！」

「へ？」

突如赤い閃光と共に黒鉄の戦士が現れ、手に持っていた赤く光る剣で目にも止まらぬ速さでオルフェノクを斬ったのだ。その戦士は警備員の方を向き、

「早く逃げるんだ！」

「あ、ああ・・・」

早く逃げるようにうながし、警備員は言われるがままに、そそくさと逃げた。それを見たオルフェノクは驚愕と憎悪の入り混じった声で言う。

「ファ・・・ファイズ！？くそっ！ここであつたが百年目！殺された同胞の恨み、今こそ晴らしてくれる！覚悟！」

そう言つてファイズに迫るが、

「はあっ！」

なます斬りにされ、無様に地面を転がってしまう。ファイズはとどめとばかりに、赤い光りの剣のレバーを切り替えバツクル部分を開きボタンを押す。

『エクシードチャージ！』

独特な電子音声が響き、ファイズはバツクル部分を閉じると、バツクル部分から右腕に向かって赤いラインに光りが走り、閃光が右手に辿り着くと赤く光る剣が更に光を増していった。

「でやああああああああああああああああっ！！」

ズバアッ！

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

ファイズの剣に斬られたオルフェノクは断末魔をあげながら身体中

から青い炎が吹き出し、爆発し散っていった。

「・・・ふう」

ファイズは一息ついて近くに停めてあったバイクに股がり、

「ん？」

ベンチに何者かがいるのに気づく、それは青いつなぎの作業服を着た男だった。

（警備員じゃない・・・誰だ？）

とファイズは考えていると、

「へえ、あんたがファイズかい。中々の戦いっぷりだ。ゾクゾクしちゃったよ」

「！？何でファイズの名をあなたは一体・・・」

と言いかけたファイズだったが、次の瞬間凍りつく、何と男は作業服のフラスナーを下ろし始めたのだ。

「やらないか？」

フラスナーが下腹部の所まで来たところで手を止め、そう言った。

「ぎゃああああああああ！変態だあああああああつ！」

ファイズは叫び声をあげながら、バイクにまたがり一目散に逃げた。それを見た男はフラスナーを元に戻し、やれやれといった感じで立ちあがる。

「逃げられちゃったか・・・、だが、ファイズは必ず俺のモノにしてやるぜ。・・・ん？」

と男は目の前にある何かに気づき、それを拾って確認する。恐らくはファイズが慌てていた為、落としていった物だろうが、

「ほう・・・」

男はにやりと、それを見て笑った。

翌日・・・

「ん・・・、ふあゝよく寝た」

ネスはあくびをしながら起きた。しかも全裸で、ネスの横にはポー

ラも寝ていた。布団で全身を隠している為、分からないが、ちなみにポーラも全裸である。なぜそうなのかは皆さんのご想像にお任せします。(笑)

「なんかいい匂いがするな・・・」

そう言つて、服を着、自分の部屋から出て、居間へと向かう。そして、

「なんじゃこりゃ!？」

と驚愕する。なぜならテーブルには豪華な料理の数々、一瞬ネスママが作ったのか?と考え、ネスママの部屋に行くが、彼女は寝ていたので、その考えを捨てる。

「どういうこつた?」

と居間へ戻り、目の前の料理を見てみると、

「よお、起きたか?」

突如、ネスファミリーの誰でもない声が聞こえ、振り向くと、そこにはブレイドの世界で食い逃げをやらかした作業服のいい男だったからだ。しかも、なぜか作業服は着ておらず、裸エプロンになっている。

「・・・何やってるんだ、お前?」

「まあ、そう怒るな。お詫びに、お前が好きそうなものを用意したからな」

ネスは怒りと殺気のこもった声で、男のエプロンの胸倉をつかむが、男は表情を変えずに言う。その時、騒ぎに気づき、ネスファミリーが起きて、居間に集合する。

「ん、ネス、おはよ・・・ぎゃあああああああああああ
っ!変態!」

「ポーラ、何のさわぎ・・・あなたはあの時のいい男!？」

ポーラは絶叫し、ジェフは驚愕していた。

「いい男とは嬉しいこと言ってくれるじゃないの。俺は阿部隆和、
あへ たかかず

昨日のお詫びということで、今日は俺が朝食を作つてやった」

そう言つて男、阿部はエプロンから作業着に着替えながら、ジェフ

達を席へ招いて行く。

「おいイ！？何ですか、この旨さは！？s y れにならんですが！」
「ヤッフウ！これめっちゃうまいぜ！」

とプーとマリオは朝食にがつついていて。そういえば、とルイージは阿部に問う。

「阿部さんってネスさんとお知り合いなのですか？」

「冗談じゃないぜ。誰がこんな変態！「まあ、こいつ自身のことは知らないが、こいつの持っている『破壊者のベルト』^{ディケイドライバー}のことはよく知っている」なっ！？」

ルイージの質問にネスが答えようとしますが、阿部はそれに割り込んで答え、ネスの家から出て行くこととする。ああ、そうそう。と阿部は思い出したように振り向きながら答えた。

「俺の相方からの伝言だ。^{ちゅうへん}『世界を巡るのは私達の役目、アンタにはまだ早いからくれぐれも私達の邪魔はするな』だとさ」

そう言って、阿部はドアを開け、外へと出て行った。それを見たネスは、

「はっ、何が『私達の邪魔はするな』だ。気に食わねえ」
毒づき、朝食を食べ始めた。

朝食を終了し、ネス達は这个世界を調べる為に外へ出た。
すると、

「……なんじゃこりゃ……」

ネス、ジェフ、プーは黒いズボン、白いシャツに灰色のブレザーを羽織っている。ポーラは同じ白いシャツに灰色のブレザー、チェックのスカートである。お互いに共通するのはブレザーの胸部分にカモメのマークがついているのである。とりあえず、立ち止まっていては埒が明かないので、何か自分の役割に何か手掛かりがあるか探っていく、ネス。すると、手帳を見つけた。その手帳には、

『サイバーカモメスクール 高等部2年 ネスティ・オーヴェン（
↑ネスの本名）』

と書かれていた。

「サイバーカモメスクールとか言う学校の生徒……これが俺の
この世界での役割か……」

「ん？ちよつと待って、カモメってもしかして……」

とジェフが言いかけた時、

カキーン！

と心地よい、バットの打撃音が響き、ネスたちが振り向くと、どう
やら野球部が守備練習をしているようだ。その中で一人、大活躍を
している少年がいた。

ダダダダダダダダ！

「うおおおおおおおおおおおっ！！！」

その少年は雄たけびを上げながら、空高く飛ぶ打球を追いかけて、フ
エンスに落ちてきたところを取った。

「へへっ、どうだ中島。カッコよくいったろ！？」

「すごいぜ、磯野。本日、フェンス越えこれで4回目だぞ」

そしてうまく着地し、磯野と呼ばれた少年はサムズアップをする。

「磯野……磯野だとお！？」

もう一人の少年、中島のセリフ『磯野』の単語を聞き、ジェフは驚
愕の表情を見せる。

「なるほど……だいたい分かった」

ネスは、顎を手に当て、ネスは言う。

「どうやら、このライダー世界は『サザエさん』の世界と混ざって
いるようだな」

と。そして、ネスたちはこの世界の情報を得るべく、サイバーカモ
メスクールの中へと足を運んだのだった。

はたして、この世界でネス達を待ちつけるものとは？そして『ネス
の持っているディケイドライダーを知っている』という阿部の言葉
の意味するものとは！？さて、次回！

続く……

いかがだったでしょうか。今回の冒険の舞台となるファイズの世界はサザエさんのほかにもう一つの作品の世界が混ざっています。(

ヒントは青い岩男)

さて、次回は多分ディエンドとその仲間達が登場するかもしれません。楽しみに待っていてください。

それでは(owo)ノシ

第17話「555編 サイバーカモメスクールのガチホモ!？」

後編

(前書き

最近、暖かくなってるなあ……。4月ぐらいは寒かったのに、時
がたつのって早いもんですね……。

さて、相変わらずのグダグダですが、温かい目をお願いしますね。
ポーラ「ディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ、始まります」

第17話「555編 サイバークामメスクールのガチホモ!? 後編」

「おいイ・・・ものすごいSFチックだなここ」

サイバークामメスクールに入るなり、プーはそう感想を漏らした。スクールと言うよりか、SFに出てきそうな研究所にそっくりな作り、扉なども近づくだけで開く自動ドア。まさに近未来にタイムスリップしたような錯覚を覚える。

「わあ、綺麗だね」

「そうだよなあ。何気に異世界に来たって感じがするぜ」

とポーラがマリオがしみじみとスクールの風景を見ながら感想を述べる。その時、

「本当なんです！襲われたんですよ！オルフェノクに！」

「分かりました。では、今回の件については我々が調査致します。

また何かあったら連絡します」

と怪我した男と、教師らしき人物が話しているのに気づく、ネス達はその怪我した男が言ったある単語を聞き、眉をひそめた。

「オルフェノク・・・？ファイズの世界か」

「オルフェノク？なんだそれ？」

ネスのつぶやきに、マリオは聞く。かわりにジェフがマリオの問いに答えた。

「オルフェノクっていうのは、一回死んだ人間が生前よりも強い力を得て蘇った。通称、人類の進化系と呼ばれる怪人なのさ」

「怖いですね、それ」

「でも大丈夫だよ、『仮面ライダー555』に出てくるオルフェノクは悪い人間ばかりって訳じゃなかったさ。ん？何だ？あそこに人だからできてるぞ？何かのイベントか？」えっ？あつ、本当だ！死んだ人間が蘇った姿、オルフェノクに対し薄気味悪さを感じるルイージにポーラはオルフェノクは悪い奴ばかりではないと言おうとしたが、プーの言葉に遮られる。

ブーが指さした方向を見てみると、そこには人だかりができていた。
「何かあったのかな？少なくともただ事じゃないと思うけど」
とジェフ。

「兎に角、少し気になるし、行ってみるか」
そう言つて、ネスは人だかりの方へ走つて行つた。

その数分前・・・
パシャリ。

「うん・・・良い写真が撮れた」

校舎の前で、サイバーカモメスクールの制服（ちよつとスカート短め）の少女が、カメラで、目の前の花を撮っていた。その少女はその写真を取り出すと、近くにいた少年が花をどけ、別の花を置いた。
「ワカメちゃん。次はこの花でいい？」

「うん、ありがとう六斗君」

その少女、ワカメは少年、六斗にさういうと、再び写真を撮り始めた。何を隠そう、写真を撮っていたこの少女は磯野家の二女、磯野ワカメなのだ。ワカメちゃんと言えば、おかっぱ頭に短すぎてパンモロになっているスカート姿を想像するが、髪型はセミロング、体も色々成長しており（特に胸の部分）、かつての磯野ワカメの面影を残すものとは制服のスカートが短すぎてモロに見えているパンツ位である。（笑）

さて、話を元に戻そう。

「おい、貴様。誰の許可を得てこんなことをしている？」

ワカメが写真を撮っていると、声が聞こえ、振り向く。そこには3人のえらそうな男子生徒と1人のむかつく顔の女子生徒がワカメ達をにらみながら近づいてくるではないか。

「困るなあ、磯野君。いくら我々に憧れているからと言つて許可もなく我々ラッキークローバーを写さうなどと・・・」

「おこがましいにも程があるな」
そう言つて、ワカメのカメラを取り上げる。

「や・・・やめて下さい！返して！」

「駄目だ、これは没収だ。返して欲しければそのエロ過ぎる体で我々を奉仕しろ。話はそれからだ。H A H A H A・・・」

取り上げられたカメラを取り返そうとするワカメをあざ笑うラッキークローバー達。その時だった。

ガシィ！

とやってきたネスがカメラを持っていたラッキークローバーの一人の腕を掴む。

「返してやれ」

「くっ！貴様誰に向かってその口を聞いている！」「知るか、いいから返してやれよ」いだだだ！は、離せ！返すから離せ」

ネスは返すように促すが、まったく聞く耳を持たなかったので威圧感と腕に力を込めるとあっさりとカメラをネスに渡す。

「ふむ・・・良いカメラだ。手入れもされて大事に扱われてるな。全く・・・こんなのでお前らを撮るなんざもつたいねーな」

「何だと貴様！」

「誰に向かって口を聞いている！」

ネスの言葉にラッキークローバーの面々は憤慨する。だが、

「てめえらが、誰だろうが知ったことじゃねーよ。っーかアイドルごっこなら他所でやれ」

とさらっと受け流し、カメラをワカメに返した。その時だった。

「ちよつとアンタ！」

と校舎の裏からカチューシャの少女が現れ、ネスに詰め寄る。

「誰だお前？」

「ちよつと来なさい！」

ネスの問いには少女は答えず、そのままネスを引っ張って行った。

カモメスクールの屋上

少女はそこにネスを連れていき、手を離れた。

「何だかしらねーが、告白ならお断りだぜ。俺、彼女持ちだし」

ネスの言葉を見無視し、少女はネスの胸倉をつかみ上げる。

「阿部からの忠告聞いてたわよね。私達の邪魔はするなって」

少女の言葉に、ネスの眉がピクリと動く。

「まさかお前、阿部の野郎が言ってた『相方』ってお前のことか？」

「まあね、私は涼宮ハルヒ。^{すずみや}阿部の相棒でもあり、SOS団の団長よ・・・ってそんな事はどうでもいいのよ！分かったら私達の邪魔はしないことね」

「悪いがお前など知ったことねえ。何で『涼宮ハルヒシリーズ』のキャラであるお前がここにいる？」

少女、ハルヒをジト目で睨みながらネスは何故、『555の世界』にいるのかを聞く。

「馬鹿ね、私がアンタに教えることでm「私達の目的はこの世界にいるファイズを探すこと」ッ！？長門、アンタいつからそこにいたのよ！？」

ネスの問いにせせら笑いながら言うハルヒを遮り、何者かが答えた。ネスとハルヒは声が聞こえたほうに振り向くと、そこにはショートカットのメガネをかけた少女がいた。さっきのハルヒのセリフからするとおそらく彼女が長門だろう。

「貴方がデイクイドをここに連れてくる前からここに居た・・・」

長門はハルヒの問いに表情を変えずに答え、ネスのほうを見やり続けた。

「ファイズはこのスクールを何故か守っている。つまり、このスクールの生徒の誰かがファイズだということ・・・」

「成る程な・・・」

長門の言葉にネスは頭を掻く。そんなネスに長門はせまりながら言う。

「デイクイド・・・貴方にはすまないが、この世界から出て行つて欲しい」

ネスは長門の言葉にしばらく黙る。やがて、しばらくたった後、ネスはため息をつきながら答えた。

「やなこった。こつちも自分の世界を救うためにここに来てるんでね、悪いが出て行くわけにはいかねーんだよ」

「あつそう、口で言っても聞かないなら・・・」

ネスの言葉に長門の代わりにハルヒが威圧感を漂わせながら何処からか銃のようなものを取り出した。

「実力で分からせるしかないわね」

「上等だ・・・!」

ネスも殺気を漂わせながら、デイケイドライバーを取り出す。・・・そこへ、

「おい、ネスー」

「おいハルヒ、お前何やってんだ!」

とポーラと、少年が現れる。

「ん?ポーラ」

ネスは殺気を解き、ポーラのほうを見る。

「ネス、ここにいたんだ。ワカメちゃん達がネスにお礼がしたいから家に来てだつて」

「ワカメ?・・・ああ、ラッキー何とかに絡まれてた奴等か。OK、行こうぜポーラ」

そう言つて、ハルヒがキヨンに氣を取られている隙に、屋上を後にするネスとポーラだつた。

「ちよつとキヨン!いきなり現れないでよ!」

一方、ハルヒは不機嫌そうな目で少年、キヨンに怒鳴っていた。キヨンはため息をつく、ハルヒにズイッとドアップで迫りながら反論する。

「お・ま・え・な。あれほどこの世界で騒ぎ起こすなつて言つたじやねーか。何、早速やらかしてんだよ!？」

「しょうがないじゃない!あの馬鹿が邪魔するなつて言つても来るから、実力で分かせてやるのよ」

「でもな!今、ここでお前が『デイギンズ』に変身してデイケイドと戦つてみる!この世界が滅茶苦茶になつたりして色々と面倒なこ

とになるぞ！」

「だから何？そう言うことを修正するのは『銀王』であるあなたの役目でしょ？」

「だけどな、俺だって楽じゃねーんだぞ。いちいちあいつ等を動かすのに、パフエやら酢昆布とか用意しなけりゃいけねーし。少しは俺の苦労も考えろつての！」

などとハルヒとキヨンは口げんかをしていた。やがて、

「あ！？アイツらいなくなってる！バカキヨン！アンタの所為よ！」
ネスとポーラがいなくなっているのに気づき、キヨンに八つ当たりするハルヒだった。

磯野家

仲間達と合流したネス達は先ほど助けたワカメ達に招かれて磯野家に来ていた。

「やあ、ワカメと六斗君が世話になったみたいだね。僕は磯野カツオ。サイバーカモメスクール野球部のエースさ」

とカツオがお茶を出しながら紹介した。ネス達はお茶を飲み一息つく。

「改めて自己紹介するわ。私は磯野ワカメ、カツオ兄ちゃんは私の兄です」

「僕は光六斗、居候です」

その後、磯野家メンバーの自己紹介となるわけだが、長くなるので省略する。

次はネス達の紹介となった。

「ネスティ・オーヴェンだ。ネスと皆に呼ばれてる。そしてこいつ等は俺の仲間達だ。」

ネス達も磯野家の方々に軽く自己紹介し、先ほどの話となった。

「そう言えば、ラッキークローバーから娘を助けてくれたそうですね。ありがとうございます。お礼にワカメを貴方の嫁にs「お父さん！」すまん冗談だ」

と一家の大黒柱、磯野波平がネスに礼を言った。

「いや、俺はラッキークローバーが気に食わなかったからしただけですよ」

とネスはそつけなく答えた。

「本当に嫌な奴等だよ、僕はあいつ等はオルフェノク並みに嫌いだな」

カツオがうなずきながらラッキークローバーを批判する。カツオの言葉に含まれていた『オルフェノク』と聞き、心なしか六斗の表情が曇っていた。

「酷いわ、お兄ちゃん。オルフェノクも人を襲ったりして酷いと思うけど、そうじゃないオルフェノクだっているのよ」

「だけどさ、嫌じゃないか？人の振りしている化物なんか。僕だったら身近にオルフェノクがいると思うだけでもゾツとするな」

ワカメはカツオを諭すが、カツオはそんな言葉を受け流し、オルフェノクを批判する。それを聞いたびに六斗の表情はだんだんと曇っていった、まるで自分の事を言われているかのように、だが・・・

「でも大丈夫だよ。スクールにはファイズだっているし」

と顔を挙げ苦笑いしながらカツオに言う。

「ファイズ？ああ、最近話題になっているオルフェノクを倒している仮面の戦士のことが、あれて確か都市伝説じゃなかったっけ？都市伝説なんか当てにならないよ」

カツオたちがそんなやり取りをしているなか、ネスは、テレビの上に立てられている写真に気づき、見た。そこには、一家並んで笑顔で写っている磯野家の面々が映し出されている。

「これ、お前が撮ったのか？」

と、ネスは写真をワカメに見せる。

「ああ、それ？私が初めてお父さんに買ってもらったカメラで写した家族写真よ」

「へえ・・・いい写真だな」

ネスはしげしげと眺めて感想を述べる。

「でしょ？ワカメちゃんはいつか写真集を出すのが夢なんだ」と六斗がワカメの代わりに答えた。

「へー、ワカメ写真集を出すのか？がんばれよ」

「がんばりなさいよワカメ」

「僕が君のグラビアを撮って上げ「やめんかい！」グヴオア！」それを聞き、磯野家+変態^{シエフ}がワカメに応援する。

「もー！それは二人だけの秘密だって言ったじゃない」

ワカメは顔を真っ赤にして六斗の頭をグリグリとする。

「はは、仲がいいんだな」

「まるで私とネスみたいだね」

そんなほほえましい光景を見て、ネスとポーラはそう言っていた。

翌日の放課後、サイバーカモメスクールのテニスコートにネスはいた。理由は・・・、昨日の件でラッキークローバーにここに来るように言われていたからだ。

「逃げずに来たようだな」

と遅れて、ラッキークローバーの面々が姿を現す。

「遅れて来たお前等が何言ってるやがる」

「貴様・・・、我々が貴様に勝負を挑んでやっているのに何だその口の聞き方は！？」

ネスはラッキークローバーの面々を睨みながら言ったセリフにラッキークローバーの一人が顔を歪ませて怒鳴る。

「知るか、さっさと始めようぜ」

こうして、テニス勝負が始まった。その勝負は凄まじく、ボールに火がついたり、ネスや相手の周りに風が強風が渦巻いていたり、某テニス漫画のような展開になっていた。

「・・・・スゲー・・・・（。d）・・・・」

ポーラ達は啞然とその光景を見ていた。
やがて、

「ハア！」

バゴオン！

ネスのブーメ。ンス。イクが決まり、ネスの勝利が確定した。その時だった。

「その力・・・やはりファイズ」

「とうとう我々の前に姿を現したか！」

ラッキークローバーたちはネスをファイズと呼びながら睨んでいる。

「おいしい・・・何言ってるんだこいつら」

とプーは訳が分からず、ネスに聞く。

「まさか、こいつ等の中にファイズがいると思って勝負を引き受けたんだが・・・宛が外れたみたいだな・・・」

とネスはため息をつきながら答えた。そんなネス達を差し置いて、ラッキークローバーたちはオルフェノクへと姿を変え、襲い掛かってきた。

「行くぜジェフ、マリオ！」

「OK」

「ヤッファー、行くぜ！」

ネスはデイケイドライバーを、ジェフはディアードライバーを腰に装着して、カードを装填し、マリオはアーケルを出現させ、構える。

「・・・変身！・・・」

『カメンライドウ・・・』

『デイケイド！』

『ディアード！』

ネスはデイケイドに、ジェフはディアードに、マリオはクウガに変身し、オルフェノクを迎え撃つ。

「何！？ファイズじゃないだと！？」

とオルフェノク達は意外そうな表情でデイケイド達を見る。

「お互い見当違いしてたみたいだな。どうする？やめるか？」

「フン、ファイズで無かるうと、我々の正体を知ったからには生かしては帰さん！」

「正体明かしたのにそれかよ……。まあいいや、どの道てめえらのどタマかち割ったるけえのお！行くぜ野郎共！」

クウガの一声で、ディケイドたちはオルフェノクに向かっていく。

「……オラオラオラア！」

と怒涛のラッシュでオルフェノク達を追い詰めていくディケイド達。クウガは蹴り飛ばしたオルフェノクの足を持って、ディケイドとディアードはライドブッカーをソードモードにしてオルフェノクを蹴散らす。

「新しい力を試してやるぜ！やるぞジエフ！」

そう言つて、ディケイドはディアードに合図をすると、ライドブッカーからブレイドのカードを取り出す。ディアードもうなずき、修造のカードを取り出し、お互いのベルトに装填した。

『カメンライドウ……ブレイド！』

『ニコニコライドウ……シュウゾウ！』

するとどうだろう、ディケイドのベルトからオリハルコンエレメントが飛び出し、それをくぐるとブレイドとなる。ディアードはそのまま松岡修造に変身した。

「行くぜ！」

「うおおおっ！もつともつと熱くなれよおおおおっ！」

とDブレイドとD修造はオルフェノクに向かって走り出した。

「姿が変わった所で！」

そう言つてオルフェノクは触手の一斉攻撃を行うが、

「甘い！」

そう言つてDブレイドはライドブッカーからカードを装填する。

『アタックライドウ……メタル！』

電子音声が響くとDブレイドの身体は鋼のような身体になりオルフェノクの攻撃を弾き、その隙にカウンターし相手を怯ませた。

「ぐお！何イ！」

「さらに追撃DA」

そう言つてD修造がライドブッカーからカードを取り出し、それを

ディアードライバーに装填する。

『アタックライドウ・・・ヒートラケット!』

すると何処からともなく、ラケットが現れ、D修造の右手に納まる。どこからかボールを取り出し、宙に放り投げ、

「どおりや!」

サーブを放った。そのサーブは炎をまとしてオルフェノクに直撃する。

「グハア!な・・・何だこいつ等は、何なんだそのベルトは!？」

とオルフェノクはDブレイド達に恐怖を感じ、後ずさりする。DブレイドとD修造はライドブツカーからカードを取り出し装填する。

『ファイナルアタックライドウ・・・』

『ブブブブレイド!』

『シュシュシュウゾウ!』

「オリヤアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

「しゅう・・・ぞう!」

響く電子音声と共にDブレイドは電気を右足に纏ったライダーキックを、D修造はさっきより炎がともったボールでスマッシュを放つ! ドガアアアアアアアアアアアアアアアン!!!!

2人の必殺技が炸裂し、オルフェノクは悲痛の叫びをあげながら青い炎に包まれ爆破していった。それを確認したDブレイドもディケイドへと戻っていった。そんな中...

「...ディケイド、今日こそ貴様を...」

テニスコートのフェンスの奥から富竹が現れ、ディケイドに近づこうとする。その時だった。

「困るねえ・・・トミー。俺達の邪魔をしてくれちゃってさ」と阿部が現れた。

「貴様はディエンド!? 何故ここに!？」

「いや、ちよつとな・・・それで、何でお前がここにいる」

富竹の問いに、阿部は表情を変えずに言う。心なしか声には殺気がかもっていた。それに押され、富竹は後ずさりをする。

「答えないって事は、お前も俺の邪魔をしているって事でいいな？」
無言を肯定と捕らえ、阿部はハルヒの持っていた同じタイプの銃の
ようなものを取り出し、殺気をさらに大きくし富竹に聞く。そして
さらに・・・

「止めとけよ・・・阿部さんの強さは知ってるだろ？素直に言うこ
とを聞いたほうが身のためだ。一応あんたは『あつち側』に行つて
も『世界の管理者』変わりないしな、殺したりしたら、色々と面倒
なことになるからよ、阿部さんも抑えてくれ」

とキョンがハルヒをつれて富竹を諭した。富竹は冷や汗を垂らし・・・

・
「解った。ここはいったん退かせてもらう」

そう言つて、オーロラを出現させ逃げていった。阿部たちは再び陰
に隠れ、ディケイド達を見ていくのであった。

「ふう・・・ん？」

オルフェノク達を倒し一息ついているディケイド達の前にリーダー
格の男が現れ、自身の身体を虎のような姿、タイガーオルフェノク
（以下Tオルフェノク）へと変えていき、灰と化したオルフェノク
に触手を伸ばすと、オルフェノク達が復活したではないか。

「情けない・・・貴様等何をやっている？」

「う・・・うう、ボス、すみません」

と部下のオルフェノクはうめきながら起き上がる。

「な！？オルフェノクに命を吹き込んだだと！？」

とディケイドは信じられないといった感じでTオルフェノクを見る。
さっきのオルフェノクとは比べ物にならない殺気に身構えるディケ
イド達、だが・・・

「俺の部下が世話になつたな。お前達、帰るぞ」

そう言つとTオルフェノクはディケイド達に何もせず背を向ける。

「てめえ！逃げんのか！？」

とクウガはTオルフェノクに向かって叫ぶ。

「トオルフェノクはピタリと止まると顔だけをデイケイド達に向ける。貴様等に俺の部下が受けた痛みを倍にして返したいのは山々だが、生憎我々の目的はファイズだけだ。ファイズを消してからいつでも相手をしてやる」

そう言つて、トオルフェノクは去ろうとするが、

「もう一つ質問していいか？」

「何だ？」

デイケイドに呼び止められ、再びトオルフェノクは足を止める。

「このスクールに忍び込んで何するつもりだ？それと・・・お前等の目的は一体なんだ？」

「そうだな・・・強いて言うなら、我々トオルフェノクが世界を支配するための拠点にするためだ」

そう言つて、トオルフェノクは部下のオルフェノクを連れて、去つていった。その背中を見て、デイケイドは変身を解き、ネスへと戻る。

「こうしちゃいらねーな、あいつ等より早くファイズを見つけたぞ」

そう言つと、ネス達は再びスクールの方へと足を運ぶのであつた。

スクールの廊下、人間体に戻つたラッキークローバー達が歩いていると、目の前に阿部が現れる。

「お前・・・このスクールの生徒ではないな。何者だ？」

とリーダーの男は阿部を殺気をこめながら睨む。

「おいおい、そんな殺気立つた目で睨みなさんな。俺はあんた達に情報を提供しに來ただけさ・・・ファイズについてのな」

そう言つて阿部はこの間の夜に拾つたファイズの落し物、写真をリーダーの男に見せる。

「ッ！？それは！？それをそつちに渡せ！」

そう言つて奪い取ろうとするが、阿部は条件がある、とばかりに人差し指を立てた。

「情報を提供してやったんだから、それなりの見返りは必要だろ？」
「・・・言ってみる？」

リーダーの言葉に阿部はそうだな・・・と考え込み、一つの条件を言った。

「俺と俺の相棒、そして相棒の仲間達をラッキークローバーに入れて欲しい」

翌日・・・

「六斗君、早く早く」

「待つてよワカメちゃん」

朝早く、サイバーカモメスクールの通学路を六斗とワカメは走っていた。そんな時、

「待て」

ラッキークローバーのリーダーと女が現れ、挟み撃ちにした。

「な・・・何ですか、いきなり・・・」

ワカメは何がなんだかわからないようだ。

「この前の夜こんな物が見つかった」

リーダーはそう言つと、ワカメ達の目の前に写真を見せる。

「これは!？」

「私の写真!？」

六斗とワカメは同時に驚いた。何故ならその写真はワカメのカメラで撮った写真だったからだ。これが証拠だ、と言わんばかりの勝ち誇った声でリーダーは言う。

「こんな物を持っているのはこちら辺では磯野君、君だけだからな」

「でも意外。まさかファイズの正体が女だったとはね」

ラッキークローバーの二人がそう言つと二人は自身の身体をオルフェノクへと変えていった。

「お、オルフェノク!？」

ワカメは逃げ出そうとするが足がすくんで動けない。そんなときだった。

「ワカメちゃんには・・・指一本触れさせない！」

そう言つて六斗は持つていたカバンから鉄製のベルトを取り出し、それを自分の腰に装着し立ち上がる。そしてポケットからケータイを出しそれを開くと直ぐ様5の数字を三回とエンターキーを押した。

『スタンディングバイ・・・』

「なっ！光、貴様・・・」

電子音が響いたほうを見て「オルフェノクは驚愕の声で言う。

「変身！」

『コンプリート！』

ケータイを閉じバックル部分にケータイをセットすると、六斗の体に赤い線が走り、眩い光がほとばしる。オルフェノクたちも、ワカメもあまりの眩しさに目を背ける。やがて光が収まり、ワカメが見た物は・・・

「え・・・？六斗君まさか貴方が・・・」

「見つけたぞ・・・ファイズ！」

ワカメは啞然とした表情で、オルフェノク達は怒りのこもった表情で六斗を見る。今の六斗の体は赤いラインの入った黒鉄の鎧を纏い金色の眼を輝かせるライダーとなっていた。そう、仮面ライダーファイズは六斗だったのだ。

「行くぞ・・・オルフェノク！」

ファイズはそう言つと、オルフェノクたちに向かって駆け出していた。

一方その頃・・・

「まだ来てない？六斗とワカメが？」

ネスが信じられないといった感じでカツオに聞く。

「ああ、あいつ等僕より早く学校に言ったのに来てないんだ。何か事故に巻き込まれてなければいいんだけど・・・」

ワカメにファイズの噂を聞きそびれたネス達は噂を聞こうとしてワカメを探そうとしていた所、同じくワカメを探していたカツオに出

くわし、ワカメと六斗が学校へ来ていないことを聞いたのだ。

（嫌な予感がする・・・まさか、あいつ等ファイズの正体を突き止めたのか?!もし、六斗とワカメのどちらかが、ファイズだとすれば・・・2人が危ない!）

そう考えるとネスはジェフ、マリオをつれて、ワカメ達の下へと向かった。

その頃・・・

「ハッ!セヤア!」

「ゼアアアッ!フン!」

オルフェノク達と戦っていたファイズは不利な状況に立たされていた。2対1というのもあるが、元より相手の個々の能力が若干ファイズを上回っていた為、ファイズは防戦一方のまま追い詰められていた。

「ウグッ・・・うおおっ!」

「六斗君・・・がんばって!」

必死に戦うファイズを見ながらワカメは応援を送るが・・・

「遅い、がら空きだ!」

ドゴオ!

「うぐあっ!ガハッ!」

Tオルフェノクの放った右ストレートがファイズのアゴを捕らえる。ファイズはそのまま吹っ飛ばされ、

ガシヤアン!

その衝撃でファイズギアが外れてしまい、変身が解け、六斗へと戻ってしまう。

「六斗君!・・・あ!ネスさん」

「大丈夫か?ッ!?六斗、お前がファイズだったのか?」

「とりあえず、助けに行こう!」

ネス達は六斗がファイズだったのを見て驚くも、六斗を助けるため変身しようとするが、

「おつとそこまでだ！」

後ろから声がしたので振り向くと、ワカメが別のラッキークローバーの2人に捕まっていた。

「っ！？デメエ等・・・」

「おつと動くなよ、動いたらこの女の命はないと思え」

マリオがワカメに駆け寄ろうとするが、その2人はオルフェノクへと変化し、爪をワカメの首元に突きつけた。マリオが拳を握り締めているのにオルフェノクの一人が気づく。

「何だ？お前等卑怯だぞってか？俺達は卑怯やラッキョウは大好物だぜ！ヒヤヒヤヒヤ「ちげえ！」は？」

マリオが言いたい事を代弁し、笑うオルフェノクだったが、違うといわれ、頭に疑問符を浮かべる。

「卑怯は俺の専売特許だ！勝手に使っくんじゃねえ！」

「何じゃそりや！っていうか、仮面ライダーが卑怯をしちゃ駄目だろ！」

マリオに言葉にオルフェノクは思いっきり突っ込んだ。そんなオルフェノクを見て、Tオルフェノクは、怒鳴る。

「何やってるか！貴様等！」

「まったく・・・、でも何はともあれ貴方は終わりねファイズ」

そう言つて女のオルフェノクが剣を取り出し、六斗ににじり寄った。その時、

パアアアアアアアアアアアッ！

「ん？なん・・・ダンスッ！」

「トダナっ！」

謎の音と共に、デンライナーを銀色にした電車が現れ、オルフェノク2人を吹っ飛ばした。その拍子にワカメは地面に倒れてしまう。

「！？何だ？」

これにはネスもTオルフェノクも驚きを隠せないようだった。その電車から、阿部、ハルヒ、キヨンが現れる。

「いやあ、ごくろーさん」

そう言う和阿部は女のオルフェノクをどかすと、ファイズフォンとベルトを拾い、ふうん・・・と鼻を鳴らす。

「これがファイズのベルトねえ……。どうやらそこに倒れてるのがファイズの変身者って所か？」

「ああ、そうだ」

と何が起こっているのか解らない六斗の代わりにトオルフェノクが答えた。阿部はうなずくと、何を思ったのか六斗を抱え上げる。

「さてと・・・、ファイズのベルトと変身者も見つかったことだし・・・」

そう言う和阿部はトオルフェノクを見て続ける。

「お前はもう用済みだ。長門！」

そう言う阿部、六斗とファイズのベルトを電車にいる長門のほうへと投げ、長門はそれをキャッチする。

「なっ！貴様・・・裏切る気か！？」

とトオルフェノクは怒りをあらわに阿部を睨んだ。

「生憎だが俺は目的の宝たからのためなら裏切れることもする奴なんぞね。

行くぞ、ハルヒ、キヨン」

そう言う和阿部は銃のようなものを取り出す。ハルヒたちもうなずき、ハルヒは阿部と同じ銃のようなものを、キヨンはデンオウベルトに似たベルトを巻く。

「さあて、暴れるわよ！用意はいい？キヨン」

「ああ、いつでもいいぜ。お前も容易はいいよな・・・『銀時』」

阿部とハルヒはカードを銃のようなものに装填し、キヨンはベルトの銀色のボタンを押し、電車の定期入れのような物を取り出す。

『カメンライドウ・・・』

「『変身！』」

『ディエンド！』

『ディギンズ！』

『シルバーフォーム！』

阿部とハルヒが引き金を引き、キヨンは定期入れをベルトにタッチ

する。するとどうだろう、阿部とハルヒの持つ銃のようなものから、複数のビジョンが現れ二人を中心にするように辺りを駆け巡っていき、そしてビジョンが二人にそれぞれ重なると、それはアーマーとなり最後に上空に浮かんでいた紋章がプレートとなり二人の仮面へと刺さっていった。そして全てのプレートが刺さり終わると阿部はシアンカラーの仮面ライダーに、ハルヒはサンライトイエローカラーの仮面ライダーとなった。一方のキヨンは、電王のプラットフォームのような姿となり、その上にさらに、銀色のアーマーと銀色のデンカメンが装着され、いつの間にか現れた「洞爺湖」と彫られた木刀を手に持った。

この仮面ライダーは一体何なのか・・・そして、ネス達の運命はいかに！？待て、次回！

どうでしたか? 前回のあとがきで、もう一つの作品と混ざっている
とってただけど・・・ファイズの変身者でもある六斗君。実は『ロ
ックマン』をモデルにしたんです。え? それじゃあ解らんって? す
いませんでした。

今回はディエンドたちのバトルシーンとなります。お楽しみに!
それでは (owo) ノシ

第18話「555編その3 所で俺のディエンドライバーを見てくれ。コイツを

5ヶ月もお待たせして本当にすいませんでした。他の小説やリアルの方が忙しかった物で申し訳ありません。

今回も相変わらずのグダグダっぷりですが温かい目をお願いします。ではどうぞ。

第18話「555編その3 所で俺のディエンドライバーを見てくれ。コイツを

「ディエンド・・・ディギンズ・・・それに銀王だと・・・」

ネスは目の前の戦士を見てそう呟く。ディエンドはまあそう言うことだ。と肩をすくめながら答え、

「ま、見てな。コレが俺の戦い方だ」

「アンタ達も見てなさい」

ディエンドとディギンズはそう言うと、オルフェノク相手に戦闘を開始する。その動きは、とてもすばやく、オルフェノク達を翻弄していく。そんなディエンド達とは裏腹に・・・

「あー、ダリー。俺が出る必要ないんじゃないかね？」

『銀時、お前もやるんだよ！』

銀王は、寝転がりディエンド達の戦いを見物。キヨンが、それに対しつつこむも、

「やだよ。メンドクセーし、戦っても俺が痛いだけだし、それに一文の得にもなんねーし。不毛だよ不毛。やってらんねー」

銀王の中にいる『銀時』と呼ばれる人格は全く動こうとしなかった。というか愚痴ばかり言っている。

『戦うなら特大のパフェをおごってやるんだがな』

ガバッ！

「デメエらア！よおーく、見とけよ！この俺の戦いっぷりを！」

キヨンの一言を聞いた、銀王はとっさに起き上がり、木刀のような形のデンガツシャーをネス達に突きつけ、言う。ちなみにコレを見たネスが「乗せられやすいやつ・・・」と呆れ混じりにつぶやいたのは言うまでもない。

「オラア！ハルヒイ！阿部エ！そいつ捕まえて俺に渡せえ！」

「私に命令するんじゃないわよ！死刑にされたい！？」

「お？オルフェノクとやる気になったかい？銀王」

ディギンズとディエンドは口々にそう言いつつも、オルフェノク

『コスギ』この4人であった。

「な、仮面ライダーやいろんなキャラを呼び出しやがった!？」

「しかもあの二人はニコニコ動画で有名な魔理沙とコスギじゃないか！写メ撮っておこう！」

ネス達は突如現れた仮面ライダーやニコニコキャラを見て驚きの表情である。そんな中、オルフェノクとディエンド、ディギンズが召喚した戦士達の戦いが始まった。ちなみに召喚した当の本人は高みの見物である。

「さあ！行こうか！華麗に激しくウ！」

ザシュザシュザシュ！

[illegible]

ある所では、レイがギガンティッククローでオルフェノクに怒涛のラッシュを叩きこみ。

「王の判決を下すッ！死刑だ！」

ビシイ！

「きゃあああああっ！？は……恥ずかしいこの格好……く、悔しいっ！」

サガは女のオルフェノクをジャコーダービュートモードで亀甲縛りにする。ちなみにそれを見てジェフが興奮したのは言うまでもない。

「女ごときで俺を倒せるとおm「マスタースパーク!」グフア!」

「オルフェノクも2人のニコニコキャラと死力を尽くして戦うが、魔理沙のマスタースパークで吹っ飛ばされた上に……」

GAY BARRRRRRRRRRRRRRR
RRRRRR!!!

メキメキメキ・
・
・

「痛ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

TDNコストに閉節技を決められた。そして……

「エロいなあ……」

「な……！？何をすゝめrアツー！」

と全年齢では見せられないような行為をされましたさ。

まさに一方的な蹂躪である。それを見て、ネス達は恐怖（特にDNコスギ）を感じざるを得なかったが、ふと見ると、だらんと、気絶している六斗の腕が見えた。長門等はこれに気づいていない様子であった。

「（しめた・・・）サイコキネシス！」

ネスはそう心の中で呟くと、サイコキネシスを使い、六斗とファイズギアをこっちに引き寄せた。

「よし！今のうちに逃げ「待ちな！俺の宝は渡さないぜ！」チツ、気づかれたか・・・、ワカメちゃん！六斗を連れて早く逃げろ！」

六斗を取り寄せ、逃げようとするが、ディエンドに気づかれてしまう。さらに悪い事にオルフェノクの一体がこっちへと向かってくる。ネスは六斗をワカメに託して、オルフェノクに向かい直ると、

「行くぜ、ジエフ！マリオ！」

「分かった！」

「ヤッフー！了解だぜ！」

『カメンライドウ・・・』

「「「変身！」」」

『ディケイド！』

『ディアード！』

「さあて、かかってこいや！」

カードをベルトに装填し、ネスはディケイド、ジエフはディアードに。そしてマリオはクウガに変身する。それと同時にワカメは気を失っている六斗を担ぎ、安全な場所へと避難した。

そんな中、ディエンドたちとオルフェノクの戦いは終焉を迎えようとしていた。

「くっ・・・、このままでは全滅だ・・・お前等後は任せるッ！！」

「「「ってリーダアアアアアアアアアアアアッ！！！！何一人で敵前逃亡してんだお前エエエエエエエエエエッ！！！！？」」」

追い詰められたTオルフェノクはTDNコスギに犯られたケツを押さえながら仲間のオルフェノクを見捨て、一目散に逃げ出す。それを見て、涙を滝のように流しながら叫び声を上げるそれと同時に・

ファイナルアタックライドウ・・・

『フルチャージ』

ディエンドとディギズはカードを装填し、銀王はライダーパスをベルトにセタッチする。そして・・・

『ディエンド!』

『ディギンズ！』

「くたばりやがれエエエエ!!!」

「「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!?」」」

電子音と銀王の気合と共に放たれた、2つのデイメンションシュートとエネルギーを纏ったデングツシャー木刀モードを一閃させる技『エクストリームシルバースラッシュ』を2体のオルフェノクにブチ当てる。2体のオルフェノクは蒼白い炎を上げて爆発したのだ。つた。

そんな中、ワカメと六斗は広場の中央にある噴水へと避難していった。

「ここまで来れば・・・大丈夫かな？」

「う」

「六斗君……気がついたんだ」

そう言うワカメの腕で六斗は目を覚ます。それを見たワカメは嬉しそうな表情で見ていた。そこへ、

「フフフ……見つけたぞ……」

運の悪い事に、トオルフェノクがそこへやって来た。ちなみに未だケツを抑えているが気にはならない。

「う・・・嘘・・・」

「ファイズ、貴様にやられた同胞の恨み晴らさせてもらおう！死ぬエ
！！！！」

愕然とするワカメをあざ笑うかのようにTオルフェノクは爪を振
り下ろす。・・・だが、

ガシィ！

「な！？」

「え・・・？」

その爪は六斗とワカメに届くことはなかった。何故なら六斗がそ
の爪を掴んでいたのだ。それだけではない。

「うっ・・・うおおおおおおおっ！！！！」

獣のような雄叫びを上げ、六斗の体が徐々に灰色となっていく。

そして、狼のような異形、ウルフルフェノク（以下Wオルフェノ
ク）へと姿を変えるのだ。

「う、嘘・・・、六斗君・・・」

それを見たワカメは啞然としたような表情で見るしかなかったの
だった。

「ネス！あれを見て！」

オルフェノクと戦っている最中ディケイドはディアードがそう言
って指差す方向を見ると、そこには六斗がWオルフェノクに変身し、
Tオルフェノクと戦っている光景が見えた。

「ん・・・？アイツが犬のオルフェノクに・・・！？」

「犬じゃなくて狼だよ・・・。まさか六斗君がオルフェノクだった
なんて、どうりでファイズギアを使いこなせる筈・・・ってファイ
ズギアを渡すの忘れてた！」

それを見たディケイドの一言にディアードはツッコむと、ファイ
ズギアを渡し忘れた事に気づき、頭を抱えた。そこへ・・・、

「いい男は逃げられちまったが・・・、ファイズギアはお前らが持
つてたようだな。それを渡してもらっせ」

2体のオルフェノクを始末し終えたディエンド一味がこちらにや

つて来た。

「やなこった。コイツは六斗^{アイツ}にとって大切な物だから」

ディエンドの申し出を断るディケイド。ほう・・・そうかい。とディエンドは言う。

「でも良いのか？俺は誰だろうがお構いなく戦^ヤつちまう男なんだぜ？」

そういつつ、ディエンドはカードを一枚取り出し、ディエンドライバーにスライドさせる。同じく、ディケイドもライドブツカーガンモードからカードを取り出して、ディケイドライバーにセットさせた。

「上等だ・・・！」

『アタックライド・・・ブラスト！！！！』

その言葉を引き金に互いの銃口からエネルギー弾が飛び出し、ぶつかり合う。そして、ディアードとディギンズ、クウガと銀王もまた戦いを始めるのだった。

オルフェノクとディケイドファミリ、そして新たに現れたディエンド、ディギンズ、銀王一味の三つ巴の仁義なき戦い。果たして生き残るのは一体誰なのか？そして、六斗とワカメの運命はいかに！？

続く・・・。

第18話「555編その3 所で俺のディエンドライバーを見てくれ。コイツを

いかがだったでしょうか。

ずっと、『ディケスマ』の続きを書こうと思っていたのですが、リアルの方が忙しく、他の小説の更新もあったもので中々投稿できずにいました。本当に申し訳ありません（土下座）

今回は、ディケイドチームVSディエンドチームの激闘ですので楽しみに待っていてください。

それでは（owo）ノシ

第19話「555編その4 白熱！ディケイドVSディエンド、俺と一緒にやれ」

今回はボーボネタやエロネタが多数あります。苦手な方はそれを見ないで飛ばした方がいいかも・・・（汗）

相変わらずのグダグダっぷりですが温かい目をお願いします。
銀時「ディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ、始まるぜ」

前回のあらすじ。

本性を表し、Wオルフェノクとなつた六斗はワカメへとにじり寄る。

「い、嫌・・・止めて六斗君」

「ゲツヘツヘツへ・・・」

Wオルフェノクはいやらしい笑みを浮かべると、ワカメの服を切り裂いた。ぷるん。と大きめな胸が露となる。

「きゃああああああつ！！」

その泣きながら胸を隠すワカメ。それに興奮したのかWオルフェノクは雄叫びを上げるとワカメを押し倒す・・・。

「ちよつと待てエエエエエエエエエエエエツ！！！何嘘書いてんだこの作者アアアアアアアアアアアアツ！！！真面目に書きやがれ！！始めてこの小説をみる人に誤解与えちまうだろ！！？」

上記のあらすじに青筋を立てながらツツコむ犬っこr・・・じゃなかったWオルフェノク。

「おいコラ！今犬つて言おうとしただろ！？」

「あんまり地の文にツツコむと読者が引いちまうだろ？」

そんなWオルフェノクを諷めるようにTオルフェノクは言うのであつた。ちなみに戦闘そつちのけである。そんなTオルフェノクに、「ちゃんと戦いましようリーダー」

とTオルフェノクとは別に生き残っていたロブスターオルフェノク（以下Rオルフェノク）はツツコムのであつた。

そんな両者はさておき、ディケイド組とディエンド組は激しい戦いを繰り広げていた。ディケイドとディエンドがライドブッカーとディエンドライバーで鏖迫り合いをし、ディアードとディギンズが

激しい銃撃戦を行い、クウガはドラゴンフォームとなって銀王と打ち合いをしていた。

「ほお・・・やるねえ。そのアンタの強さ・・・ゾクゾクしちまうぜ」

「ハッ！そうかい・・・」

ディエンドの言葉を鼻で笑いながらディケイドはそう言うと、ディエンドを引き離しカードを引き抜いてディケイドライバーに装填させる。

「なら、今度は違う意味でゾクゾクさせてやるよ！！！」
『アタックライド、ブラスト！』

そう言ってライドブッカードをガンモードにすると引き金を引きディエンドに向かって弾を発射する。だがディエンドは動じた様子も見せず、それをディエンドライバーで撃ち落した。

「俺は攻め派だからこのまま受け続けるのは症に合わないな・・・こっちから行くぜ」

そう言って反撃を開始するディエンド。

「うおっ！？・・・所でよ・・・お前らファイズギアを一体どうするつもりなんだ？」

ディエンドの攻撃をかわしながらディケイドは問う。

「さあな、俺はファイズの変身者にしか興味はないが、ハルヒの言う事だとある企業が作った究極のお宝らしいぜ？」

「宝・・・だと？」

ディケイドの言葉にああ。と頷くディエンド。

「世界には俺達の想像を遥かに超えたのお宝が存在するって話だ。

まあ、俺はいい男にしか興味はないんだが・・・ファイズギアを手に入れないとハルヒが五月蠅いんでね。さっさと渡してもらっぜ」

「はっ！なんだかんだ言っておきながら泥棒だろうが。そんな奴らになおさら渡したくないぜ」

そう言ってファイズギアを渡すよう言うが、ディケイドは首を縦に振らなかった。

「そうかい。なら力づくで奪うまでだな」

「させるかよ！」

殴りかかって来るディエンドにディケイドはそう言ってライドブツカーソードモードで斬りかかるのであった。

「ファイズギアを渡しなさい！渡しなないと死刑よ！！！」

「誰がやるかッ！！！」

その一方ではディアードとディギンズが銃撃戦を繰り広げていた。ディギンズの銃撃をかくぐりピンポイントで狙うもそれを銃弾ではじかれる。まさに一進一退の攻防であった。

（これじゃ埒が明かないわね・・・そうだ！）

ディギンズは何かを思いつきディアードに言った。

「もしファイズギアを渡してくれたらみくるちゃんのおっぱいを揉ませてあげるのにな」

「な・・・何ッ！本当なのかそれはッ！？」

なんとディギンズは自分の仲間であるみくるを餌にファイズギアを取ろうと言う戦法に出た。それを聞いたディアードは驚愕の表情でディギンズを見る。

「勿論、運が良ければ、ぱふぱふをしたりあるいはあんな事やこんな事まで・・・」

「ぱ、ぱふぱふ・・・あんな事やこんな事・・・」

ディギンズの悪魔の誘惑に困惑するディアード。果たして彼はファイズギアを取るか・・・それともみくるのおっぱいを取るか・・・。

「喜んで差し出しますッ！！！」

みくるのおっぱいであった。鼻息を荒くしファイズギアをディギンズに差し出すディアード。ディギンズは『計画通り』と言いたそうな顔でファイズギアを・・・、

『ファイナルアタックライドウ・・・ディディディケイド！！』

！！

「何やってんだメエエエエエエエエエエツ!!!!!!」

「グヴォアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!?」

受け取る前にディケイドのディメンションキックを受けディアドが吹っ飛ばされてしまうのであった。しかもそのままディアドはギンライナーへとつつこんでしまう。

「あっ!?!」

「全く油断も隙もない」

手放したファイズギアを取ろうとするが、ディケイドがキャッチした為失敗に終わってしまった。

「それを渡しなさい! 渡せばみくるちゃんのおっぱいを・・・」
「悪いが、俺はポーラのおっぱいしか興味ない。物でつろうつたってそうはいかねーぞ」くっ・・・」

再びみくるで釣ろうとするディギンズであるが、ポラー筋のディケイドには通用しなかった。悔しそうに顔を歪めるディギンズであった。

一方のクウガと銀王の戦いは更にヒートアップしていた。

「うおおおおおおおおおっ!!!!!!」

「イヤッフウウウウウウウウ!!!」

ぶつかりあうドラゴンロッドとデンガッシャー木刀モード。何回か打ちあった後、つばぜり合いの形で睨みあう。

「ほお・・・やるじゃねえかアンタ」

「はっ。伊達にカメ共やグロンギを相手にしてる訳じゃねーんだよ」
そう言うとお互いにやりと仮面の奥で笑い、距離を取る。どう言う手に出るか・・・。銀王はそう胸中で呟きながらクウガを見る。
そこへ、

『ねえねえ銀ちゃん、キヨン』

『神楽か? どうした?』

銀王の意識の中に神楽と呼ばれた少女の声が響いた。それにキヨンが応答する。

『ワタシも久々にひと暴れしたいアル。変わってヨ』

『まあ、俺は良いが・・・どうする銀時?』

どうやら神楽も戦いたいようである。どうするか銀王に問うキョ
ン。

「ま、いいんじゃないの? ちょうどどうするか考えてた所だしよ・
・。行くぜ」

そう言くと、ベルトにある赤いボタンを押し、ライダーパスをセ
タッチした。

『カゲラフォーム』

ベルトの電子音と共に銀王の体が変わる。姿はどこか電王のアッ
クスフォームを思わせるフォルムであるが違うのは赤と黄色のカラ
ーリング。頭にはまるい物が取り付けられており、何故か少し縮ん
でいる。そして何よりも違うのは・・・、

「ブワハハハハハハ!! お前の鼻をもぎ取って饅頭にしてやろう
かアアアアアアアッ!!!?」

「何だ!? アイツ女になっちまったのか・・・ってうおっ!?!」

この少女と思わせる声音である。銀王の突然の変貌に驚くクウガ
だが、咄嗟に振るわれた拳に反応し、それを避ける。すると・・・、
バゴォ!!!!

近くにあった木が真つ二つに折れているではないか。もし当たっ
たのが木ではなく自分であつたら、そう考えるとゾツとするクウガ。
「こりゃ・・・防御力を固めねーといけないな・・・よし!!!!」

そう言つと、ドラゴンロッドを捨て、何処からか長ネギを取り出
す。そして・・・、

「超変身!!!!」

そう叫ぶと、クウガはタイタンフォームへとフォームチェンジ。

長ネギもタイタンソードへと姿を変えた。っていつか何で長ネギが
剣に変わるんだよ!?

「長ネギじゃない、首領。ツチソードだ」

「何地の文と話してるネ。アンタの相手はこっちだヨ。バカヤ

ロー」

ナレーションにツッコむクウガに半眼で言う銀王。おっとそうだったな。と言うと銀王に向き直った。

「じゃあ、第二ラウンド開始するか。行くぜ!!!」

そう言っただけでタイタンソードを構え、銀王へと向かって行ったのだ。

一方のディケイドはというと・・・、

「そのファイズギアを渡さない!!!」

「やなことだ!」

ガギユンガギユン!

ディギンズに追われていた。飛んでくる銃弾を走りながらかわすディケイド。そこへ、

「おっと、狼君の所には行かせないぜ」

ディエンドが行く手を遮りディエンドライバーで銃撃を行う。それをしゃがんでかわす。

「きゃあっ!何やってんのよ!?!」

「おっと悪いな」

それが後ろにいたディギンズに当たってしまい、ディエンドは謝罪をした。その隙にディケイドはTオルフェノクとRオルフェノク相手に奮闘しているWオルフェノクにファイズギアを投げる。

「六斗!」

「ん?これはファイズギア・・・、ネスさんありがとうございます!よし・・・」

それを受け取りWオルフェノクは礼を言うと、携帯を取り出しキーを入力した。その隙に襲いかかって来るTオルフェノク。そこへ・・・、

ドガアアアアアアアアアアン!!!!

「ぐばああああああああ!!!?」

何処からともなくオートバジンが無人で走って来てTオルフェノ

クを撥ね飛ばした。きりもみ回転しながら地面にたたきつけられる
Tオルフェノク。

「り、リーダー!!!」

うるたえるRオルフェノクの間をつき、Wオルフェノクは六斗に
戻るとオートバジンにまたがり、

「ワカメちゃん!早く乗って!」

「・・・六斗君がオルフェノクだったなんて・・・」

「あ・・・! (し、しまったアアアアアアアアッ!!! 僕、ワ
カメちゃんにオルフェノクの姿を見せちゃったの忘れてたアアア
アアアアッ!!!)」

ワカメに乗るように促すが、おびえているワカメを見て、目の前
で変身した事を思い出し胸中で頭を抱える。・・・と言うか今更思
い出したのか六斗よ・・・。

「貴様!よくもリーダーを!!!」

そんなこんなしているとTオルフェノクがやられ、激昂したRオ
ルフェノクが六斗達に近づいてくる。こうしてはいられない。そう
思った六斗は・・・、

「ワカメちゃん!ゴメン!」

「六斗く・・・きやつ!」

一旦オートバジンを降り、ワカメを抱きかかえオートバジンの後
ろ側に乗せると、再びまたがって何処へと走り去って行ったのであ
った。

「あ!? 私のお宝が!馬鹿阿部、アンタの所為よ」

「そう怒りなさんなハルヒ」

フェイスギア

宝を逃した事によりプリプリ怒るディギンズにディエンドはなだ
めようとする。そこへ・・・、

「き・・・貴様等・・・も、もう許さん・・・」

オートバジンに撥ね飛ばされボロボロのTオルフェノクがRオル
フェノクと共にディエンド達ににじり寄って来た。

「やれやれ・・・しつこいな・・・。ハルヒここは一旦離脱するぞ」
『アタックライドウ、インジビブル!』

そう言うカードをスライドさせ溶け込むように姿を消した。

「あ!?!ちよつと・・・もう!?!」

『アタックライドウ・・・インジビブル』

ディギンズはいきなり消えたディエンドに怒りながらもカードをスライドさせ同じく消える。

「き、消えた!?!ど、何処へ・・・」

「ん・・・?」

突然消えた事に戸惑いを隠せないRオルフェノク、ふとTオルフェノクは突然ギンライナーが動き出した事に気がつく。しかもそれは・・・、

「こつちに向かってくるウウウウウウウウッ!?!?」

オルフェノク達に向かってくるではないか。咄嗟に逃げようとするが・・・、

ドガアアアアアアアアアアアアン!?!

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアッ!?!?」

そのまま撥ね飛ばされるのであった。特にTオルフェノクはケツを掘られたり、オートバジンに轢き逃げなどをされているため踏んだり蹴ったりである。

クウガと銀王が激闘を繰り広げている中、2人に割って入るようにギンライナーがやって来た。

「撤収するわ。早く乗りなさい」

「えゝ、まだあのクワガタ野郎と決着がついてないヨ。まだ戦いたらないアル」

変身を解いたハルヒが撤収を促すも、不満たらたらの様子でぶー垂れる銀王。

『あのな、神楽。俺達は戦いに来た訳じゃないんだぞ・・・。ディケイド達の手元にファイズギアがない以上奴らに用は無い。さっさ

と乗ろうぜ』

「ぶゝ．．．」

キヨンの説得により、未だ不満は残るものの銀王はギンライナーに乗った。そして、そのまま何処へと走り去って行ったのであった．．。

「ち．．．行っちゃったか．．．」

走りゆくギンライナーを見ながらディケイドとクウガは変身を解くと、先ほどギンライナーに撥ね飛ばされ星になったＴオルフェノクの他に生き残ったオルフェノクはいないかと、あたりを見回し安全を確認する。

「ネス！大丈夫だった？」

声が聞こえ、振り向くと、ポーラ達がネスに駆け寄って来た。

「ポーラか、ああ。大丈夫だ、しかし六斗の正体がファイズでしかもオルフェノクだったとはな」

ポーラの問いにネスは頷くと、六斗の事を口にした。

「やっぱり、六斗君がファイズだったんだ．．．」

「所でだ。何故六斗は仲間であるオルフェノクと戦っているのだ？それが分からないのだが．．．」

「さあな．．．」

プーの問いに首をかしげるネス。ふと、ルイージが気になった事を聞いてきた。

「そう言えばジェフさんはどうしたの？」

「．．．．．」

ルイージの問いにネスとマリオは顔を見合わせると．．．、

「あ、忘れてた」

「忘れてたんかいイイイイイイイイイイイッ！！！！」

異口同音で答える。ルイージのシャウトがこだましたのであった．．。

その頃、ギンライナー内部では・・・。

「ふいゝ、疲れたあ・・・キヨン、あとでパフェ買ってきて」

「酢こんぶも買ってきてヨ」

「はいはい・・・（はあ・・・俺の財布が・・・）」

けだるげに座席に座っている銀髪の男、銀時とチャイナ服を着た少女、神楽にパフェと酢こんぶを買うように頼まれるキヨン。頷きながらも日々少なくなっていく財布を見てため息をつく。一方の阿部とハルヒは、どうやってファイズギアを奪うか会議をしていた。

「あれ・・・？　そう言えば」

ふと、何かに気付いたのか眼鏡をかけた地味そうな少年が口を開いた。

「オイコラ、何が地味そうな少年だコノヤロー！！！！」

「おい新八。^{しんぱち}地の文につっこむなよ。・・・でどうしたよ」

ナレーションにつっこむ少年、新八に銀時はそう言っていると、先ほど言った事について聞いた。

「僕らがギンライナーに乗ってからみくるさん達を見かけませんけど・・・何かあったんでしょうか？」

「そう言えばそうね・・・いつもならみくるちゃんや長門、古泉君が出迎えてくれるはずなのに」

頷くハルヒ。確かにそうである。いつもなら長門やミクルが出迎えてくれるはずなのに・・・、そう思っていると、

「あつ！！！！」

ディアドと名乗る仮面ライダーの事を思い出した。ディケイドに蹴り飛ばされギンライナーにつっこんだのだ。まさか、と思いハルヒは別車両のドアを開ける。・・・そこには、

「やあ、お帰り」

布団を敷き、そこでキリツとした表情で出迎える全裸のジェフと・・・、その傍らで毛布にくるまりながら滝のような涙を流すみくる。荒い息を吐きながら同じく毛布にくるまる長門。そして同じく毛布にくるまりながら「や・・・やりますね・・・」とうつぶせになっ

ている古泉がいた。毛布にくるまっていてよくわからないが、全員全裸である。ディケイドに蹴り飛ばされ、ギンライナーにつつこんだ後、ジェフはみくるを見つけそのままその場にいた長門達を巻き込んで『禁則事項』^{パンツレスリング}をやらかしたのである。さすが変態^{ジェフ}と言ったところか・・・。

「……何やってんだデメエエエエエエエエエエッ！！
！……」

「ぎゃああああああああああああ！！！」

だが、後でハルヒ達から制裁を受け、ギンライナーから放り出されたのは言つまでもない。

その頃、六斗とワカメは、大広場から離れた所でオートバジンを降りていた。

「……」

「……」

お互い沈黙しており気まずい雰囲気あたりに漂う。理由は、六斗がオルフェノクだとワカメにばれてしまった事だ。

――誰だつて嫌いだろ？人間のふりした化け物なんか。

（ど……どうすればいいんだろう……こういう場合）

ワカメの兄であるカツオの言葉が六斗に重くのしかかりどうすればいいのか戸惑う。そんな時だった。

「ねえ、六斗君」

「ひゃ、ひゃい！」

ワカメから声をかけられ、驚きのあまり噛んでしまう六斗。そんな事は気にせずワカメは問うた。

「いつからオルフェノクだったの？」

「サイバーカモメスクールに入る前に……交通事故で一回死んだんだ。その時にオルフェノクになった」

消え入りそうな声で答える六斗。

「どうして言わなかったの？言つてくれればよかったのに……」

「好きだったから・・・ワカメちゃんの事が」

悲しそうな表情で六斗に詰め寄るワカメに俯きながら六斗は消え入りそうな声で答える。

「え・・・」

聞き返そうとするワカメに何も答えず、六斗はオートバジンに乗り、何処へと姿を消したのだった。

ワカメと別れた六斗は綺麗な水が流れている川の上に架かっている橋の上にいた。そこで、六斗はファイズギアの入ったトランクケースを開く。

オルフェノク

「俺は・・・化物だから・・・ワカメちゃんといちゃだめなんだ・・・
だったら・・・」

そう言くと、トランクケースを閉め、

「こんなものなんか必要ない！！！」

思いっきり投げ捨て何処かへ走り去って行った。

「あいてっ！？何だ・・・このケースは・・・」

トランクケースは全裸でギンライナーに放り出されたジェフの頭に当たった。頭にたんこぶを作りながら、トランクケースをしげしげと眺めるジェフ。そのまま、トランクケースを持ってネスの家に帰るのであった・・・。

オルフェノクと人間、結ばれぬ事に絶望し、ファイズギアを捨てた六斗。果たして六斗は立ち直る事が出来るのか？ファイズギアを巡るデイケイドとデイエンドとの戦いの・・・そして『555の世界』の行方はいかに！？待て、次回！

つづく・・・。

第19話「555編その4 白熱！ディケイドVSディエンド、俺と一緒にやろ

いかがだったでしょうか？今回ボーボネタ（たとえば嘘の前のあらすじとか）を入れて見たのですが・・・、えらいカオスな事に・

・・・どうしてこうなった（お前の所為だ作者）

そして、ジェフの毒牙にみくる、長門、古泉（えが犠牲に・・・、特にみくるファンの皆様申し訳ございません（土下座）

さて、次回は555編を完結させる予定ですので楽しみに待っていてください。後、ルイージバリアも存分に出させますので（鬼）

では、次回もお楽しみに、それでは（owo）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3781i/>

ディケイド・オブ・スマッシュブラザーズ

2011年8月5日07時18分発行